
世界革命戦記

ペカチュウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界革命戦記

【Nコード】

N1581W

【作者名】

ペカチュウ

【あらすじ】

ダーク団との戦いが終わって2年、新たなポケモンマスターの誕生から6ヶ月の時が流れた。

再び世界に新たな災いが降り懸かろうとしていた……

トレーナー達の新たな戦いの、始まりでもあった……

P r o l o g u e (前書き)

新小説です！どうぞお楽しみ下さい！

Prologue

西暦2685年、イッシュ地方と交流の深い土地…ギリ阿斯地方。

この地方は二つの皇国で開拓をされ、当時の両国は栄えられていた。

そう、あの“炎”が無ければ…。

某年、3月17日

その国、ウェーズ王国は凄まじい炎の海にあった。

王国軍はテロリスト達を鎮圧させようと、ポケモン同士の争いが勃発していた。

不死鳥を模した鳥ポケモンがボスゴドラを焼き払い、

サイの様な敵つい印象のあるポケモンがサイドンを攻撃、

プテラとはまた違うプテラノドンの様なポケモンが炎を吐き、町を王国を焼き尽くす。

「怯むなあ！王を討ち取れえ！」

テロリスト達は戦く様子を見せず、銃を構えて城下町を駆けていく。

「ええい退け！皆の者、この我輩を守護するのだ！」

「王様！ですが国民の避難がまだ…！」

兵士が焦って国王に問うが、王は決死の表情を見せて兵士を威嚇した。

「最早どうでも良い！どのみち、この国は直に滅ぶ！」

この国王は国や国民よりも自分の身が大切だった、この欲深い王は必死に逃げようとしていた。

「急いで！」

「う、うん」

母の手を握り、9歳の黒髪の少年はぎこちなく走る。彼の首に巻いたペンダントが切れ、床に落ちる。

「あっ！」

皮肉にも少年は母の手を離し、ペンダントが落ちた方向へ駆ける。

「うわあああっ！！？」

紅色の閃光が爆風を引き起こし、少年はその爆風に飛ばされる。うつ伏せに倒れた少年は目に涙を浮かばせ、左腕から流れる血を右手で抑えながら母親を捜す。

しかし母親は既に、息絶えていた。少年は焼き焦げた母を見つめ、左手をガタガタと震わせていた。

「おかあ、さ…ん」

信じられぬ表情で死体を見る目は光を失い、黒煙が立ち込む夜空を見る。ドクンと言う音と共に少年の身体は赤いオーラに身を包む。

「許さない…許さない…！お父さんを、お母さんを、国の皆を——
——返せエエエエエエ！！」

憎しみを纏った炎は尋常ならぬ程に広がり、ポケモンを、人を、死体を、町を、城を、国を焼き尽くしていき、膨大な大爆発を引き起こした。

これを後に“ヴェールの炎”と呼ぶ大事件と名付けられた…。

———その後、私は決めたのだ。国の為にポケモン達を救い、悪しき者達を滅ぼすと…！

その男はペンダントをポケットにしまい、階段を上って屋上に出た。空に段々太陽が昇り、黒髪の壮年の男は憎しみを込めた目で朝日を見る。その拳を突き出し、齒を軋ませる。

「良く見ておけ悪しき人間共、隕石———メテオナイトを揃えた時、このカラドが絶対正義の名の下に…：貴様等を———断罪する！」

その男———カラドの容姿は黒い髪に生え揃えた髭、額に十字型の傷、紫が掛かったローブの舌には黒い礼服。両手には白いハンドグローブを填めている。

「先ずはポケモン界の頂点にたった男———」 “戦の雷帝” ポケモンマスター、貴様からだ」

不適に微笑み、カラドは両手を大きく広げた。

再び、世界は戦禍の渦に巻き込まれようとしていた…。

To be continued

#1 真戦組登場！（前書き）

今回は○魂をモデルにしたキャラ達がメインです、どうぞお読み下さい。

#1 真戦組登場！

西暦2732年 7月12日

カントー地方 ヤマブキシティにある国際警察・カントー支部。

あの忌まわしきダーク団が引き起こした“紫苑色の悪魔”事件から3年の月日が流れた…。

彼等と第3勢力により町の中核であるシルフカンパニーは崩壊されるが、負傷者219名・死者250名、町の半分以上が多大な被害にあった。

だが人々の苦勞の成果が実ったのか、町は破壊される以前の姿に戻った。

「オラァ！金を出せえ！」

ヤマブキシティの銀行、此処は今10人の強盗犯に占拠され、その場にいた人達全員が人質となっている。

「金を出せって言ってるんだよ！？」

「い…幾らでしょうか？」

「そんなの全部に決まってるだろうが！」

ひっと受付嬢は銃を突きつけられ、機器を操作していく。

「動くなよ？もし妙な真似しやがったら、撃つからな」

ギャハハハと下品に笑う強盗犯達、その様子に銀行内の人間達は唯彼等を睨むしか無かった。

「おい、金はこれぐらいで良いよな？」

仲間が札束が入ったバッグを見せ、彼はほう…と笑い、銃を構えて天井に発砲する。

『うわ（きゃ）っ！』

「金は頂いたぜ！じゃあ」

な、と続けようとしたリーダーの主犯格だったが、突然入り口の自動ドアが開いた。

全員が其処を見ると…。

「マシユン？」

ツンベアーの進化前、凍結ポケモンのクマシユンが立っていた。首を傾げるその愛くるしい姿に銀行の女性陣は、顔を赤らめていた。

が、今はそんな状況じゃない。

「誰だお前ええ！」

ツツコミを入れるかの様に主犯はドツコラーの進化系、ドテツコツを繰り出した。

「ドテッコツ、爆裂パンチをお見舞いしろ！」

コンクリートを床に置き、左手を赤くしたドテッコツはクマシユンに向けて爆裂パンチを放った。

危ない！逃げて！と何人かが叫んだ、だが予想外の展開が待っていた。

「クマ」

クマシユンは小さな右手を翳すと、ドテッコツの左手を意図も簡単に受け止めた。

『えええええええっ！！？』

小さな身体から思いがけぬ行動に皆吃驚し、ドテッコツは離そうとするが中々離れない。どういう事だ？とドテッコツが頭を思索している…。

「マシユン」

「ドテェ！？」

小さな身体から想像出来ぬパワーの気合パンチでドテッコツの頬を殴り、

「ぎゃあ！？」

殴り飛ばされたドテッコツにぶつかり、主犯格は倒れ込んだ。

「御用改めである！」

沢山の足音が聞こえたと思うと数人の黒服の男達が姿を現した、人質になっている一人の男が指を指して嬉しそうに叫んだ。

「し、真戦組だぁ！」

「真戦組が助けに来てくれたわ！」

真戦組。

国際警察の中で最も長距離戦や接近戦、白兵戦の為に鍛練された警察官達のみ編成された、特殊武装部隊である。

その武装部隊を結成させたのが局長、コンドウ。そして副帳のヒジカタだ。

「強盗犯、お前達は既に包囲された。降伏しろ」

真戦組1番隊隊長・オキタがメガホンで叫ぶ、その彼の右肩にはさっきのクマシユンが乗っている。

「し、真戦組だと！？何故此処が…」

「！はっ！？」

強盗犯の一人が受付嬢に振り返った、彼はモンスターボールからエレキッドの進化系、エレブーを繰り出した。

「この女ア！余計な事しやがって、電磁波で動けなくしてやれ！」

エレブーは電撃を放ち、受付嬢を痺れさせようとした。

「クマシユン、冷凍ビーム」

クマシユンの冷凍ビームは正確にエレブーに命中、凍り付けのエレブーに驚き、多くの強盗犯が狼狽える。

「お前等は此処までだ。全員、奴等を確保しろ」

『オオオオッ！』

そう言うのと隊員達は一斉に走り出し、犯人達は逃げようと図った。しかし彼等の前では既にお手上げだった。

「午後13時56分、犯人確保した」

連絡用に配給されたポケギアを使用し、オキタは2番隊隊長・ナグウに報告する。オキタの目の前には犯人達が護送車に入っていく姿が確認された。

『良い働き振りを見せるなあ！世の中は物騒な事もあるけど、良い事もあるよな？』

「あ？…嗚呼、新たなポケモンマスターの誕生と各地方のリーグの四天王の変更ね」

この6ヶ月で各地のポケモンリーグ四天王は大きく変更された。

ジョウトリーグの四天王は炎使いのエンザン57歳、

岩使いのキュウコ27歳、

鋼使いのギンガ30歳、

悪使いのトウドウ40歳の4人であったが、エンザンが退任してホウエンのフエンジムリーダーを勤めていたアスナが後任になった。

ホウエンリーグはドラゴン使いのゲンジが隠退し、彼の後をトウカジムリーダーのセンリが継いだ。

シンオウリーグは地面使いのキクノが定年退職、彼女の後にはジョウトのあるトレーナーが勤めると言うが、その正体は謎に包まれている。

『一番驚いたのは、前ポケモンマスターの突然の失踪……彼の姿を地元の警察がトキワの森まで追跡していたが、見つけたのは血塗れの帽子とリュック』

「少し気になるな」

「嗚呼そうそう、お前本部に戻れ。局長が呼びだぞ」

「…あの人が」

午後14時28分、オキタは栗色の髪を触りながら局長のコンドウの前に座る。

「良く帰ったソウゴ、トシ」

隣で寝転がるムーランドを撫でてコンドウが言う、オキタの隣には自分が嫌悪する男——ヒジカタが座っている。

口に枝を咥え、上司のコンドウからはトシと言う渾名で慕っている。辺りからは鬼の副長と言う二つ名で通っている。

「コンドウさん。聞きたいんですけど、何で此奴がいるんですかー？」

「上司に向かって良い度胸だなコラ、後でマトマジューズ飲ませんぞ」

「お断りしまーす」

表情を変えずに互いに罵り合う二人、犬猿の仲である両者の罵り合いにコンドウは溜め息を吐く。

「お前等と呼んだのは他でもない。とある人物の身柄の拘束だ」

机に写真を置き、ヒジカタはその写真を取る。彼はそれを見た途端、目をカッと開いた。

「…コンドウさん、こりゃ何の冗談だ」

「そうでさア、こんなの笑えませんか？」

二人は真剣な表情でコンドウを見る。

「とつつあんがそう下したんだ、仕方あるまい。調査は既にヤマザキが行っている」

汗を誑し、目を開けずに言うコンドウ。彼もとても信じられない様だ。

「…解りましたよ」

二人はスツと立ち上がり、退室していった。コンドウは目を小さく開け、写真を見ている。

その写真には、現ポケモンマスターが写っていた。

今、新たなる物語の幕が上がった。

T o b e c o n t i n u e d

#2 失意の雷帝、動乱の朝日（前書き）

やっと主人公登場です！

#2 失意の雷帝、動乱の朝日

西暦2733年 7月17日

ハナダシティ、カントー地方の川岸が唯一見える町。

先日18歳を迎えた女性、カスミはルリリを抱えてキャモメ達が飛ぶ茜色の空の夕日を眺めていた。

ヘアピンを外して橙色の髪を下ろし、今にも泣きそうな表情で彼女は夕日を見ている。

「サトシの様子が可笑しい…?」

三日前、彼女は愛しい彼の母、ハナコからの電話を受けてその一言に首を傾げた。

「ええ…何時もと変わらないんだけど…何かこう、段々笑顔が少なくなってきた気がするのよ。ご飯を食べ終えたら小さな声でブツブツ言っていて、私も良く解らないんだけど…生きていて良いのか、そう言ってる気がするの」

「え…?」

カスミも弱気な彼の一面を聞き、耳を疑った。

「やっぱりショックだったのかしら、自分が普通の人間じゃない事が」

泣きそうな顔で俯くハナコ、ハッとカスミは気付いた。

「そうかも知れませんが…表面では大丈夫と言っても、内面的には精神的にショックだったと思います」

思い当たったのは去年のクリスマス・イブ、彼は泣きそうな顔つきで自分の存在理由について苦悩を抱えていた。

「よう」

後ろから聞き慣れた声が聞こえた、カスミはそれに動揺する事無く振り向くと自分が呼んだ男——サトシが其処にいた。

彼の肩にはピカチュウが乗っており、ピカチュピ！と挨拶した。

「此処まで来てくれてありがとう、サトシ」

「構わないさ」

用って何なんだ？と訪ねられ、カスミは一瞬睫毛を伏せ、真剣な表情で彼と向き合う。

「この先の岬で久し振りにバトルしない？ポケモンマスターになったとは言え、腕が怠ったら大変でしょう？」

「解った…久々にやろうか」

少し寂しげな表情を浮かべ、サトシはカスミに着いていく。

「使用ポケモンは3VS3のシングルバトル、何方かがポケモンを

3体全て失った方が勝ちよ」

ポケモン研究家・マサキの邸が見える砂浜、二人の男女がポケモンバトルを始めようとしていた。

「行くのよ、ミロカロス！」

「キングラー、君に決めた」

全く覇気の込められぬ声に癪に触るも、カスミはミロカロスに指示を出す。

「ミロカロス、神秘の守りよ！」

「キングラー、堅くなるだ」

キングラーは堅くなるを使用し、カスミのミロカロスのハイドロポンプを防御した。

「……あんだ、何かあったの？」

「…何故そう言える？」

「今のアんだ、心から笑ってないわ」

ミロカロスがアクアテールを放つが、キングラーはクラブハンマーで防御。近距離から破壊光線を放ち、ミロカロスは戦闘不能になる。

次に出したのはギャラドス、サトシはキングラーを戻し、ミジユマルを繰り出す。

「あんたは3年前の戦いの後、全く笑わなくなってしまった…火炎放射!」

「アクアジェット!…俺だってそれは解っている」

涙を潤ませ、彼女はキッと男を威嚇する。

「じゃあどうして!? あんたはどうしてそんな人間に変わった訳!? 自分が普通の人間じゃないから? 自分がホウオウの血を持っているから!？」

「……」

3年前のヤマブキシティの決戦で見た父を思い出し、サトシは顔を俯きながらミジュマルを戻した。カスミは彼の襟を掴み、彼の頬を平手打ちした。

「……つつう」

「今のあんたを見てられないわ…ポケモンマスターになって天狗になる所か、全くやる気を無くしたあんたは、マスターの資格なんてない…顔を見せないで!」

頬を触りながら走り去るカスミの姿を見つめるサトシ、彼はその姿が見えなくなるまで注視した。

「……ごめん、カスミ」

「……今の俺はマスター失格だな、人の生命が消えていく世の中

に孤独を覚えた俺を、神様が祝福する訳が無い。

すっと立ち上がり、彼は両手をポケットに入れて歩く。その後ろ姿をピカチュウが着いていく。

「マサラタウンのサトシだな？」

突然の声に足を止め、黒服の男達がサトシとピカチュウを包囲した。男達をかき分け、緑の掛かった黒髪の男が煙草を吸い、サトシの前に姿を現した。

「貴方は…？」

「国際警察所属真戦組副長、ヒジカタだ」

7月18日 AM 08..30

ニビシティにあるニビジム……その隣にはニビポケモン診療所と言う小さな施設があった。

かつてのニビジムリーダー……ポケモンドクター養成学校を卒業し、ドクターの免許を得たタケシは黒色のワイシャツの上に白衣を羽織り、綺麗な朝日を浴びて背伸びした。

「うっくん……今日は良い天気だなあ」

「ラキ！」

「ヴー」

ラッキーとグレッグルも便乗して背伸びする、2匹の頭には看護婦の帽子が被さっていた。

「さて、今日も一杯患者さんの治療に励むぞ！そして…美しいお姉様方のお待ちを期待しようかな」

鼻の下を伸ばしてハートマークを飛ばすタケシ、グレッグルはケツと鳴きながらそっぽを向いた。

その時、隣のニビジムから扉が開く音が聞こえた。タケシが窓を覗くと、血相を変えて自分の弟——三男のサブロウが走ってきた。

「兄ちゃん！大変だよ！」

「サ、サブロウ？どうしたんだ？」

タケシは息を切らす弟に疑問を抱いた、サブロウの右手には皺を寄せた新聞を持っていた。

「何だ、綺麗なお姉さんじゃないのか…」

「言ってる場合じゃないよ！これを見て！！」

勝手に落ち込む兄にツツコミを入れ、サブロウはタケシに新聞を渡した。

しわくちやになった新聞をめくり、タケシは新聞を読んでいく。あ
る記事に目を止めると、新聞を両手が震えだした。

「な……何じゃこりゃああああああっ!!??」

同時刻、ハナダジム。

「そんな……どういう事……!?!」

カスミは衝撃の余り手に持つ歯ブラシを床に落とした、それを気に
せず姉のサクラ・アヤメ・ボタンと共に啞然としながらTVのニュ
ースを見ていた。

「一体どういう事なの……!?!どうしてこんな事に……!?!」

カスミとタケシの元に届いたニュースは一体……?

次回に続く!

T o b e c o n t i n u e d

#2 失意の雷帝、動乱の朝日（後書き）

次回は他地方に視線を移します。

#3 衝撃の記事(前書き)

衝撃の内容が判明します。

#3 衝撃の記事

時は3ヶ月前、4月に遡る。

ホウエン地方・トウカシティジムはかなり荒れていた。

ジムリーダー・センリの四天王推薦が当てられ、ハルカ・マサト・ミツコ・センリの弟子キンジは今後のジムについて苦悩を抱えていた。

センリの後を弟子のキンジに任せて良いのか、それだけでも少し不安だった。

ジムリーダーの検定試験も間近に迫り、一同は焦っていた。

「すみません…トウカジムは此処でしょうか？」

振り向くと、緑色の髪の少年が玄関で佇んでいた。ハルカは一瞬愛しい薔薇の少年と思ったが違う、明らかに顔の輪郭は異なり、優男と言った感じのイメージだった。

「貴方は…ミツル君じゃない!？」

ミツコを嬉しそうに少年——ミツルの肩を抱いた、他の3人は状況が整理出来ず首を傾げてた。

ミツルはこの町の出身で現在は16歳、ホウエンリーグベスト4まで勝ち上がったが惜しくも敗退。その後は故郷に帰らずに未開の土地へと旅立っていった。

事情をミツコから教えられ、ハルカは検定試験に間に合わせる為にミツルとの特訓に付き合った。

あれから現在に至りミツルは立派なジムリーダー、マサトは新米なチャンピオンとして彼との特訓に付き合っている。

「ハルカさん、何処に行くんですか？」

「カナズミシティよ」

そう言って彼女はボールからチルタリスを出す、ミツルはどうしてと訪ねるとハルカは答えた。

「メグミさんって言う、私にコンテストを教えてくれた人に会いに行くの。コーディネーターの引退と、これからの事を報告する為だね」

「そうですか…お気を付けて！」

「ええ」

彼女を乗せたチルタリスは飛翔し、そのまま飛び去っていった。ミツルは大きく手を振り、その姿を見送った。

「昔はポケモンが苦手だったあの娘があんなに…大きくなったわね」
涙を潤ませ、ミツコは成長した遠ざかる娘を見つめる。マサトも涙を拭い、姉の姿を最後まで見つめる。

1時間後、カナズミシティに到着したハルカはメモ帳を見て辺りを見通す。

このままでは埒が明かないと判断し、波導を使おうとした…。

「ハルカちゃん！」

「あ、メグミさん！」

尊敬していた女性が此方に向かって来るのを確認した、その隣には彼女と一緒にいたエイジが微笑んでいる。

ハルカも手を振りながら、メグミに向かって走り出した。

結婚したメグミとエイジはこの町でマッサージ店を開いており、ハルカはその内装にうわあと声を出した。

「可愛いポケモンでラッピングされているんですね…」

「そうかしら？私は遠慮していたんだけど、エイジがね」

「似合うさ、君とポケモン達は引退した今でも輝いているよ」

そんな事無いわよと否定するも、メグミの顔は赤かった。ハルカは少し違和感を覚え、波導を使って思索した。

「もしかしてメグミさん…お腹」

「えっ!？」

「当たり前だよハルカちゃん、丁度3ヶ月だよ」

「…メグミさん、エイジさん、おめでとう御座います！」

ありがとうとメグミとエイジはお辞儀する、そしてハルカは切っ掛けとなった二人を見て全てを話し出す。

「トレーナースクールの先生か…元トップコーディネーターとしての経験を生かす良い機会ね」

「ええ、友達のお母さんがそれを勤めていると聞いて、合っているのかなと思ったんです」

メグミに諭され、彼女は照れながら頭を掻く。エイジはその彼女の反応に笑む。

「頑張るんだぞハルカちゃん」

「私達応援してるわ」

「ありがとう！」

まるで天使の様な笑みを見せるメグミにハルカは頭を下げ、そのまま店を出て行く。丁度ポストに新聞が入っており、彼女は好奇心から新聞を読む。

「————は!?!」

そして、絶句した。

此処はシンオウ地方、トップコーディネーターとして輝くヒカリは故郷の地へ戻り、花の香る町——ソノオタウンを訪れた。

地方特有のお菓子、ポフィン作りを覚えてくれた人——ツボミに会う為だ。

「ツボミさん、お久しぶりです！」

「ヒカリちゃん！」

ロズレイド元気だった？彼女のパートナーに挨拶すると、彼はヒカリに挨拶代わりにブーケ——手で振った。

「TVで見たわ。トップコーディネーター、遂になったのね。おめでとう」

「ありがとうございます！」

ヒカリは年上の美女に頭を下げ、ツボミは優しく微笑んだ。ロズレイドや木の実畑のポケモン達も彼女を祝福している。

「トップコーディネーター、今の私にはそれは通過点に過ぎません。私はコーディネーターの道を貫き通すだけ、その為に次代の子供達にポケモン達の魅力を教え込もうと思います！」

ポチャ！と便乗してポッチャマは胸を張る。

ツボミはフフツと微笑む。その時、TVでニュースが映っていた。ヒカリはTVの方に視線を移した。

『次のニュースです。昨日、カントー地方のハナダの岬に置いて――』

「――え？」

ニュースで流れた映像を見て、紺色の少女の目が揺らいだ。

イッシュ地方・サンヨウシティのサンヨウジム、世界的有名な大富豪、グリーンフィール財閥が経営するレストラン兼ポケモンジム。

此処では多くのお客様がダイナーを頂いており、3人のウェイターを中心に多数の従業員が営んでいる。

青い髪のウェイターはコーン、ヒヤップをパートナーにして清らかな心を持つ。

逆立った赤髪のウェイターはポッド、バオップをパートナーにし3人の中で熱い心の持ち主。

そして緑色の髪のウェイターはデント、ヤナップをパートナーにし、ポケモンソムリエと言う職業を持つ。彼のランクはSランク。

彼等は白い半袖を着て、その下に黒のオーバーオールを身に付けている。

「Main dishで御座います」

『キャーキャー!!』

彼等のファンである少女達は黄色い声を上げる、デントの営業スマイルが彼女達を虜にしていき、コーンとポッドはその様子に呆れる。彼女達は3人に見取れながら料理を味わい、勘定を払っていく。

現在はPM 12…17。デントとポッドはテーブルに座り、ホットミルクを啜っていた。

「そう言えば、もうすぐ此处を離れるんだろ？」

「うん、3月の検定試験でSクラスに昇進したしそろそろジムを離れる事にしたよ。そうだな…3人でいられるのは10月までかな？」

「…お前な、カベルネって娘の気持ちに気付いたらどうだ？」

「?どうしてだい？」

否、何でもねえ。と片手と首を左右に振るポッドの様子にデントが首を傾げた。

するとドタドタとコーンが慌てて走ってきた。

「デント!ポッド!TVを見て下さい!」

『え?』

表情からして唯事ではないコーンに疑問に持ち、ポッドとデントは天井に設置されたTVの電源をリモコンで付けた。

『な…!?!?』

コーンと同様に二人は驚き、デントは衝撃の余りリモコンを床に落とした。

同時刻、イッシュ地方の近代都市・ソウリュウシティ。

3ヶ月前、龍の里を旅立ったアイリスはソウリュウ高等学園に入学、彼女を追う形でドラゴンバスターの少女、ラングレーも然り。

アイリスは8…00～15…00まで学園で知識を生かして勉強に励み、15…00以降はドラゴンマスターにしてソウリュウジムリーダー、シャガの元で厳しい修行の日々を続けている。

ソウリュウシティの高等学園、教室の机でアイリスとラングレーが向かい合っていた。

紅緋色の制服の下に黒色のスカートを履いており、アイリスはヘアピンを外しており、ラングレーは帽子を外していた。

「あゝゝ…食べ過ぎたあ、何も食べたくないよお」

「これ位で根を上げるなんて、子供ねゝゝ…」

机に伏せながら言い合っている二人の少女、その顔に生氣が全く無い。

「そうよ子供よお、あんたも同じくね」

「むぐぐ…!!」

凶星を受けて不機嫌な顔になるアイリス、それは当たっている為反論出来ない。

「アイリスさん! ラングレーさん!」

突然藍色の髪の少女が教室に入ってきた、その少女は息を切らして新聞紙を持ち、二人を見ていた。

「…チサトさん?」

チサトと言う少女は二人のクラスの学級委員長、1年生の間ではマドンナと呼ばれている。

「これを読んで!」

チサトはアイリスに新聞紙を渡し、アイリスは新聞を開きラングレーもそれを覗く。そして二人は急に噴き出した。

「え!?! これって…」

「ど…どういう事!?!」

両手を震わせながら、アイリスは口を開いた。

「何でサトシが、警察に逮捕されるのよ!?!」

とある砂漠…。一人の男は空を仰ぎ、男は呟いた。

「…サトシ」

——ポケモンマスターの逮捕、その記事は世界中を戦慄させた。

To be continued

#4 絶対的な正義の断罪者

夕方、カスミとタケシは1番道路を走り抜け、マサラタウンの町中を走っていく。

目指すはマサラハウス兼サトシの家、扉を開けるが、人の気配は無い。二人はまた走り、次に着いた場所はオーキド研究所。

オーキド研究所内は不気味な程に静まり返っていた、オーキド博士は顎を触り、ケンジは腕を組みながら窓を見つめ、ハナコは俯きその両目からは涙が溢れていた。

『オーキド博士!!』

扉が開き玄関からカスミ、彼女の後ろからタケシが入ってくる。

「一体何があったんですか…!!?」

「うむ…僕等も今サトシの事について考えておる」

「どうしてサトシが…!? 彼奴が捕まるなんて…!」

カスミやタケシは信じられぬ表情をし、ハナコを見る。彼女は両手で顔を隠し、嗚咽を上げて泣きじゃくる。

「サトシ…どうして、どうしてあの子が」

二人だけで無く、ケンジも悲しみに暮れた顔をする。ケンジは真剣な表情で、二人に告白した。

「サトシを捕まえたのは真戦組、国際警察の特殊武装部隊だよ」

「何ですって…!?!」

カスミが涙を潤ませて驚愕し、タケシは歯を軋ませた。

「聞いた事があるぞ……特殊な訓練をされた武装部隊、それが彼等か」

「嗚呼、サトシが逮捕された理由は…ダーク団の事について」

二人はその単語に驚く、思いもしなかった名前に二人は息を飲む。

「ダーク団はサトシのお父さんが創った組織、そのボスの息子であるサトシに真戦組は疑いの視線を向けたんだよ。勿論僕達は反論したさ、だけど適わなかった」

罪悪感を抱き、ごめんとケンジは頭を下げた。彼の伏せた目からは涙が零れてきた。

「貴方は何も悪くないわ」

俯いていたハナコが顔を上げ、

「悪いのは私よ、今まであの子に主人の事を隠し続けたから」

切ない顔をするハナコにオーキド博士とケンジ、カスミとタケシは俯いた。

カスミ・タケシ・ケンジの3人はオーキド邸の庭へ向かい、石に座ってポケモン達を見つめる。

「フシギダネ達も元気ないわね…」

「無理もない、自分のトレーナーが捕まってしまったんだから」

カスミとケンジが悲しみに暮れるサトシのポケモンを見て溜め息を吐く、するとタケシはあれ？と声を出した。

「5匹足りないぞ？キングラー、ミジュマル、ムクホーク、オニゴリー、マグマラシがない」

タケシがポケモン達を指しながら数え、ケンジは答える。

「彼等はサトシの所にいるよ。でも流石に捕まっているから、今頃モンスターボールは取り上げられていると思う」

はあ…と息を吐き、再び沈む3人。

「やっぱり私達には待つ事しか出来ないのかしら…？」

「サトシ…」

「……」

そんな空気を壊す様に、後方から足音が聞こえた。

「待てねえなら、迎えに行けば良いじゃねえか」

その声に振り向き、3人の前には一人の青年が立っていた。

「あんたは…!!」

その人物を見るなり3人は驚きを見せ、木に移っていたヤミカラス達が飛び交う。

カントー地方・シオンタウンにある真戦組本部兼牢屋。

過去に罪を犯した罪人達が何人も幽閉され、一生を過ごす事がある。時折牢死する罪人が発見される事も…。

青紫色の髪の男はエアガンに触り、其処等中から聞こえる呻き声が薄暗い密室に奏でられる。

男はチツと舌打ちし、ラベルに入った酒を飲む。

コツコツと足音が聞こえてきたのが解り、男はエアガンと酒を見えない様に後ろへ隠した。

二人の憲兵に連れられてきた両手を手錠で繋がれた、黒いタンクトップと灰汁色のズボンを身に付けた青年が歩いてくる。

自分の向かい側の檻に青年を入れ込み青年は入って胡座をかいて座る。憲兵は二人共去っていき、足音は聞こえなくなった。

——この手錠は君の波導を抑える特別な手錠だ、使おうとしても手錠で無力化される。

——さっさと諦めるんだな。

真戦組局長とその1番隊長の言葉が蘇り、虚ろな目で手錠を見るサトシ。力を入れて波導を放出しようとするも、何も起こらない。

「…………オメエ、まさか」

男は青年の顔を確認して気付き、青年は青紫髪の男を見つめ……声を漏らした。

「…………あ」

「道理で見覚えあると思えば……てめえヤツジのガキか」

その顔を見て2年前の死闘を思い出し、歯を軋ませる。目の前の男の様子に、サトシは首を傾げた。

「…………誰？」

「ふっ、てめえからにしちゃ俺の様な小物の事何ぞ覚えてねえよな……！改めて自己紹介だ……俺はベオール、ダーク団に雇われた傭兵だよ」

その男…………ベオールは不適な笑みを見せ、サトシはその名を聞いてハッとした。

「あの時のダーク団幹部……」

「元、な。俺は大量の金が欲しくててめえの親父に雇われたんだけどよ、てめえ等の所為で金も居場所もチャラになった訳よ」

怒りの矛先をサトシに向け、ベオールは歪んだ笑みを見せる。

「んで、どうしたよ。天下のポケモンマスター様が罪人扱いたあ笑えるぜ」

「……ダーク団事件の重要参考人として連行された」

「ほう」

「明日の午前7時、取調を受ける事になる」

虚ろな赤い瞳をベオールに向け、その唯ならぬ恐怖をベオールは感じた。

俺がビビってる？何故だ？

「……ケツ、仮にもポケモンマスターになった男が死にてえ様な言い方しやがって……情け無くなったなあ！」

「……俺は、本当にこの世界で生きていて良いのだろうか」

「……？」

サトシの呟きに疑問を持ちつつ、ベオールは横たわって眠りに落ちる。

サトシもそのまま瞼を閉じ、眠り始める。

半径15 m程ある囚人収容施設兼真戦組本部。とある一室でコンドウとヒジカタが雑談をしている。

「……コンドウさん」

「ん？どうしたトシ」

長年の戦友に振り返り、コンドウは竹刀で素振りをしている。

「どうにも今回の件、あの小僧の事だけじゃ終わらねえ様な気がする」

煙草を咥え、黒雲が渦巻く曇天の空を仰ぐ。

「嫌な予感がプンプンとする……それとコンドウさん」

「ん？」

咥えていた煙草を地面に捨て、

「……ズボン位履いてくれ」

衣服を着けてないカーニバル状態のコンドウを指し、ヒジカタは深い溜め息を吐いた。

7月18日、朝日がすっかり昇り、見張りの男達は欠伸をしながら門の警備をする。

すると、何かを引きずる音が聴こえたのが確認し、二人の男は正面を凝視する。

「……」

歩いてきたのは白いシルクハットを被り、白いマントを羽織った少年だ。少年を手に行っているのは、死神を持つと言われている鎌。さっきのは鎌を引きずってる音であったのだ。

「おい君、何をやっているのかな？」

男が近付いて問うも、少年は何も答えない。

「その手に持っているのは何だい？ ちょっと来て」

瞬間、二人の男の首が飛んだ。首は地面に落ち、血が溢れ出す身体は倒れ込む。

「貴方達には用は無いヨ。僕達が此処に用があるのは、隕石だけ」

少年の後ろからハイヒールの音が響き、マスクで顔を隠された金髪のロングヘアの美女が姿を現す。

「さあ、始めるわよ」

絶対和平の為にあの隕石を回収する。

美女の左腕が凍り付き、それはまるで剣の様になった。

そんな二人の後ろから、大勢の白い制服を纏った集団が姿を現した。

「さあ、行け」

小柄な少年は回し蹴りで門を切り裂き、白服の男達は敷地内へ入っ

ていった。

ビーツ！ビーツ！施設内の赤いランプが反響し、警官達はその音に驚きロッカー室で戦闘配置に着いていく。

ヒジカタとコンドウはモニター室に入り、其処の係員にコンドウが声を荒げた。

「何があつた！？」

「敵襲です！数は100を越えています！」

「見張りは何をしてやがる…！直ぐに防衛体勢に取り掛かれ、敵の出方次第によっては攻撃準備をしろ！」

ヒジカタはデスクを叩いて歯を軋ませ、指令を下していく。

「既に10番、7番隊が向かっています！」

そうかとヒジカタが言うと彼は緊急用のポケギアを取り出し、番号を入力。しばらくすると画面にスキンヘッドの男の顔が映った。

『此方10番隊、ハラダです！』

「ヒジカタだ、ハラダ！タニと共に連携を取れ！敵の狙いは恐らく現在研究中の隕石、例の似非正義の集団だ！絶対に中に入れるな！」

『了解！』

「直ぐに俺も向かう！頼むぞ！」

電源を切ったポケギアを仕舞い、ヒジカタはそのまま駆け足でモニター室から出て行く。コンドウは額から汗を流し、モニター越しで戦う部下達を見つめる。

同じ頃、シオンタウンに向けてイワヤマ山脈を爆走する車があった。

操縦している水色の髪に目下に緑黄色の隈がある彼は乱暴に車を動かし、タケシ・カスミ・ケンジはそのテクニクに揺さぶられる。

それに構わず、タケシが問いかける。

「本当なのかパジエラ！サトシが狙われていると言うのは！？」

「この俺が嘘を言うと思うか！？てめえで決めやがれ！」

運転する彼————パジエラは怒鳴り散らし、車は坂を下りて荒野を駆け抜けていく。

「其奴等はギリアス地方って土地で結成され、俺みてえな野心を持つ悪党共をぶっ殺している！他に各地に墜ちた隕石————メテオナイトを何かの為に集めてるっつー噂だ！」

「メテオナイトを…！？」

「ミヤギはハウエンとシンオウ、ゾーマはイツシュでてめえ等の仲間をかき集めている！急な事で悪いな…」

パジエラは一旦区切り、その名を語った。

「奴等をぜってえ止めなきやなんねえ！片っ端から悪党をぶっ殺し、正義を掲げる其奴等の名は————ジャツジメント！」

シオンタウンの真戦組本部、黒いローブを纏うその男は戦場に足を踏み入れた。

T o b e c o n t i n u e d

#5 World's strongest helpers

殺意と戦意が飛び交い、血塗れの戦場となった真戦組頓所。

暴力で正義を語る——ジャツジメントの軍勢は真戦組の戦力を圧倒していった。

「畜生、何てパワーをしてやがんだ！」

「全く歯が立たねえ！」

隊士達は彼等の繰り出すポケモンに圧倒され、一人の白服の男は自分のイノムーに命令を下す。

「悪は滅べ！イノムー、突進だ！」

『うわあ！』

イノムーの突進で2、3人は突き飛ばされる。

「正義は我等に有り！ドクケイル、サイケ光線！」

「ナッシー、ソーラービーム！」

『どわああああっ！！』

二つの閃光で10人程が仰向けに倒れる、白いマントを羽織った白いシルクハットの少年はパチパチと拍手を送る。

「良い腕前じゃないカ。敵ながら天晴れだヨ」

「余所見すんなあ！」

7番隊隊長・タニの声がすると同時に、アノプスの進化系のアーマルドが切りかかって来た。

少年はそれを身軽に躲し、ハラダとタニの前に立った。ハラダの隣にはベロベルト、タニの隣にはアーマルドがいた。

「流石真戦組隊長、誉めて上げよう。否、それともポケノイドと言わせておこうカ？」

ポケノイド、ポケモンから人間へと進化を遂げた新人類の一つ。バイオテクノロジーで生み出された技術で、それは現在にも発展される。代わりに年を取る事は無い。

「その対となる存在がポケヒューマン、人間からポケモンに進化した新人類サ」

逆に彼等は普通の人間と同様に年を取り、人間の数倍の戦闘力を得る事が出来る。

「さあ、Show timeと行こうカナ？魂を刈り取れ、ブニャット」

モンスターボールを投げると、ニヤルマーの進化系・ブニャットが姿を現す。

ブニャットは吼えたとハラダ達に向かって突撃してきた。

「ベロベルト、岩雪崩で敵の動きを止めろ！」

岩雪崩でブニャットの動きを止め、

「アーマルド、ブレイククローだ！」

アーマルドのブイククローが決まり、ブニャットは悲鳴を上げる。

「ブニャット、のし掛かり」

ブニャットはアーマルドに飛びつき、全体重で潰そうとする。そうはさせまいとアーマルドは耐え凌いでいる。

「ベロベルト、ジャイロボールだ！」

高速回転してベロベルトがブニャットを吹き飛ばす、ベロベルトは着地し、ブニャットは転がって倒れる。

「タニ、大丈夫か？」

「すみません」

タニはハラダに軽く謝罪、二人の視線はブニャットに移す。

「ベロベルト、もう一丁ジャイロボール！」

ベロベルトは再びジャイロボールを放ちブニャットを吹き飛ばす、ブニャットは完全に戦闘不能になった。

「君達、こんな事で油を売ってても良いのかな？」

「何…？」

「どういう事だ！？」

タニは首を傾げ、ハラダは怒鳴る様に少年に問いたです。

「間もなくこの地方の最後のメテオナイトは、我々の物になると言う事だ」

此処は研究室に繋がる通路、隊士達の目を盗み、女はひたすらその道を走る。

彼女の通った後には、血を流して倒れる隊士達の姿があった。

「此処は通さんぞ！」

「……………邪魔をしないで」

氷の刃が彼等を切り裂き、目に止まらぬスピードで通路を走り抜ける。

しばらくすると嚴重な扉が見えてきた、女は左に設置されたボタンを入力していき、意図も簡単に扉が開く。

女は中に入り、周囲を確認する。モニターにはポケモンの生態、生活に関するデータが映され、それを眺めつつ中心にある機械のコン

ピューターを操作、機械に小さな開閉部分が開き、其処から黄金色に光る石が浮かび上がる。

女はそれを手にし、見つめる。

「最後のメテオナイト……見つけたわ」

「それを置いてってくれませんか？」

凜とした声が聞こえた、その後ろにいるのは1番隊隊長。

「真戦組1番隊隊長・オキタ……悪いけれど貴方の相手をしている暇は無いわ」

「何…？」

女は手を伸ばし、一つのスイッチを押そうとする。それを見てオキタはハッとして飛び出した。

「させるかアッ！」

ニヤリと表情が見えなくとも笑い、そのスイッチを押した。

同じ頃、此方はサトシとベオールが幽閉された地下5階の監獄。

「おい…もう7時とつくに過ぎてんぞ」

「え…？」

身体を起こし、天井に設置されたデジタル時計を確認してみた。時

計には7..19と表示されていた。

「確かに可笑しい…どういう事だ？」

「つーか、妙に上が騒がしくねえか？物凄え音がずっと聞こえんだが」

その時、二人の牢の鉄格子が解除された。突然の事に驚き、周囲を確認した。

「何だ？何が起こっている？」

「事情は知らねえが…：脱獄のチャンスだな」

不適に笑み、ベオールは通路を見る。

「そうだな。なあ、ベオール。お前は2年もこの牢獄にいたんだろう？少しは脱出ルートを確保する事が出来るかも」

しかしベオールは不気味に笑い、銃でサトシの右肩を何発も当てた。貫通した後には血が噴き出し、倒れたサトシの背中をベオールは踏みじった。

「くっ…！」

「ふざけんなや、何で俺がてめえの言う事を聞かねえとなんねえんだ？」

「最初から、このつもりかよ…！」

自分を見下すベオールをサトシは睨むが、本人はハンツと嘲笑った。

「俺がてめえと組むと思ったか？ 残念だったな、自由となった今、てめえはもう用済みなんだよ！」

——やはり、俺はこの世に生きてはいけない存在なのか。

狂った様に笑うベオールの銃口はサトシの頭に向けられ、トリガーを弾こうと指を動かす。

その刹那暗闇から一筋の光が見え、回転が掛かったナイフが銃を貫いた。

「があっ!?!」

銃は風船の如く破裂して火花を散らし、ベオールの顔に焼き焦げた痕が出来た。サトシは倒れ込んだ彼から離れ、すっと立ち上がった。

「…そのナンセンスな行為、貴様の頭は戦いだけの様だな……ベオール」

「!!!!!!」

冷たくも意味が有り気な声に戦慄し、足音が聞こえてくる方を恐る恐る見た。

黒いスーツの下に藤色のシャツ、

黒紅色の瞳、

端正な顔立ち、

この近付いてきた青年に、ガタガタと手足を震わせながらベオールはその名を呼ぶ。

「ゲンタ…!!」

「お前、何故此処に…?」

サトシは半年振りに再会した彼の登場に目を丸くする、青年――
―ゲンタはポケットからカードの様な物を取ってサトシに近付いた。

「お前を連れ戻しにだ」

そう言って手錠にカードを通す、ピーと言う音が響くとサトシの手錠が外れ、手錠は床に落ちた。

「奴等の目を盗み、カードキーを持って貴様の所に行ったのは良かったが、塵も一緒とはな」

「ググ…ッ!!」

塵と言われ拳を震わせるベオールを無視し、ゲンタはサトシに視線を移す。

「ゲンタ…俺は生きていて良いのか…?」

「?」

「10年以上も化け物と言われ続けたこの俺を、どうして助けてく

れるんだ…?」

「生きて当然だろう」

俯いた顔を見上げて青年と顔を合わせ、ゲンタを見るサトシ。

「1年前に言った筈だ、夢を諦めてまでこんな真似をしても、人は先に進めないと。それに貴様には、仲間がいる」

それを忘れるな。

18歳の青年の瞳に光が戻っていき、黒紅の青年は衣服と五つのモンスターボールを手渡す。

「ピカピィ!」

涙を浮かべた相棒を受け止め、身に纏った囚人服の上半身を破り捨て、細くも鍛え上げた筋肉が姿を見せる。

「…そうだよな、こんな事で悩む様じゃ…俺らしくねえよな…俺は迷わねえ、絶対に世界の敵を倒し、生命を助けてやる…!」

貫通された右肩が不思議に修復されていく、ベオールを半信半疑な目で見て驚き、サトシを指した。

「お…お…お前、今何した!? き、傷が急に…?」

「嗚呼、これか。自己再生だよ」

サトシからの返答にベオールは表情を変えず、唯驚くしかない。

「ん、んな莫迦な…！ポケモンの技を、唯の人間が使える筈がねえ！」

狼狽するベオールに対し、ゲンタは彼に真実を話した。

「此奴は普通の人間ではない、波導の勇者アーロンとハウオウの子孫から生まれた人間だ」

「何…!!!?」

信じられぬ表情でサトシを見るベオール、彼は拳を握り締め、サトシに殴りかかった。

「そんな話、信じられるかあ！」

ストレートパンチを繰り出すが、サトシはそれを軽々と避ける。

「道を開けるぞ、お前の仲間も来ている」

「嗚呼」

「ひっ!?!」

そう受け答えをしてベオールに接近すると、一旦屈み込み。

「ぐぎよげあ!!」

顎に強烈なアッパーカットが決まり、その攻撃でベオールは次々と天井を突き破っていく。

サトシはそれを見つめつつ、着替えを始めた。

「グッ…！」

オキタは研究室の前でうつ伏せで倒れていた、自らの下半身を凍らされ、目の前に立つ女を見つめる。

「これでお解り頂けたかしら？ 私達と貴方達では背負っている物が違う事を」

出していたポケモンをボールに収納し、隕石をアタッシェケースに入れる。

「させねえ…！その隕石は渡さねえぞ」

「貴方達は知らないみたいね、この隕石にどういう秘密が隠されているのかを」

その時、外から轟音が響き渡り、女はケースを持ちながら通路を走る。オキタは彼女の後ろ姿を見届ける。

「させるかよ」

瞬間彼の隊服の上半身が、身体も大きくなり顔の輪郭も変わった。体色はクリーム色に変色し、両手には鋭く尖った爪、赤く輝いた目が氷に映された。

「ニャオウ！簡単だぜい！」

氷を割り、オキタは四足で廊下を走り抜けていく。

未だに激闘が続く頓所、コンクリートの壁から突如何かが飛び出した。

『うおっ!?!』

コンクリートを突き破って現れた“それ”は地面に横たわり、ヒジカタは屈み込んで“それ”の顔を確認した。

「副長！此奴元ダーク団幹部の…！」

「嗚呼、しかし何だって地面から現れたんだ…?」

痙攣を起こしているベオールにヒジカタが疑問を抱いてると、穴からムクホークが現れた。ムクホークから二人の男が飛び降り、華麗に着地する。

「お前っ！抜け出しやがったな…?」

「あんな陰気臭い場所にいるより、太陽が照らす場所の方が良いですよ。」

サトシの隣のピカチュウもピカア！と唸る様に鳴く、すると口から血が流血しているベオールが弱々しく立ち上がった。

「嘗め…やがってえ！不意打ち位で、俺を倒せると思っているのかあ…!!」

自棄になったベオールはサトシに掴みかかった、だがサトシはそれ

を躲し…。

「うゝぼおゝ!？」

鳩尾に入れ込み、ジャッジメントの兵士達を巻き添えにしてベオルは本部の壁まで吹っ飛んだ。

ヒジカタやコンドウ、オキタ以外の隊長達、ジャッジメントやシルクハットの少年も異様な光景に驚いた。

『サトシィ!』

走ってきた仲間達、更に水色、金髪、銀髪の精鋭達を見て彼は微笑んだ。

「タケシ…ケンジ…ハルカ…マサト…ヒカリ…デント…アイリス…カスミ…!」

「無事だったんだな!」

「心配したわよ!」

真っ先に心配そうな声をタケシとヒカリが上げる、サトシは彼等に向けて頭を下げる。

「ごめんな、散々迷惑を掛けて…けどな、俺はもう大丈夫だ」

サトシの微笑ましい顔を確認した一同は安堵の表情を漏らす、サトシは白服の軍勢に振り返る。

「此奴等は…?」

「彼等はジャッジメント……ポケモンの味方をする聖教集団だ。悪意を持つ人間を根絶やしにし、隕石……メテオナイトを集めている」

金髪の男——ゾーマの言葉に耳を傾け、半年前のゲンタの言葉を頭で回想していた。

「そうか…此奴等がメテオナイトを集めていると言う連中か」

ポケモンの為に人間を殺す集団の行為に納得行かず、サトシは言った。

「何なら…真戦組とジャッジメント、この二つの勢力を止めるぞ!」

彼の号令にカスミ達は頷いた。

「俺達は俺達で、勝手にやらせて貰う」

ゲンタの言葉にパジエラ・ゾーマ・ミヤギも頷き、サトシ以外の13人はモンスターボールを取る。

「ギャラドス、お願い!」

「頼むぞ、グレッグル!」

「行け、コンパン!」

「グレイシア、Stage on!」

「GO、ヤルキモノ！」

「ポッチャマ、頼むわよ！」

「My vintage イワパレス！」

「行けえ、ドリュウズ！」

元ダーク団側も…。

「行くぜえ！鎮まれ、シャワーズ！」

「斬れ、キリキザン！」

「出よ、フリーディン」

「奏でろ、パラセクト」

総勢14体のポケモンは身構え、ヒジカタは彼等に対して宣言した。

「最早仕方ねえ！市民と犯罪者を纏めて制止させろ！」

「行くぞ！」

サトシ達も真戦組も知らない、この奮戦は最早無駄だと言う事に…。

To be continued

#6 旅立つ者、消え逝く者

サトシを奪還し、戦いを止めぬ真戦組を止めようとする一同。

「ピカチュウ、10万ボルト！」

膨大な電撃が大地を破壊し、何10人が爆風で吹き飛ぶ。

「ギャラドス、火炎放射！」

「グレッグル、毒針！」

「グレイシア、冷凍ビーム！」

「ヤルキモノ、乱れ引っ掻き！」

「ポッチャマ、バブル光線！」

様々な技が多くの人間やポケモンを吹き飛ばした、そしてアイリスのドリュウズは潜航形態となって特攻。

「ドリルライナー！」

ポケモン達を吹き飛ばすドリュウズの背にイワパレスが飛び移り、岩石砲を発射してコンクリートの床に小さなクレーターが出来る。

「キリキザン、一発で仕留めな！ハサミギロチン！」

キリキザンの両手が光を帯び、一瞬でポケモン達を薙ぎ払う。その

背後でミヤギのシャワーズが吹雪で敵の動きを制止させている。

「コンパン、サイコネシス！」

「フーデイン、サイコネシス」

サイコネシスでポケモン同士をぶつけさせ、戦闘不能に追い込むフーデインとコンパン。

「パラセクト、エナジーボール」

吹っ飛んだパルシェンと巻き込まれたポケモン達を見つめ、呆れた目線を送るゲンタ。

「流石ダーク団の幹部を務めた事はあるぜ…“殺鬼”」

ヒジカタは煙草を吸いつつ鋭い眼孔でゲンタを睨む、誤動作で点けるライターは何故かマヨネーズの形をしていた。

「……ギャグか？」

「莫迦にしてんのかテメエ…？マヨネーズ嘗めんなよ、俺はテメエの様な奴を野放しにする訳には行かねえんだよオ！」

ライターと煙草を捨て、ヒジカタは変身した。灰色の肌に黒い毛皮、犬の様な輪郭に変わり、両手の爪先は鋭く尖っている。

「グルル…！テメエをお縄に頂戴するぜ！」

「お手」

そう言うのとヒジカタは無意識にゲンタの所に来て、ゲンタの右手に手を置く。

「チンチン」

舌を出しながら涎を誑し、軽く一周する。するとヒジカタは我に返り、慌ててゲンタから下がった。

「ななな……テメエ！」

「…見事な犬だな」

「犬だよな」

「うん」

「忠犬か」

ヒジカタの霰も無い姿に結論を述べる元ダーク団4人組。ヒジカタは顔を真っ赤にして怒鳴り出す。

「随分哀れな姿ですねい、ヒジカタさん」

『ソウゴ!?!』

ヒジカタとコンドウが声を発すると、施設の窓からオキタが顔を出していた。

「何してやがった!?!降りて連中を止めるぞ!」

「そうしたいのも山々なんですけど、俺も派手にやられちゃいましたア。隕石、取られちゃった訳でさア」

「……………何だと!？」

オキタからの報告にコンドウは声を荒げた、因みに彼はまだ全裸でサトシ達はそんな彼を白い目で見つめ、カスミとヒカリ、アイリスは顔を赤くしてコンドウを見ていた。

「……………上手く行っただけだネ」

「何？」

少年をチラリと見るサトシ、少年は大鎌の先端をサトシに向ける。

「僕はジャッジメントの最上位に位置する大部隊の一つ、白刃部隊の隊長“白死神”ライト」

少年……………ライトが不適な笑みを零すと、別の窓が割れ金髪の女がアタツシエケースを持って降り立った。

「もう一人現れたのは僕の同僚、雪姫部隊隊長“氷の妖精”ライザ」

長い金髪の美女……………ライザは自らの髪を撫で、静かに歩く。

「むほお!何とも美しい…」

「タケシ、相手は敵だよ!外見に騙されないで!」

タケシの耳を引っ張り、ケンジはライザを見て息を飲む。

「……奏でろ、ハッサム！」

『……!!』

パラセクトを戻しハッサムを出したゲンタは高速に走り、ライザの方へと向かう。

「……」

ライザの左手に氷が纏われ、剣となる。

ガシィ!!とゲンタのナイフとライザの剣がぶつかり、火花を散らすと二人の男女は一旦下がる。

「……8年振りね、元気だった？」

「元気だと…？これは何の冗談だ」

ナイフの先を金髪の美女に向ける、ゲンタは悲しい表情でライザを睨んでいる。

「どうなっているの…？」

「あの別嬪さん…ゲンタの知り合い？」

「……何だかBad tasteを感じるね」

ハルカ、ミヤギ、デントの3人はゲンタとライザの間に不穏な空気

を感じ、二人を見る。

「8年前、お前は進学の為にギリ阿斯地方へ渡った筈だ！優秀だったお前が、何故こんな組織に属している！？」

ライザは眉間を顰め、氷の剣の先をゲンタに向けた。

「こんな組織？良くそんな偉そうに言えるわね、貴方こそ殺人に身を染め、立派な犯罪者になったじゃない」

私の気持ちを踏みにじったくせに。彼女は憎悪の眼差しをゲンタに向けつつ、仰向けに倒れるベオールに歩み寄る。

「ヂグジョォ…何じやがる気だ…!!」

口から大量の血を吐き、ライザを睨むベオール。

「アイス・パレス」

そう言って手を翳すと、彼の体が凍り付いた。ベオールの身体は宙に浮かび上がり、彼の周囲には巨大な氷柱が…。

「な、何を…止めろ！まだ俺は死にたくねえ！」

「いいえ、貴方は裁かれるべきよ。“狩人”ベオール」

恐怖に戦いて氷を割ろうとするベオール、しかしかなりの硬質の為か罅が入らない。

「永遠となりなさい。アイス・ヘヴン・ニードル」

合計1万本の氷柱が一斉に動き、氷の殻に閉じ込められたベオールに向かっていく。

「ギャアアアアアアアアアアアアアッ!!!!!!」

断末魔の叫びにヒカリとアイリスは顔を青くして口を抑え、他の皆はその光景を唯見つめる事しか出来なかった。

叫びが聞こえなくなった後、巨大な氷塊が出来上がり亀裂が入り、粉々となった。

「ベオール……!」

かつての仲間の惨い最期にゾーマは唇を噛み締める、それはパジエラやミヤギ、ゲンタも同じだ。

「そんな……こんな事って……!」

「嘘よ……信じられない!」

ヒカリとアイリスもパニックを起こし、現実逃避しようとしている。しかし事実だ。

「……これだけは覚えておいて、ゲンタ」

「……私は貴方を許さない。」

耳元でそう囁き、巨大なヘリが舞い降りる。ライザとライト、数人の隊員達を乗せ、ヘリは離陸して空の彼方へと消えていった。

「……」

ゲンタはその姿を後目に見送り、チッと軽く舌打ちする。

「―――ゲンタ」

「話せる気分ではない、先にマサラタウンで待っている」

先程の女との関係を聞こうとしたが、切ない表情を見て気まづくなつたサトシ。ゲンタはサトシを通り過ぎ、歩き出そうとしたが、白刃が彼の首を捉えた。

「待ちな」

煙草を啜えたヒジカタがゲンタを、オキタがサトシを足止めした。周囲の隊士が二人が逃げない様に包囲し、刀を構えた。

「ジャッジメントに隕石を奪われるわ、囚人は抜け出すわ、ウチの部下達を傷つけるわ、これ以上テメエ等に好き勝手されちゃあ困るんだよ」

ゲンタを威嚇しヒジカタが各々と語る。

「ちょっと待って下さい！どうしてサトシとゲンタ達を……」

「お前等は解って言ってるのか？“殺鬼”はダーク団生粋の天才だ、危険な真似をしでかさねえ様に見張るだけさ、そしてポケモンマスターはダーク団のボスの息子！カントーを救ったとは言え、此奴の親父は世界を滅ぼそうとしたんだぞ！？」

カスミはヒジカタの叱咤に言葉を詰まらせる。

「ふざけないでよ！お父さんの方は間違っていたかも知れない……
だけど息子さんのサトシは関係ないでしょ！？」

「黙りな。さてポケモンマスター、お前は親父を軽蔑するのか？」

オキタはサトシに聞いただす、しかし本人は手刀で刀の先端を折った。

「…！？」

「…そんな事、俺は望んでいない。俺は父さんを、仲間を信じて此処に来た。何も知らないあんた達にうだうだ言われる筋合いは無い」

勝ち誇った笑みを見せ、サトシは拳を握り締める。ヒカリとアイリスはその顔を見て頬を赤らめた。

「コンドウ、その小僧の件は不問にしなあ」

ババババとヘリのプロペラの音が聞こえた、一同は空を見るとヘリコプターがあり、その中からグラサンを掛けた壮年の男が煙草を吸っていた。

「と…とと、とっつあん！？」

コンドウは恐怖に怯んだ顔でその名を呼んだ。

「あの人は…ニュースで見た事があるよ！全警察の中で最も恐れら

れている男、犯罪者からは“破壊神”と呼ばれている男……警視庁長官、マツダイラさんだ！」

壮年の男——マツダイラは吸った煙草を捨て、メガホンで話を出す。

「さっき言った通りだ莫迦野郎共、その小僧の処罰は不問にしやがれ」

「はア！？ちょっと待てとつつあん、このガキはダーク団の……」

驚きながらヒジカタはサトシを指し、意見するも……。

「不問つつてるだろうがアッ！！」

『！！！！』

メガホンを通しての怒号に両耳を抑え、マツダイラを見る一同。

「其奴が悪人面をしてると思うか？確かにその小僧はダーク団のボスの子息、だがなあ……肩書きだけで決めつけんな。奴さんがやった事が、息子を守る為にした事だ」

サトシはその言葉に目を大きく開き、マツダイラを見る。彼からは警視庁長官としての顔ではなく、一人の父親としての顔が確認され、サトシは笑みを零す。

「とつつあんの言う通りだトシ、肩書きで決めては行かん。昔から言うだろ？生まれた子に罪は無いってな」

「何処の台詞だそりゃ」

そう言葉を漏らして刀を鞘に納めるヒジカタ、オキタや他の隊士も刀を納めた。

「釈放だ、テメエの罪は何もねエ」

「ありがとうございます。ヒジカタさん、マツヒラさん」

「マツダイラだ、莫迦野郎」

事件は終結され、サトシ達は頓所を出て行った。

「所でゾーマさん、ギリ阿斯地方と言うのは何ですか？」

「嗚呼、その話か」

マサラタウンに向けて歩く中、サトシは引っかかる単語をゾーマに質問した。

「ギリ阿斯地方はイツシュ地方と昔から交流の深い土地の名だ」

「その話、オババ様から聞いた事があるわ。イングス王国とウェール王国と言う二つの王国で栄えられた国なんだって」

でも、とアイリスは表情を曇らせる。

「48年前：“ウェールの炎”と呼ばれた事件が起こり、ウェール王国は一夜で滅んだと言われているんだ」

「一夜で…!?!?」

一つの国を滅ぼす物があると心に留め、サトシは話題を変える。

「その地方には珍しいポケモンはいるんですか？」

「嗚呼、カントーからイッシュ地方では見られぬポケモン達がいる。幸運な事に其処にあるギリアスリーグは非公式大会、ポケモンマスターでも出場可能…サトシ君？」

突然黙り込んだ青年に疑問を抱き、ゾーマは問いかけようとする。

「……よっしゃあ！早速リーグ本部に連絡しよう！」

「は？」

ポケギアを取り出したサトシは番号を押し、画面にポケモンリーグ委員会会長——タマランゼ会長が映し出される。

『おおサトシ君、久し振りじゃのお』

「はいタマランゼさん、実の所急に悪いのですが」

『ジャッジメントを止める為にポケモンチャンピオンシップの開催中止、ギリアス地方へ向かう…良いぞい』

事の経緯を髭を触りながら聞き、了承するタマランゼ会長。ありがとうございます、とポケギアの通話を切り、ゾーマに振り返る。

「ゾーマさん、俺は行きますよ。ギリアス地方に」

「…仕方ないか」

ハメられたと心の中で零し、ゾーマは苦笑いをする。

7月20日 AM09:01

マサラタウンに着いたのは昨日の昼、ハナコから説教を受けたがサトシは大丈夫と言った。

「もう…そう言う所もパパの影響ね、頑張ってらっしゃい」

「嗚呼。行ってくるよ、母さん」

サトシは肩にピカチュウを乗せ、ドアノブに手を掛けようとする。

「サトシ、お父さんに会ったらよろしくね」

「OK」

親指を立てて、サトシは外に出る。彼の服装は黒いTシャツの上に水色のパーカー、下半身は灰色の長ズボンと黒いスニーカー、帽子も赤から青に色を変え、首に十字架のペンダントを付けている。

サトシはトキワシテイの郊外にあるヘリポートに着ていた、其処にはカスミ・タケシ・ハルカ・ヒカリ・アイリス・デント、他にはパジエラ・ミヤギ・ゾーマ・デントも来ていた。

「ん？ハルカ、マサトはどうした？」

「『サトシの為に邪魔をするのも悪いから、先に行く』って、あの子だったら一緒に行きたいなら行きたいって言えば良いのに」

溜め息を吐いて空を仰ぐハルカ、微風で黒いバンダナと栗色の髪が揺れる。

「お前良いのかよ、タマランゼ会長の演説で全世界のトレーナーの何人かがギリ阿斯地方へ行ったらしいぜ」

ミヤギも溜め息を吐き、サトシは別に良いよと答える。

「カスミ、タケシ、デント、良いのか？それぞれのやる事より旅を優先して…」

「別に良いわよ、タケシも行ったじゃない。また旅をしようって」

「そうだぞサトシ、この先で起きる戦いで傷つくポケモンや人々は沢山いる…俺はその人達の為に世界へ飛び立つんだ」

「僕もMysteriousなTasteを奏で、世界一素敵なDinnerをOffer Courseするよ？」

3人の答えに頷き、サトシはそうかと納得する。

「それに私は、サトシと一緒にいると心が落ち着くもの／／／／」

「うっ…あ、あのなあ／／／／」

初々しく頬を染める二人の男女、タケシはウオオオ…と男泣きし、ヒカリとアイリスは羨ましそうに頬を膨らませる。

「あり？もしかしてこの二人」

「知らねえのはてめえだけだ」

「はあ…」

今頃気付くミヤギにパジェラとゾーマは溜め息を吐き、ゲンタはふんつと笑う。

「おーい！僕も連れてってくれー！」

「ケンジ？」

ケンジがリュックを背負って現れ、息を切らす。

「連れてってくれてお前…研究所は？」

「タカヤさんから行ってこいと言われてね、留学中のナナミさんが近々帰ってくるから偶に身体を動かせ！って」

『ああそう…』

一同は白い目でケンジを見つめ、彼はハハハ…と乾いた笑い声を上げる。その時、ヘリがやって来てポートに上陸する。

「約10m先の森の中に作った地下アジトを拠点に、元ダーク団反對派による支部を各地に作った。このヘリポートもその一つだ」

ヘリの戸を開き、ゲンタは補助席に乗る。デント、ヒカリ、カスミ、

ミヤギ、アイリス、ケンジ、ハルカ、パジエラ、タケシ、サトシの順に乗り込む。しかし最後の一人、ゾーマは乗り込まない。

「間もなく此処にジャッジメントの奇襲部隊が来る、先に行け」

その言葉にゲンタはハッと気づき、渋い顔付きで訪ねる。

「……ゾーマ、まさか」

「老兵は静かに散る……もうお前達は私がいなくとも大丈夫だ、行ってくれ」

サトシ達は敬礼の意を唱え、そのまま輸送ヘリは離陸していった。遙か遠いギリアス地方に向けて……。

ゾーマは親指を立ててヘリを見送り自分のポケモン……フリーデイン、レパルダス、ヨノワール、ヤドキング、チャーレム、ヘルガーを出した。

「皆、もうお前達は自由の身となった。此処でお別れだ」

「いたぞ！ 奴は元ダーク団幹部“妖魔”ゾーマだ！」

「……フリーデイン、グラビティ・ホールだ」

フリーデインはゾーマと50人の戦闘員を巨大な黒玉に吸収、彼を含めた6匹はそのまま走り去った。

「悪いがお前達には、私と共に地獄まで付き合って貰うぞ……！」

「き、貴様アツ!」

———頼むぞ、未来の若人達。

「そして、また会おうぞ!」

『うわっ———』

グラビティ・ホール、虚空の衝撃弾となるその技は草木を吹き飛ばし、強烈な大爆発を引き起こした。

薄れ行く意識の中、ゾーマは育ててきた青年の後ろ姿を確認し、親指を立てて見送る。

———さらばだ、我が弟子よ。

T o b e c o n t i n u e d

#7 ギリアス地方の到着と動き出す影（前書き）

更新しました！

#7 ギリアス地方の到着と動き出す影

茜色の空の下には青い海が広がり、輸送ヘリの補助席でゲンタはモニターに映る沢山の赤い点と一つの青い点が消えたのを確認し、悲しそうに後ろに座る仲間達に告げた。

「ゾーマは————戦死した」

『!!!』

俺達を生かす為に囚となり、犠牲になった。

悲しく呟いた彼の目からは涙が零れ、ヒカリとアイリスは嗚咽を上げて泣きじゃくる。ハルカとデントは涙を堪え、そんな彼女等を抱いて慰める。

「……」

サトシは茜色の空に浮かぶ夕日を見つめ、拳を握り締める。目つきを鋭くさせて沈んでいく太陽を見つめた…。

ギリアス地方・カオスパレス

暗い室内にてカラドはライザからアタツシエケースを譲渡され、アタツシエケースを開けて黄金色に輝くメテオナイトを確認した。

ほう…とその輝きに笑みを零し、背後にある巨大な隕石の塊を小さな隕石にはめ込む。

「これで世界中に散らばったメテオナイトは我々のいるこのギリ阿斯地方を除き、全て集まった……残るはギリ阿斯地方にあるメテオナイトのみ……」

「はい、仰る通りです。カラド様」

皇帝を拝む様にライザが身を縮ませる、気に食わないのか11人の内の一人――銀髪の美女がドレスを纏って近付く。

「ふんっ…何が仰る通りよ。私は見ていましたわよ、貴女が“殺鬼”を見て甘い表情になったのを」

きつい性格なのか、その美女はライザに問いただす。

「それは貴女の想像に任せるわ」

ライザは素っ気なく答え、腕を組んで位置に着く。

「こっ…この…!」

食いかかろうとした彼女を一人の白い胴着を身に着けた男が制止した。

「止めぬか! 仲間同士で揉めるのは主の機嫌を損ねるぞ」

「…んですって…!」

男の答えに女は眉を顰める、逆立った白いメッシュの茶髪の女も歯を軋ませたが、敢えて我慢した。

「ラセツの言う通りだ、マンダ。堪えよ」

カラドは女————マンダを諭し、マンダは大人しく引き下がる。

「ぶ〜〜……カラド様、僕は何にもしなくて良いの？つまらないよ」

茶髪の少年が頬を膨らませ、カラドに質問する。

「そうだな…彼等の行く先は恐らくギリアス地方の権威、ポケモン学に適した有能なる才女、シマザキ博士の研究所があるリヴァタウ
ン…」

「あの女ですねえ、あの女なら“雷の雷帝”に協力しても可笑しくないねえ」

ローブを纏う不気味な程に美白な肌の男が顎を触り、カラドを促す。

「ギリアス地方の初心者用ポケモン、リープン、ファマー、アクタシの捕獲をリク、君にその任を任せよう」

「本当！？ありがとうカラド様！」

リクと言う少年ははしゃぎ出し、彼はその場から出て行った。

「よろしいのですか？あんなガキを行かせても」

緑色のロングヘアーの青年が不機嫌そうに言う、カラドは彼に疑問を問いだ。

「何か不満か？レイラ」

「不満も何も、彼奴は12歳。不出来なガキに任せても支障が出るのみ、彼奴はライトとは違い、訓練等碌にされていません」

彼の監視に参ります、とレイラと呼ばれた青年は退室していく。

「過保護だねえ♪まあ、良い事だけど♪」

「甘い奴だ…」

「……」

その傍らでレイラを見つめるのは、水色の髪にサングラスを掛けたアロハシャツの青年、背中に鋭く尖った槍を背負った赤長髪で黒尽くめの服装にマスクで顔を覆った褐色肌の中性的な人物、スキンヘッドで赤茶色の民族服を着た男。

「クレイはどうした？」

「彼は何時も何処かでサボっているヨ」

笑みを零してライトが答え、カラドはそうか…と呟く。

「お前達12人の断罪者“アスリウス”には期待している、無論他の者達にもだ。一度聞こう、我々の目的は何だ？」

『今の世界を壊し、新たなる世界を創世する』

声を揃えて答える9人の強者達。

「そうだ、それを忘れないで欲しい。メテオナイトの搜索も開始させよ」

7月21日 AM7:51

輸送機は雲を突き抜け、サトシ達は窓越しから海に浮かぶ大きな大陸を見つめる、女性陣とケンジは声を漏らしその姿に感動を覚える。

「あれがギリ阿斯地方か：何だかわくわくしてくるぜ」

拳を握り大陸を見下ろして言うサトシ、操縦席のパイロットがレバーを動かすと輸送機は空港に向かっていく。

「間もなく当機はリヴァタウンに到着致します、皆様、どうかお気を付けて」

「おうよ、リック。おめえも氣い付けろよ？」

リックと呼ばれたパイロットは微笑んで頷く、輸送機は車輪を出し、無事彼等はギリ阿斯地方に到着した。

「グランドフェスティバル、絶対に出場してみせるんだから！」

「俺もギリアスリーグに出場する為、バッジをゲットしてやるぜ」

次回より、ギリ阿斯地方での冒険と戦いが始まる！

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

#8 “アスリウス”

リヴァタウン、新しい旅の微風が吹く田舎町。

サトシ、カスミ、タケシ、ケンジ、ハルカ、ヒカリ、アイリス、デント、ゲンタ、パジエラ、ミヤギの11人は空港を後にしてこの町でポケモン研究に励む研究家、シマザキ博士の元を訪れようと町中を歩く。

「シマザキ研究所はこの角を曲がり、更に左に曲がった所の橋を渡った先にあるよ」

電子用のタウンマップでデントが先導しており、街角を曲がる。サトシ達は彼の後に続いて歩く。

「にしても凄エなこの地方のポケモンは」

ミヤギが感心しながら周囲を見る、行く先には葉っぱを頭に乘せた狸みたいなポケモン、雪女みたいなポケモン、その他にもいる。

「何でこんな海の向こうにムックルやスバメ、エアームドがいるの？」

空に飛び交う飛行ポケモン達にヒカリは頭を抱えた。逆にアイリスは目を輝かせ、ポケモン達に見取れていた。

「こんな事で悩むなんて、ヒカリったら子供ねえ？」

「何ですって〜？アイリスも人の事言えないじゃない」

「何よ？」

額を擦り合う少女二人、ポツチャマとキバゴはお互いの主人の行為に呆れる。

「お前達、何だかんだ言って仲が良いんだな」

タケシは口論する二人に向かって言う、すると二人の視線がタケシに向けられる。

「なっ何言ってるのタケシ！？何で私がこんな女と…」

「絶対に有り得ない！」

必死に否定する二人、他の9人は思わず笑う。

「喧嘩する程仲が良いな、お前等」

『！！』

二人は思い人——サトシに言われ、頬を赤らめる。

「ちょっとサトシ！？」

「変な事言わないでよ！子供の癖に！！」

はいはいと罵声を聞き流すサトシ、うわぁ！と声がすると藍色の髪の少年が走ってきた。その後ろにはツインテールで黄色の髪の少年がいる。

「ピカチュウだあ！本物見るの初めてだ！」

「此方にはキバゴとポツチャマ、ルリリもいるわよ！」

きゃっきゃつと幼い少年少女——推定10～11歳ぐらいと思われる——はピカチュウ達に目を輝かせ、じつくりと見ている。

「君達、そんなにこのポケモン達を見るのが初めて？」

「うん！このギリ阿斯地方にはポツチャマとキバゴはいないし、本物のピカチュウを見るのは初めてなんだ！」

「あ、自己紹介が遅れました！私、リルって言います。此方は幼馴染で隣に住むユウタです」

ユウタとリルと呼ばれた少年少女は微笑み、自己紹介をした。

「私はカスミよ」

「俺はタケシ、ポケモンドクターだ」

「僕はケンジ、ポケモンウォッチャーなんだ！」

「私はハルカ」

「私はヒカリ、ポケモンコーディネーターよ」

「私はアイリス、ドラゴンマスターを目指しているの」

「ポケモンソムリエのデントです」

「パジエラってんだ、よろしくな」

「俺はミヤギだ」

「ゲンタだ」

「俺はサ」

瞬間、凄まじいスピードでカスミとタケシがサトシの口を塞いだ。

ユウタとリルは驚き、サトシの方を見る。

———あんた、しばらく本名を隠した方が良いわよ。

———ポケモンマスターと聞いたら、町中大騒ぎだぞ？

———お、おう。

小声でそう言い、カスミとタケシの手を払いのけるサトシ。

「俺はアッシュと言うんだ、ポケモントレーナーさ」

「よろしく、アッシュさん」

「よろしく！」

頭を下げるリル、手を上げて気安く挨拶するユウタ。

「ユウタ、そろそろシマザキ博士の所に行きましよう？今日は待ちに待った旅立ちの日なんだから！」

「おお、そうだった！早く行かなきゃ！」

そう言って二人は走り出す、微笑んだ一同は二人に着いていく様に歩き出し、左に曲がり、橋を渡る。

「アッシュさん達、どうして着いてくるの？」

「俺達もそのシマザキ博士に用があるからさ、この地方のポケモンの事を知る事が出来るからな」

「そうなんですか。」

橋を渡り、その先に研究施設が建っているが見えた。あれがシマザキ研究所の様だ。

「此処がシマザキ博士の研究所か…！デカいな」

「そうだね、何だか神秘的なFlavorが醸し出されているねえ」

玄関までに行くと自動ドアが開く、中には白衣の下に水色のインナーを身に着けた青髪の女性が助手と共に立っていた。

「いらっしやい！待ってたわよ、二人共」

『おはよう御座います、シマザキ博士！』

ユウタとリルはお辞儀し、シマザキ博士に挨拶した。その瞬間、タ

ケシが彼女の手を取った。

「自分はタケシと言います、自分、貴女に会う為遙々カントーからやって参りました!」

『は?』

シマザキ博士、ユウタ、リルは彼の奇行に呆気に取られ、口を思わず開いた。

「出来ればこの後、ご一緒にお茶を」

「あの〜悪いんだけど私、しつこい人間は嫌いなよ…?」

「へ…?」

雰囲気が一変し、シマザキ博士が腹黒い笑みを向ける。タケシは彼女の変貌に啞然とする。

「それに私、二児の母親なの」

「ぐはっ!」

ショックを受けてタケシは倒れ込み、そんな彼をグレッグルが引きずっていく。

「えーと、タケシさんどうしたんですか?」

「嗚呼ごめんね、年上の女性を見ると何時もああしてナンパするんだけど、既婚者だとは思わなかったわ…」

カスミが苦笑いしながらシマザキ博士を見、サトシが彼女と握手を交わす。

「サ：アッシュ君、貴方の事は新聞で見たわ」

「どうもありがとうございます、ギリアスリーグには挑戦するつもりです」

サトシと意味深な会話を交わし、シマザキ博士はユウタとリルに振り返った。

「ようこそ、ポケモン世界へ！私達は貴方達を歓迎するわ」

『ありがとうございます！』

助手の一人がストレッチャーを3人の間に運び、その上には3つのモンスターボールが置いてある。シマザキ博士はその内のモンスターボールを一つ取る。

「では最初に貴方達のパートナーを紹介するわ、先ずは炎タイプのフアマー！」

最初に出て来たのは、火薬ポケモンのフアマー。フアーと鳴くフアマーは宙を舞う。

「可愛い！何このポケモン、凄く可愛い！」

アイリスが豪語していると、シマザキ博士は次のモンスターボールを取る。

「次は水タイプのアクタシ！」

二つ目のボールから液体ポケモンのアクタシが登場、カスミはキャー！と叫んでアクタシをじっくり見る。

「このポケモン、全身が液体で出来ているのか。」

ケンジがスケッチブックでアクタシの絵を描いていき、アクタシは微笑んでいる様に見える。

「最後は草タイプのリープン！」

最後のモンスターボールから発芽ポケモンのリープンが現れる、リープンは葉っぱに乗って笑っている。

「この子可愛いわ！良し、私はリープンにする！」

リープンを抱き上げ、リルは可愛らしい笑顔を向ける。

「男は熱く燃えるんだ！だから俺、ファマーにするよ！」

ファマーを肩に乗せ、ユウタが高らかに答える。シマザキ博士はそう、と答えた。

「そしてこれがポケモン図鑑と、ポケモンをゲット出来るモンスターボール。二人共、ポケモン達と共に楽しい旅を送ってね」

『はい！』

二人はポケモンをモンスターボールに戻し、ポケモン図鑑を受け取り研究所を出ようとする。

「…伏せろ！」

『え？』

ゲンタは二人の身を下ろさせる、その瞬間自動ドアのガラスが割れ、爆発が起きる。

ビーッ！とサイレンが鳴り、一人の助手がコンピューターを操作する。

「博士、襲撃です！」

「また彼等ね…！！」

はにかむ様な表情をし、シマザキ博士は外に出る。

「おい、てめえ等は研究所の屋上で大人しくしとけ！」

「なっ何でだよ！？敵なら俺がやっつけて…」

「パジエラの言う通りだ、まだバトルをした事が無い子供が危険な事件に巻き込む訳には行かない、足手纏いだ」

サトシに諭され、ユウタは俯く。

「リルちゃん、ユウタ君と一緒に屋上で待ってて」

「はっはい！」

ハルカからそう言われ、リルはユウタと共に非常階段を上って行った。彼等が去っていくのを確認し、一行は外に出る。

「え！？もうこんなに！？」

デントは100人程の白服の軍団の多さに驚く、その中心に一人の少年がいた。

「シマザキ博士、久し振りだね。此処にある初心者用ポケモン3体、全部僕達に譲渡してくれる？」

あどけない笑顔で訪ね、少年は手を差し出す。

「何だ彼奴、子供だぜ？」

「でもあの子から感じる波導……何なの？とても禍々しいじゃない」
ミヤギは驚いて、アイリスは汗を流して少年を観察する。

「あら？クラウザーかレイラ中りが来ると思ったら、貴方だったの。
“アスリウス” 猛獣部隊隊長“野獣” リク」

「僕の所のボスが此処に行けって言われたんだよ！」

ウキウキと笑いながら少年——リクが言う。

「シマザキ博士……“アスリウス”って何ですか？」

ケンジが疑問を問いただし、シマザキ博士は険しい表情で語り出す。

「“アスリウス”は12人の断罪者、世界から見放された無法者達が集まっている、それらはトレーナーとしての腕はジムリーダー以上の実力を持っているの」

その言葉にカスミとデントは驚き、リクを見る。彼は無邪気に笑い、指示を出した。

「皆、カラド様の為に初心者用のポケモンを捕まえよう！そして、彼奴等と遊んであげて？」

「オウ！」

隊員達はポケモン達を出す、対するサトシ達はピカチュウ、ルリリ、グレッグル、ストライク、バシャーモ、ポッチャマ、キバゴ、クチート、エアームド、シャワーズを投入した。

「僕は高見の見物しよつと」

リクはジャンプして木の枝に乗り、行われたバトルを見つめる。

「受けて立ってやるジャッジメント、お前等の計画を止める為に：！ピカチュウ、10万ボルト！」

強烈な電撃が70体程のポケモンを薙ぎ払う、リク達はそれに驚いた。

「す、凄い…！」

目を輝かせ、リクが感心する。

「あれが、ポケモンマスターの力……!!」

小型カメラを通してノートパソコンを見ていたレイラも驚き、拳を握った。

「ルリリ、水鉄砲！」

「グレッグル、毒突き！」

「ストライク、居合い切り！」

「バシャーモ、ブレイズキック！」

「ポッチャマ、渦潮！」

「キバゴ、竜の怒り！」

「クチート、目覚めるパワー」

「エアームド、ラスターカノン！」

「シャワーズ、ハイドロポンプ！」

それぞれの必殺技が叩き込まれ、残ったのは15人となった。

「情け無いなあ……僕の出番が直ぐに来ちゃうよお」

「すみません隊長！直ぐに抑えますので！」

「うん。頑張ってね」

気楽に手を振るリクは意気揚々と語る、次回はリクとの戦闘だ。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

#9 Opening of new adventure

リヴァタウンにてポケモン研究家のシマザキ博士、新人トレーナーのリルとユウタに出会ったサトシ達。

そんな彼等の前にジャッジメントの幹部“アスリウス”の一人、“野獣”リク率いる猛獣部隊が現れた。

「ハイドロポンプ！」

「ポツチャアアアッ！」

ハイドロポンプでイワークを木々に叩きつけるポツチャマ、彼を含めた10匹のポケモンは平然とした表情をしている。

「す、凄エー!!」

「あんなにいたポケモン達を簡単に……」

屋上からサトシの活躍を見ていたユウタとリルは目を大きくする、二人の警備に当たっていたデントは優しく笑んだ。

「あーあ、やっぱり負けちゃったか」

木から飛び降り、リクは悶絶する隊員達に呆れた目線を送りながらサトシ達の前に立つ。

「100人の僕の仲間を倒すなんて凄いねお兄ちゃん達、でもね、

僕はこの人達のように甘くないよ？」

それを聞いて身構えるポケモン達、ライトは腰に付けてあったモンスターボールを空に投げた。

「さあ。駆け抜けろ、ウインディ！」

モンスターボールから現れたのはガーディの進化系のウインディ、ウインディの身体から白いオーラが発され、咆哮を上げる。

「どうする？あのウインディはどう見ても良く育てられているよ」

「とは言っても、俺はピカチュウ以外はマサラタウンに置いていたからな…」

「俺はグレッグルとラッキーだ」

「私はルリリしかないわ」

「僕はストライクとコンパン」

「私はバシャーモ、エネコだけかも」

「私はポッチャマとミミロルだけよ」

「私はキバゴとドリユウズだけ」

「ハッサムとクチート以外アジトに残した」

「俺はオーダイルとシャワーズ」

「俺はエアームドとボスゴドラだけだぜ」

仕方ねえと言葉を漏らし、パジエラは刀からモンスターボールを出した。

「斬れ、ボスゴドラ！」

ボスゴドラはウインディの前に現れ、ウインディを鋭く睨んだ。

「水色のお兄ちゃんが相手か、楽しみだな〜♪」

「ハンッ！ガキ、大人をあんまり嘗めてつと痛エ目に遭うぞ？」

「そのつもりだよ！ウインディ、神速！」

ウインディは勢い良く走り、ボスゴドラに突進する。しかしボスゴドラはメタルクローを繰り出し、神速を止めている。

「凄いね兄ちゃん！神速を手だけで受け止めるなんて！」

「ハッ！此方は心でカバーしてんだよ！」

ボスゴドラは諸刃の頭突きで相手を吹っ飛ばし、地震を繰り出した。

ウインディは攻撃を持ち堪え、火炎放射でボスゴドラを飲み込む。

「俺の相棒に…炎なんざ効かねえ！」

その台詞に応える様にボスゴドラは吼え、口に閃光が集まる。

「吹っ飛べ！ラスターカノン！」

銀色の閃光が木々を吹き飛ばし、ウインディは横たわって倒れた。

「ウインディ！」

自分の仲間が倒された事に齒を軋め、リクはウインディをボールに収納した。

「今日はこれ位にしておくよ」

「隊長！では初心者用ポケモンは…」

「失敗したと報告するよ、ポケモンマスターが相手じゃ僕も流石にお手上げだよ」

バイバイと背を向けて手を振って歩き去るリク、隊員達は彼を追いかけていく。

「ポ…ポケモンマスター！？」

「う、嘘だろ！？アッシュの兄ちゃんが！？」

「違うよ、名前が。サトシって言うんだ」

リルとユウタはあまりの驚きに狼狽し、デントは名前が違っていると指摘した。

事態は終息され、リルとユウタはサトシ達に別れを告げて旅立った。

「はい、これが新しいポケモン図鑑よ」

ありがたい御座いますとシマザキ博士から図鑑を譲渡され、サトシは上着のポケットに仕舞い込む。

「これから貴方達はそれぞれの旅の目標に行くのよね？サトシ君、ヒカリちゃん、ポケモン達の転送はどうするの？」

「偶に研究所に連絡して送って貰おうと思います、ヒカリも実家から送ると思いますので」

ヒカリは此方に微笑んだサトシを見て顔を真っ赤にする、アイリスは面白く無さそうな顔をして頬を膨らませた。

「それでは行ってきます」

『さよなら！』

彼等は手を振り、シマザキ研究所を後にする。タケシはポケギアを取り出し、タウンマップを見る。

「此処から先にあるクシャータウンでは2週間後にポケモンコンテストが開かれ、ジムは更に先にあるストンシティにあるぞ」

「まずはポケモンコンテスト、絶対に大丈夫！」

「ヒカリ、頑張れよ」

最初の敵“野獣”リクを退け、サトシ達の新たなる冒険が始まる。

そしてこの地方に起こる、最大の危機が彼等を待ち受けていた。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

#10 クロッチとオオスバメの森でゲットだぜ!

401番道路、サトシとアイリスを先頭にした一行はムックル達が飛び交う森を歩き、快晴の青空の下にいた。

「今日は良い天気だなあ、こういうポケモンと出会えるのか楽しみだぜ」

「ピカチュウ!」

「全くもう、そんな事言ってもポケモンは逃げないでしょ?」

呆れた口調でアイリスが答える、キバゴも同じ様に呆れていた。

「まあゲットするなら、虫タイプか飛行タイプだな」

「そんな簡単に見つかるかな?」

不安げな表情でケンジが苦笑いを浮かべる、すると彼の足下に少し大きい石があった。彼はそれに気付かず、蹴飛ばした。

『へ?』

蹴った石は茂みの木々に次々と当たっていき、森の奥へと消えていった。

「…ははは、危なかったなあ。ポケモンに当たってたら大変な事になったよと言葉を続けようとした瞬間、森の奥の影に20個の眼

孔が見えた。

『スバアッ!!』

大勢のオオスバメが茂みから飛び出す、オオスバメ達はサトシ達に攻撃する。

「いたたたたっ！」

「本当に起こしてどうするのよ!？」

「と、取り敢えず逃げよう！」

「か、かもくく！」

ケンジを先頭にしてサトシ達は必死に走る、その時チュンチュンと言う声をサトシは聞き逃さなかった。

「ケンジ、退け！」

「え!？」

ケンジを通り越してサトシは小さく走る、その先にある小さな木に一介の雀が小さく鳴いてた。

「おい!其処にいとやられるぞ、今助ける！」

サトシは大きくジャンプし、小さな雀を抱き抱える。そんな雀を抱えたサトシの背中を、無情にもオオスバメ達は徹底的に嘴で攻撃する。

「ヤナップ！タネマシガン！」

デントのモンスターボールから現れたヤナップはタネマシガンを放ち、驚いたオオスバメ達は退散していく。

「ふう…大丈夫か？」

チュンと鳴いてサトシからそっぽを向く雀、サトシの頭にゲンタからの拳骨が振り下ろされた。

「が…！？」

「不死身とはいえ、面倒な真似をするな」

ゲンタからの指摘に彼は頭を押さえ、雀を見る。

「一体此奴は何なんだ？」

サトシは新しいポケモン図鑑を取り出しその雀の姿をしたポケモンをスキャンした。出て来た名前はクロッチと言う様だ。

「クロッチかあ…お前、正義感が強いみたいだな。俺はサトシ、よろしく」

プイッとそっぽを向く雀——基クロッチ、クロッチは空を見上げると小さな身体で羽ばたいた。

しかし木の草まで届かず、息を切らしてそのまま木の枝に取り付く。

「まさかあのクロッチ、森の木よりも高く飛びたいのか？」

「みてエだな」

ゲンタは手を顎に当てて察知し、石で刀を研ぐパジエラも感心している。

「上手く飛びたいのか……？」

コクリと頷くクロッチ、あまり人間を信用してないのか顰めた顔をしている。

「解った、俺達もそれに協力するぜ。な？皆」

『ええ 嗚呼』

サトシの答えに頷く一同、ゲンタはフ…と鼻で笑う。クロッチは彼等の返事に驚き、目を丸くする。

「パジエラ、エアームドを出してくれ。タケシとアイリスはクロッチの為に栄養のある木の実を収拾、カスミとミヤギは邪魔になる様な枝と盆栽を栽培、頼むぞ！」

担当を割り当てられた4人は行動を開始し、パジエラはエアームドを出した。

「んで、エアームドで何する気だ？」

「クロッチに飛び方を教える為だ。エアームド、申し訳ないが引き受けてくれるか？」

エアッ！と高らかに鳴き、エアームドは頷いた。エアームドは空高く飛び、クロッチもエアームドの後について行こうと飛ぶも、大木の頂上位でバテてしまう。

「クロッチ、焦るなよ。確かに大きく飛びたい気持ちは解る……だが、他の仲間と張り合うな！自分の思いたい様に飛べ！」

サトシからのアドバイスにクロッチは目を潤ませた、涙を拭い決心が着いたのか、力強く頷いた。

丁度その時、カスミと大量の枝の束を背負ったミヤギが戻ってきた。

「サトシ、ある程度邪魔な枝は回収したわ！」

「…で、ミヤギが担いでる訳ね」

「何だよ、文句あるか？」

黄色いTシャツに青いパーカーを羽織った銀髪を哀れに思い、ヒカリはサトシに質問した。

「この枝の束は何に使うの？」

「野生のオオスバメ達を引き寄せる為に使うのさ」

「！ちよつサトシ…まさか」

顔を引き釣らせ、デントは彼を見た。

「正解だデント、ポケモン図鑑にはスバメの餌にする為、奴等はクロッチの巣から食料を調達すると乗っていた……この枝を利用し、オオスバメ達をおびき寄せる」

そう言ってゲンタを指すサトシ、本人は面白く無さそうにチツと舌を打った。

「つまり俺は囷か…嫌な真似をしやがる」

「やっぱり駄目か…？」

ゲンタは枝の束を自分の背中に括り付け、そのまま何も言わず歩き出した。

「やってくれるみたいね」

ハルカは静かに微笑み、サトシもそれに釣られて苦笑いを零す。

「素直に引き受けるって言えば良いのに」

茂みからアイリスとタケシが飛び出してきた、二人の手には木の実が沢山入った箆を握り締めていた。

「どう？これなら行けるかしら？」

「他にも実った木の実があるから穫りに行くが…」

「否、これで十分だ。クロッチ、先ずは腹掬えだ！」

クロッチの目に木の実の箆が目に入り、がつつく様にクロッチは木

の実を頬張り出した。

「お腹空いていたんだね」

「後は、奴さん達がどう出るかだ」

ゲンタが歩いていった方を見つめ、パジェラは鋭い眼光で道の先を凝視する。

オオスバメ達が住処に使っている巨大な樹、ゲンタは束を其処に置き、枝を一つ取る。

———彼奴か。

木の天辺に立つ群のボス———通常より2cm大きいオオスバメに目標を定めた。

枝を思いっ切り投げ、枝は回転して天辺を昇っていく。

「！スバァッ！！」

ボスのオオスバメが目をカッと開かせ、エアスラッシュを放った。枝は一瞬にして粉々となり、欠片がゲンタの足下に落ちる。

『スバァー！！』

今の行動が宣戦布告と断定したのか、オオスバメ達は一斉に飛びかった。ゲンタは束を背負い、サトシ達の所へ向けて走り出す。

エアスラッシュを次々と躲し、ゲンタは走るのを止めない。そして

段々サトシ達の姿が見えてきた。

「ゲンタ！もう十分だ！」

「そうか」

走りながら束を空に投げ捨て、一瞬でサトシ達の元へ戻っていった。サトシはポケモン図鑑でクロッチの使える技を調べていた。

「電光石火：影分身：翼で打つに、念力！？行ける：クロッチ、あの連中を恐れるな！」

お前の思う様に飛べ！！

彼からの言葉にクロッチは甲高く嘶き、翼を大きく広げて羽ばたいた。少しずつ：少しずつ：木を飛び越え、その場を飛び回っている。

「飛べた！」

「凄いよクロッチ！」

ヒカリとアイリスは歓喜の声を零し、クロッチはUターンしてオオスバメ達に向かう。

「チュウウン！」

クロッチは強力な念力を飛ばし、3体のオオスバメを木に叩きつけた。

「ミミロル、跳び蹴り！」

「エネコ、猫の手！」

ミミロルの跳び蹴りが決まったり、猫の手でバシャーモの火炎放射が出たり…。

「コンパン、虫のさざめき！」

「ヤナップ、ソーラービーム！」

「キバゴ、逆鱗よ！」

次々とポケモン達はオオスバメ達を撃退する、ボスのオオスバメは歯を噛みしめてピカチュウに特攻する。

しかし相手はこの世界で最も強い最強のピカチュウ、オオスバメ等敵ではなかった。

「エレキボール！」

「ピィカ〜〜チュピィ！」

エレキボールが直撃し、ボスオオスバメはそのまま空へ飛んでいった。彼を追いかけて仲間達も飛び去った。

「チュンチュン！」

「クロッチ、これは俺達の手柄じゃない。お前だけの手柄だ」

クロッチは静かに頷き、近くの枝に飛び乗った。そしてチュン！と

威勢良く嘶いた。

「どうやらクロッチは君の事を気に入ったみたいだね？」

「みたいだな、どうだ？俺とバトルして一緒に来ないか？」

クロッチはその問いに答える様に頷く、ピカチュウはそれに応じて一歩歩く。

「ピカチュウ、電光石火！」

ピカチュウは電光石火を繰り出すが、クロッチは華やかに躲す。クロッチも電光石火を繰り出し、ピカチュウを吹き飛ばす。

「チュン！」

更に念力で地面に叩きつける。ピカチュウは起き上がり、電光石火を繰り出した。攻撃を受けたクロッチが体勢を立て直す所を…。

「アイアンテール！」

アイアンテールで叩きつける。そして…。

「10万ボルト！」

「ピイカアチュウウウウッ！！」

必殺の10万ボルトが決まる。効果抜群の技を受け、クロッチは気絶。クロッチの気絶を確認し、サトシはモンスターボールを出す。

「行け、モンスターボール！」

投げられたモンスターボールがクロッチを吸い込み、ボールはカタカタと揺れる。

『……』

ボールの抵抗が弱まり、キャプチャーマーカ―が消える。サトシはパアツと笑顔となり、モンスターボールを取る。

「良し。まずはクロッチ、GETだぜ！」

「ピッピカチュウ！」

お決まりの台詞を披露する一人と一匹、カスミ達は拍手を送る。

「やったわねサトシ！」

「嗚呼、ギリ阿斯地方に来て初めてのGETだからな。――――緒に強くなるうな、クロッチ」

そうボールに呼びかけ、微笑むサトシ。その笑顔に悩殺されヒカリとアイリスは頬を赤らめた。タケシ達は苦笑いを零し、ゲンタはハッンと溜め息を吐く。

「感情に浸かっている暇があれば、とっととバッジを手にする事だな」

解ったよとゲンタの皮肉を受け流すサトシ、彼等の微笑ましい様子を一人の人物が覗いているのを誰も知らない……。

最初のポケモン・クロツチをGETしたサトシ、クシャータウンを目指す彼等の旅が、今始まった。

「…ピカチュウを連れたトレーナー…か、これから面白くなりそうですね…フフフツ」

その男はサトシを監視する様に見つめ、不適な笑みを零した。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

#11 再会の巫女! フロンと虹の木の実!! (前書き)

今回は映画からのゲストキャラが登場します。誰かは読んでみると分かります!

#11 再会の巫女！フロンと虹の木の実！！

クロッチをGETし、ポケモンコンテストが開かれるクシャータウンに向けて旅を続けるサトシ達。現在はランチの準備をしており、この場の荒地にはデント、タケシ、カスミ、ハルカ、ヒカリ、ゲンタ、ミヤギの7人。

サトシはトレーニング、ケンジはこの辺りのポケモンの生態調査、アイリスは木の実の調達、パジエラは川沿いに魚を釣る為に釣竿を持って行った。

「タケシさんは凄い、tasteな調味料を種類事に持っていますね、少し分けて貰っても良いですか？」

「嗚呼、構わないぞ？デントのレシピも絶えないな、今度教えてくれないか？」

どうぞとニコリと微笑むデント、仲の良い二人を余所にゲンタはジャガ芋、林檎、南瓜の皮を器用に剥いていた。

「凄いよゲンタ、あんなに固い南瓜の皮を凄く簡単に…」

ヒカリは感心しながら、剥いてある南瓜をじっくりと見つめる。

「5年も長くダーク団としてやってきたのだ、給仕には何時も俺とミヤギが担当していた。」

と言ってミヤギに視線を向ける。

「そうだよな〜、中にはお代わりくれって言う奴もいたし、あの頃はめっちゃ大変だったぜ」

苦笑いを零しミヤギが包丁で南瓜をタンタンと切り、箆に入れていく。ハルカとカスミが切った食料が入った箆を持って行く。

「タケシ、此方入れて良い？」

「入れてくれ、頼む」

カスミは南瓜を井に入れる、別の方ではハルカがデントのフライパンにジャガ芋を入れ、その次にデザート用の皿に林檎を乗せた。

その頃、アイリスは木々に飛び移り、木の実を箆に集めていた。キバゴも小さな手で集め、主の手伝いをしている。

「これで良いよね？キバゴ」

「キバアツ！」

可愛らしく微笑むアイリスとキバゴ、蔓を伝って仲間がいる場所に戻っていく。

「…あれ？」

蔓を伝っていく中、下の草原に何かを見つけた。一旦枝で屈み込み、じっとその影を見つめた。

「た、大変！」

草原にいたのはうつ伏せに倒れた朱色の髪的女性だった、白いニット帽に水玉模様の黒いビキニ、下には長ズボンを着てザックをぶら下げている。

彼女の隣にはイーブイが心配そうに鳴き、瞳を潤ませている。蔓から降りたアイリスは急いで女性の元へ駆け寄った。

「大丈夫ですか!？」

アイリスは身体を揺するが、女性は気を失っている為反応が無い。

「ブイイ…」

「大丈夫、貴方のトレーナーは助けてみせるから…!」

ね?と心配するイーブイに微笑む、アイリスは箆から取ったオレンの実を少しかじり、上体を起こした女性の口に入れる。

女性は欠片を甘く噛んで飲み込む、少し安堵の表情をアイリスは見せ、モンスターボールからドリュウズを出した。

「ドリュウズお願い!急いで皆の所に戻るわよ!」

ドリュウズは女性を抱き上げて走り、アイリスもその後を追う。

その頃、サトシとケンジを呼びにカスミは森に入り、釣りから戻ったパジエラは腕を組んで腰を下ろす。

「遅い!アイリスったら、何処まで行ったのかしら?」

ヒカリは苛立ってアイリスの帰りを待ち、頬を膨らませる。ハルカはそんな彼女をまあまあと宥める。

「取り敢えずマカロンを如何致しますか？」

「え？ た、食べるわよ」

ヒカリは目を丸くしてマカロンを頬張る、彼女の様子に皆苦笑いをする。

その時、丁度アイリスがドリユウズと共に戻ってきた。

「皆ー！」

「アイリス！ 一体何処まで行っ……て」

文句を褐色肌の少女にぶつけようとしたヒカリ、しかしドリユウズが抱き上げている物を見て顔色を変えた。

「たっ大変だ！ 直ぐに救急箱を！」

タケシはリュックから救急箱を取り、痣で出来た箇所を消毒、包帯や絆創膏を巻き、タケシはふう……と息を吐いた。

「これで一安心かも……」

ハルカも苦笑いし、腰を下ろした。

「所でこの娘さん、何処で見つけたんだ？」

ミヤギが疑問を抱き、アイリスに聞いた。

「森の中で倒れていたのよ、イーブイが鳴いているのを聞こえたから確認してみたら」

「この娘がいたと言う事か」

頷くアイリスから女性に視線を移し、ゲンタは彼女を見る。すると女性の瞼が動き出した、一同がそれを見つめていると…その目が開かれた。

「こ…此処は？」

「あっ！起きたら駄目ですよ！」

上体を起こそうとするもフラリと身体を歪ませた女性を押し倒し、アイリスは心配そうな顔をする。

「貴女は？」

「私はアイリス、此方にいるのは仲間のタケシ・ハルカ・ヒカリ・デント・ゲンタ・パジエラ・ミヤギです！」

「森に倒れてたあんたを、此奴が介抱したんだ。礼ぐらい言ってやれ」

パジエラに促され、女性はありがとうと可愛らしい笑顔を浮かべて頭を下げた。アイリスはエヘ…と照れながら笑う。

「ブイイ！」

「イーブイ！よかったわ、無事で！」

イーブイの無事に喜び、女性はイーブイを抱き上げた。

「いきなりで申し訳ないけど、どうして君は森で倒れていたんだい？」

タケシの問いを聞き、女性は渋々と答えた。

「私はとある南国の島の生まれで旅立ったのはついこの間なの、イーブイはお爺様から貰った贈り物。この森に虹色に輝く木の実があると云う噂を聞いて、それを守るポケモンとバトルして……」

頂垂れて朱色の髪を触る女性、イーブイも同じ様に落ち込んだ。

「困った時は助けて上げないと申し訳が付かない。皆、この人に協力して上げましょう！」

うんと頷く一同、女性は顔を上げてありがとう御座いますと微笑んだ。

「そう言えば君の名前は？まだ聞いてなかったが」

「嗚呼、忘れていたわ。私は」

その時、丁度サトシ達3人が戻ってきた。

「ただいま〜！」

「ふう…やつと着いた」

「そうだねえ。でも僕は此処のポケモン達のレポートを纏めれたし…」

あつサトシ!とヒカリが3人に気付き、彼等に向けて手を振った。

「あつ皆!ごめんね、遅くなっちゃ…」

「昼食はまだみたいだけど、どうかした…」

カスミとケンジは一瞬女性を見つめる、すると。

「え…ええっ!?!」

「ど、どうして貴女が此処に!?!」

驚きの声を上げ、二人は女性を指す。呆気に取られたサトシは我に返り、ぽつりと呟いた。

「…フルーラ?」

え?と首を傾げる一同、その名を聞いて女性は目の前の男性をじっと見る。

「もしかして…サトシ君!?!それにカスミとケンジ君まで!」

「やっぱりフルーラ!」

「久し振りだね!」

「元気にしていたか？あれからもう…7年も経つのか」

懐かしむ様に雑話をするサトシ達3人と女性——フルーラ。

「巫女の仕事は大丈夫なの？お姉さんや島の人達の方も」

「平気よ平気、姉さんが結婚してその娘に継がせるのよ。私は今自由気儘に旅をしているの」

フルーラは笑いながら答える。するとゲンタが代表してサトシに質問した。

「おい、知り合いか？」

「あ…忘れていた。この人はフルーラ、オレンジ諸島と言う島国にあるアーシア島の巫女…否、元巫女と言って良いのかな？」

それで良いわよ、とフルーラが答えて頭を下げる。

「改めて、フルーラと言います。よろしくお願いします」

よろしく、とタケシ達が頭を下げる。

「アーシア島って言えば、海の神の言い伝えで有名な島じゃねえか」

「ええ、優れたる操り人を祭る海神祭。7年前、サトシ君がその優れたる操り人選ばれたのよ。その時は海の神を狙うコレクターの所為で大変な事になっちゃったけど」

懐かしむ様な目線でフルーラは空を仰ぐ。

「そうよね、サンダーにフリーザーにファイヤー、それにあのルギアにも会ったし、その時は世界が破滅の危機に晒されたわよねえ」

「うんうん」

今では笑い話だが忘れられない思い出、今の世界があるのはサトシのお陰なのだ。

「ひょっとしてあの時、異常気象が急に止んだのは」

「うん、サトシが止めてくれたんだよ」

タケシが顎に手を当てて思考を巡らせるとケンジが促す。

「そーいやタケシは知らなかったよな？」

「嗚呼、そうだったな」

頭を掻いてタケシは苦笑い、カスミはそうよねえと言う。

「その時はダイダイ島のウチキド博士の所にいたんだもの。仕方ないわよ」

サトシとケンジはあっ…と声を零した。

「カスミ…それは」

「はっ!!」

自分の漏らした言葉に気付き口を抑えた、他の面々は何が何なのか解らず首を傾げる。

「どうしたの？」

「あれ？タケシは？」

何時の間にかいない彼を目で探すと、木の枝の上にタケシはいた。独特の暗いオーラを漂わせ、縮こまっていた。

「な…何やってやがんだ彼奴？」

「タケシ…？」

普段見られない彼の様子に戸惑いを覚え、ハルカやヒカリ、デントとアイリスは呆然とする。

「おい…どうした？」

「聞かないでくれ…」

『はい？』

ミヤギの問いに応じての受け答えにまた呆然とし、デントが聞いた。

「タケシさん？ウチキド博士と言う人と何かあつ」

「ぬおおおお」

「おい、話聞けや。そのウチキドってのと何か」

「はうううう」

勝手にもがくタケシに皆首を傾げ、ヒカリはサトシに聞いた。

「ねえサトシ…」

「嗚呼、ヒカリが思っている通りだよ。7年振りに出たな、あの反応」

呆れた様な目線でタケシを見つめるサトシ、誰もが彼に同意した。

「えーっと話を纏めると、フルーラは虹の木の実を護るポケモンをゲットしたいんだな？」

「ええ」

事の経緯を聞いたサトシは状況を整理し、フルーラを見つめる。

「その虹の木の実は何処にあるんだ？」

「この先にある滝に一つしか実ってないのよ、さっきはイーブイの事ばかり気に掛けていたから駄目だったけど」

空を指し、フルーラは歩き出す。そんな彼女を、ケンジが掴み止めた。

「君一人じゃ危ないだろ？こういう時、皆の力が必要じゃないか」

「そうよ、私達は皆貴女に協力するわ。そうでしょ、サトシ」

おうと頷いて笑むサトシ、7年振りに見たその顔にフルーラは笑顔を咲かせた。

「ありがとう皆、じゃあ案内するわね」

微笑んでイーブイを肩に寄せ、サトシ達を道案内するフルーラ。薦を避けていき、難がありながらも進んでいく。

フルーラはチラリと自分の後ろ——サトシの腕に抱きついてるカスミを見て、少し寂しそうに息を吐いた。

——仕方ないわよね、今のサトシ君はポケモンマスター。彼女の一人や二人がいても可笑しくないもの。

彼女も彼を想っていた一人だが、二人を見て潔く諦めを見せる。ケンジはその様子に眉に皺を寄せた。

森を段々抜けていき、其処には荒れ果てた断崖絶壁と巨大な滝が流れている。

「うわあ……落ちたら死ぬかも」

「かもじゃなくて、本当に死ぬわよ」

少し恐怖するハルカとアイリス、ヒカリはサトシ達の後に続く。

「フルーラちゃん、そのポケモンは何処にいるんだ!？」

「彼処よ！」

華奢な指先が指した先には細い一本道、その中心に小さなポケモンがいた。

「フロオオウ」

「あれは…？」

ポケモン図鑑で小さなポケモンをスキャン、画面にそのポケモンのデータが出て来た。

《フロン、雪ん子ポケモン。危険を感じると雪の中でじっと待つ。その間は雪を食べている》

「フロンか…でも可笑的い、フロンは普段雪国に生息する筈…どういう事なんだ？」

デントは雪国に生息している筈のフロンが絶壁の道にいる事に疑問を持ち、顎に手を当てる。

「虹の木の実はこの頂上か…フルーラ、お前のポケモンはイーブイ以外何を持っている？」

「言いくいんだけど、イーブイしか持っていないわ」

サトシ・ゲンタ以外がずっこけ、

「えっ！？じゃあイーブイでGETする気！？」

そうよと返し、フロンの前に立つフルーラ。イーブイも彼女の肩から降り、フロンと対峙する。

「フロン！可愛い貴女をGETするわ！イーブイ、体当たり！」

「ブイ！」

イーブイは走り出し、体当たりを繰り出す。しかしフロンはジャンプして躲し、不発に終わる。

「シャドーボールよ！」

反転してシャドーボールを放ち、フロンに命中する。フロンは冷凍ビームを繰り出し、イーブイの両前足が凍り付く。

「イーブイ！」

フロンが悪戯そうな笑みを見せ、往復ビンタを繰り出した。往復ビンタを受けるイーブイにフルーラは狼狽え、弱気な表情を見せる。

「ど、どうしよう…」

「フルーラ！自分に自信を持つんだ！」

ケンジが彼女を呼び掛け、フルーラはケンジを後目に見る。

「イーブイを信じて！イーブイが君を信じる様に、君もイーブイを信じるんだ！」

思わぬアドバイスに聞き耳を立て、彼女は笑みを見せる。

「解ってる…私はトレーナー、ポケモンを…自分の仲間を信じないでどうするのよ！行くわよイーブイ、足下にシャドーボール！」

イーブイはシャドーボールで氷を破碎し、フロンに向けて特攻する。フロンは歯を噛み締め、冷凍ビームで攻撃。しかしその身体は急に消える。

「フロ！？」

「それは影分身！本物は上よ！」

慌てて上を見ると、イーブイが此方に向けて体当たりを仕掛けてきた。咄嗟の判断でフロンはその場を離れ、体当たりは不発。だがそれはフェイクだった。

「イーブイ、メロメロ！」

イーブイはメロメロを放ち、フロンの目がハートになった。

「メロメロ状態になった！」

「と言う事はあのイーブイは♂だね」

アイリスとデントは納得し、フルーラは指示を下した。

「これで決まりよ！イーブイ、シャドーボール！」

「ブイイイッ！」

特大のシャドーボールが決まり、フロンは気を失った。

「行くのよ、モンスターボール！」

投げられたモンスターボールがフロンを吸い込む、2〜3回程往復して微動し、キャプチャーマーカーが赤から白に変わった。

「やったわ！フロンをGETしたわ！」

フルーラはモンスターボールを取って喜び、足下でイーブイは嬉しいのか走り回る。

「凄いわフルーラさん！」

「嗚呼、それにイーブイも良く頑張ったよ」

石段を登って大円となり、会話を繰り返す。石段を最後まで登ると花畑が広がっており、その中心に七色に煌めく果実があった。

「あったわ！」

「あれが…虹色の木の実」

ブチッと優しく抜き、タケシはその果実を見る。

「こんなに珍しい色の木の実は初めてだ……！」

味見しようと一口薄くタケシはかじろうとした、だがガチッと音が響き、それは叶わなかった。

「あがつ…！た、食べられないぞ？」

「そ、そんな！？」

タケシからそれを奪い取り、パジエラはじつくりとそれを睨んで見つめる。

「これ…木の実じゃねえぞ？ペンキで塗られた…石だぜ？」

「え」

への字を口で作り、フルーラは白くなって呆然と立ち尽くした。

「つまり唯の作り話で」

「虹の木の実是最初から実在しないと言う事か」

最後にゲンタがめて、虹の木の実騒動はこれで丸く収まった。

空は茜色に染まり、分かれ道でサトシ達とフルーラは向かい合った。

「フルーラ、お前はこれからどうするんだ？」

「まだ旅を続けるわ。虹の木の実は嘘だったけど、可愛い子が仲間になった。久し振りにサトシ君達の顔を見て安心した」

フルーラはカスミに近付き、彼女の耳元でこう囁いた。

————サトシ君と末永くお幸せに。

「んな!？」

「それじゃあさよなら」

駆け足で歩き出し、次第に彼女の姿は見えなくなった。

「所でケンジ、伝えなくて良かったのか？」

「え？」

何を?と訪ねると。

「好きなんだろ?フルーラちゃんの事」

「……うん」

頬を赤く染めてタケシの言葉に頷くケンジであった。

「今は良いよ。気持ちに整理が付いたら伝えるよ」

旅に出たフルーラと再会し、彼女と別れたサトシ達。小さな珍騒動を終え、クシャータウンに向けての彼等の旅はまだまだ続く。

T o b e c o n t i n u e d

#12 マホース、タツベイ…そしてリーブンGETだぜ！

此処はクシャータウン、リヴァタウンから来たトレーナーが最初に訪れる町。更に此処はポケモンコンテストの開催地。

そのクシャータウンの巨大デパートの屋上から、町中を歩く人々を見下ろす者がいた。

その人物は女で逆立った鶏冠の様な茶髪に白いメッシュがあり、白い制服を着て胸元には藍色のパッチを着けている。

「作戦の準備は整ったかい？」

ポケギアに耳を当て、女は不適な笑みを零す。

『まだ最終チェックが済んでおりません、後1時間必要です』

「そうかい、じゃあ短縮30分で済ませるんだよ」

『了解』

ポケギアを切り、空を仰いで女は表情を崩さず微笑み続けた。彼女
の言う準備とは…？

此処はクシャータウンから少し離れた野原、サトシ達はこの先にあ
るクシャータウンに近付きつつあった。

虹の木の实騒動も終え、彼等は真っ直ぐ野原を歩いている。

「この先の丘を抜ければ、クシャータウンが見えるよ」

「ねえデント：地図を見るのは良いんだけど、あの修羅場どうしよう？」

カスミが指した先には、サトシを挟んで口論するヒカリとアイリスの姿があった。

「だ・か・ら！先ずはお買物が先よ、私はサトシと一緒にショッピングを楽しみたいのよ！」

「あーら？それは無理よ、だってサトシは私と町の観光をするもの！」

「どっちも約束してねえんだが」

ぼそつと怪訝な顔をして呟くサトシだが彼女達には聞こえず、ピカチュウはやれやれと言った感じで両手を上げて呆れた。

「うう：羨ましい、何でサトシばかり：何故サトシだけモテるんだあ！」

「オメエうつせえから黙ってろよ」

男泣きするタケシを白い目で見つめ、パジエラがツツコミを入れた。

「甘いなあ、サトシにはもうカスミがいんのに」

「青春と言う奴か」

ミヤギがニヤニヤと笑って二人を見、呆れた様にゲンタが呟きを漏らす。

「良いのカスミ、彼氏が悲惨な目に遭ってるけど」

「其処、変な事を言わない！まあどうとも思わないわ、一緒に旅が出来るだけで幸せなもの」

はいはいと呆れ、惚気るカスミから恋する少女二人に視線を移すハルカ。その二人はまだ口論を行っていた。

「ねえ、二人共」

『何よ（さ）！？』

怒気を含んだ二人の声色に少し引くも、ハルカは一つ提案を出した。

「そんなにサトシの心^{ハート}をGETしたいのなら、この辺りのポケモンをGETしたらどうかしら？」

『え？』

首を傾げ、二人の頭上に？マークが沢山浮かんだ。

「勿論貴女達がGETしたいと思うポケモンなら良いかも。ヒカリはコンテストがあるし、サトシを困らせるのは良くないかも」

うっと凶星を突かれて言葉を詰まらせる2名、二人の頭には自分達

に愛想を尽かして去っていくサトシを想像した。

「おーい、勝手に話を進めるなよ」

置いてきぼり状態にされ、我等が主人公は土を弄っている。

「少し面白い事をしていますね」

ん？と全員が振り返る、声がした方には一人の青年がいた。青みが掛かった黒髪に白いTシャツの上に黒いパーカーを羽織り、下は水色の長ズボンを履いている。

「何だお前は？」

いきなり現れた青年に警戒を持ち、ミヤギが訪ねた。

「僕の名前はソラ、グレータシティから旅をしているトレーナーです」

年は17歳です、と丁寧口調で答えるソラと言う青年。

「その競争、僕も加わります。貴方もどうですか？」

そう言ってニヤリと笑い、サトシを指名するソラ。サトシは指名されるを考え込み、不適に笑う。

「解った。ソラ、その挑戦受けて立つぜ！」

「此方こそ、受けて下さりありがとうございます」

紳士の様な口調で頭を下げるソラ、手にモンスターボールを出し、

「奮えよ、ロップル」

投げられたモンスターボールが開かれ、帽子を被った女の子の様なポケモンが現れた。

「キヤー！可愛い！！」

ヒカリが笑いながらロップルに近付き、じつくりと見つめる。

《ロップル・日陰ポケモン、頭に被っている帽子は取り外す事が出来、盾の様に使う事が出来る》

ポケモン図鑑を仕舞い、サトシもじっとロップルを見る。

「随分可愛い奴だな。ピカチュウ、行くぞ！」

「えっ！？サトシ！」

「待ってよー！」

走り出すサトシの後を追いつ、ヒカリ、アイリス、ソラとポケモン達が走り出す。

「どうしようか？」

「追跡以外選択技があると思うか？」

ゲンタに指摘され、タケシは苦笑いしつつ先頭に立ち他の仲間と共に

に走り出した。

ヒカリとアイリスは草をかき分け、道を進んでいる。

「もう、サトシとはぐれちゃったじゃない」

頬を膨らませ、ジト目でヒカリは愚痴る。

「私の所為じゃないわよ、あの二人が速すぎるだけよ」

同じ様にアイリスも頬を膨らませる、ポツチャマとキバゴは同じ男を愛する主人に溜め息を吐いた。

「ヒヒーン」

紫色の鬘を持つ馬型のポケモンが草むらから飛び出した、ヒカリはポケモン図鑑を出す。

《マホース・神秘馬ポケモン。歩いた後に花を咲かせると言われているポケモン、それを見ると縁起が良いらしい》

次に現れたのは、タツベイ。タツベイはチラチラとアイリスを見る。

「きゃー！タツベイ、本物を見るの初めてだわ！」

「そ…そうなんだ」

苦笑いしつつアイリスの迫力に驚くヒカリ、タツベイのデータを調べ、図鑑を仕舞った。

「決めた：キバゴ、あのタツベイを仲間にするわよ！」

「キバツ！」

キバゴは地面に降り立ち、タツベイと向き合う。

「私もアイリスに負けられないわ：ポツチャマ、マホースをGET
しましょう！」

ポチャ！とヒカリの肩から降り、ポツチャマとマホースは戦闘態勢に入る。

『行くわよ！』

その頃、サトシとソラはロップルを先頭にして森の中を歩いていた。

「ロップルの帽子は盾にもなれる。攻撃になった時、少しは戦況が
有利となれるのです」

ソラがロップルを見下ろし、延々と語る。サトシも両腕を組んで黙
って聞く。

「この森には暴れん坊と謳われるポケモンがいますと聞きました、僕
は其奴をGETします」

不適にソラが笑っていると、草むらが動き何かが飛び出した。

『！！』

「リィィプッ！」

現れた“それ”は無数の葉っぱを飛ばした、ロップルは帽子を外し、葉っぱカッターをガードした。

「ロップル、シグナルビームです！」

ソラの指示にロップルはシグナルビームを放つ、だがその物体はシグナルビームを躲し、尻尾を紫色に変色させた。

「リイプッ！」

尻尾を振ると紫色の葉っぱを放ち、ロップルに直撃した。ロップルはそのまま倒れ、急所に当たったのか気を失った。

「クッ：戻って下さい、ロップル」

労いながらロップルをボールに戻したソラ、サトシはそのポケモン——リイプンにポケモン図鑑を向ける。

《リイプン・発芽ポケモン。お腹が空いた時、自分の葉っぱを食べる。研究者の調査に寄ると、あまり美味しくは無いらしい》

「リイプンか…」

先に旅立った青藤色の少女を思い出し、サトシは不適に笑った。

「リイプッ」

リイプンはニヤリと笑い、一指し指で自分を指している。まるでかかって来い、と言っている様に聞こえる。

「よし、その挑戦受けて立つ」

行くぞピカチュウ！と呼ぶと黄色い相棒はピカ！と鳴き、リープンと向き合う。

「あのリープンは僕がGETするんです。奮えよ、アクタシ」

ソラが投げたモンスターボールから液体ポケモン、アクタシが姿を見せる。

《アクタシ・液体ポケモン。身体が液体で出来ており、日照りが続くと危険。何時も水の傍にいる》

「アクタシ、凍える風です」

「アクッシ！」

アクタシは凍える風を放つが、リープンはそれを躲した。

「ピカチュウ、アイアンテール！」

ピカチュウもそれに続き尾に銀色の光を帯び、アイアンテールを繰り出す。リープンはジャンプして躲す。

「邪魔をするのですか？あのリープンは僕のターゲットです」

「まあ確かにお前からしたらそうだな、だが俺も自分の強さを確かめる為に彼奴をGETするだけだ！」

「…?」

そんなサトシに疑問を抱きながら、ソラは指示を出す。

「次は悪の波導です!」

アクタシの出す悪の波導に命中し、リープンは空を舞う。リープンは目をカッと開いて体勢を立て直し、葉っぱカッターをアクタシに放つ。

そんな2匹の間に、ピカチュウが割って入った。

「は!?!」

「リップ!?!」

「カウンターシールド!」

「ピイカアアアチュウウウウッ!」

ピカチュウは回転しながら10万ボルトを放ち、葉っぱカッターを撃ち落とした。

「ッ! 邪魔をするなと忠告した筈です!」

声を荒ませ、ソラがサトシに詰め寄るが…。

「人やポケモンを助けるのに理由はいらねえだろ?」

「え…」

一つ年上の青年の言葉にソラは一瞬心が揺らぐ、サトシはソラから離れてピカチュウに電光石火を命じた。

「ピカア！」

電光石火でリープンを吹き飛ばし、エレキボールで追い打ちを掛ける。起き上がったリープンは悔しがり、風起こしでピカチュウを吹き飛ばす。

「ボルテッカー！」

風を利用し、電撃を纏うピカチュウは空を翔る。リープンの真上に回り、そのままリープンに当たり、リープンは倒れ込む。

「行け、モンスターボール！」

モンスターボールがリープンを吸い込み、カタカタと微動する。サトシとピカチュウ、ソラとアクタシはそれを黙って見つめる。

モンスターボールのキャプチャーマーカ―が赤から白に変わり、サトシは黙ってボールを取り、天に翳した。

「リープン、GETだぜ！」

「ピッピカチュウ！」

一人と一匹はお決まりの台詞を言い、ソラは啞然としたが我に返り、アクタシをモンスターボールを戻した。

「ふふっ…貴方みたいなトレーナー、初めて見ましたよ。自分よりも生命を優先し、太陽の様に温かい心の持ち主の青年……」

「サトシ…マサラタウンのサトシだ」

「またお会いしましょう、最強のポケモントレーナー」

背を向け、そのまま去っていくソラ。サトシはその姿が見えなくなるまで見つめた。

一方、ヒカリとアイリスの方は…。

「キバゴ、龍の怒り！」

「ポツチャマ、渦潮よ！」

龍の怒りがタツベイを吹っ飛ばし、渦潮がマホースを飲み込む。

「お願い、モンスターボール！」

「此方も頼むわよ、モンスターボール！」

二つのモンスターボールが2体のポケモンを吸い込み、微動していく。暫くすると揺れが収まり、キャプチャーマーカーが赤から白に変わる。

それぞれモンスターボールを取り、天に翳す。

「マホースGETで、だいじょーぶ！」

「ポチャポチャー！」

「タツベイGETでドドンガドン！」

「キバキバー！」

台詞を言った途端、二人は微妙な顔をして向かい合った。だが二人の顔から次第に笑みが零れ出した。

「アツハハハ！何だかさっきまで喧嘩してたのに、何だか莫迦らしくなってきたわ！」

「そうよね！そんな気が失せちゃった！」

肩を抱き合い、二人の少女は仲良く…。

「だからサトシは私とデートするの！」

「いいえ、ショッピングよショッピング！」

…する訳無く、また口論が始まったのであった。

ソラと言う新たなライバルが出来たサトシ。リープン、タツベイ、マホースと言う仲間が出来、ポケモンコンテストがあるクシャータウンはもうすぐだ。

此処はカオス・パレス。ジャッジメントの居城、その中のモニタールームで水色の髪の青年はピザを口に入れ、茶髪の女性と回線を開いていた。

「へえ、じゃあクシャータウンにあるんだ♪」

『そうだよ、隕石の反応がこの町に二つもある。作戦を企てたのはあんただ、実行するのは何時にするんだい』

ピザが付いた口をティッシュで拭い、サングラスを掛ける青年。

「そんじゃあ、ポケモンコンテストの次の日の正午、頼んだよ♪」

『了解だよ、アスラウド』

モニターの電源が消え、水色の髪 of 青年————アスラウドは椅子から立ち、モニタールームから出て行った。

T o b e c o n t i n u e d

#12 マホース、タツベイ…そしてリープンGETだぜ！（後書き）

オマケ

「所でハルカ、あの条件は本当だったの？」

「え？嘘だけど、これ位はしないと二人はずっと喧嘩しちゃうじゃない」

「あー、確かにな」

遠い目をするミヤギの前には、此方に向かって戻ってくるサトシ達3人の姿が見えた。

おしまい♪

#13 ポケモンコンテスト・クシャー大会!! (前書き)

今回、AGからあのノスタスな準レギュラーが一人出て来ます。

#13 ポケモンコンテスト・クシャー大会!!

此処はクシャータウン、ポケモンコンテストの開催地。青い空に虹が掛かり、風車のプロペラが回転する。

ヒカリを先頭にし、リープン、マホース、タツベイをGETしたサトシ達は町中を歩いていた。

「うわあ……此処がクシャータウンかあ」

ヒカリは周囲の風景を見渡し、喜びの声を上げた。

「コンテスト会場はこの先にある。そしてこの先のクストの洞窟を抜けた先に、サトシが挑戦するストーンジムがあるストーンシティだぞ」
タケシの説明を受け、二人は微笑んだ。その瞳には熱い物を彼等は感じた。

「俺にはどんな苦難があらうと、それを乗り越えるだけだ」

「私も同じよ、サトシ」

二人はパン！とハイタッチする、其処にノクタスを連れた紫苑色の長髪の男が歩いてきた。

「あーら？何処かで見た事ある顔と思ったら、ハルカとそのオマケじゃない？」

『げっ』

サトシ、タケシ、ハルカはその人物を見て嫌そうな顔をした。

「貴方はもしかして、ハーリーさんですよね!？」

「そう。その通り、そう言うあんたはシンオウの“妖精” ヒカリちゃんよね？」

その人物——ハーリーは不適な笑みを見せ、ヒカリと目を合わせる。

「えーと、確かハルカが苦手としている人よね？」

「あア!？ 誰が誰を苦手になっているって!？」

小声で言ったつもりだがしっかり聞こえた為、ハーリーはアイリスを睨んだ。

『す、すいませ〜ん』

「地獄耳だな、このオカマ」

デントとアイリスが乾いた笑いで謝罪し、ゲンタはハッキリと答えた。聞こえてるわよ!！とハーリーからの指摘が入ったが彼は受け流す。

「ハーリーさん、此処のポケモンコンテストに出場するの？」

「当たり前よ!そしてハルカ、あんたにリベンジする為にね!」

そうハルカを指名したハーリー、だが全員がハーリーを白い目で凝視していた。

「あのーハルカは…」

「引退したんすよ、コーディネーターを」

「は…はアー!!?」

ハーリーは驚いて後退り、ハルカを睨み付けた。事情を知らぬ彼はライバルのコーディネーター引退を知らなかったのだ。

「な…何ですってエ!? どういう事よ一体!」

「色々と事情があって、伝えるのを忘れていました」

にこやかに答え、栗色の髪の女性は微笑んで答えた。

「ハルカ。笑って報告したつもりかも知れんが、何気に酷い事を言ってるぞ」

タケシのツツコミが入るが、皆無視した。

「そうだったのか?」

「聞いてねえぜ、そんな話」

「初耳だぞ」

元ダーク団3人組も多少吃驚し、二人のやり取りを見ている。

「それじゃあ解ったわ、ヒカリちゃん！今日から貴女は、私のライバルよ！」

ヒカリを指名し、ハーリーは宣言。宣言を聞いてヒカリは微笑んだ。

「勿論です！受けて立ちます！！」

フンツ！と鼻で笑ったハーリーは背を向け、ノクタスと共に歩き去った。

クシャータウンのコンテスト会場、更衣室でヒカリはコンテスト用の衣装に着替えた。

丸めた髪にリボンを付け、長めの純白のドレスを身に纏い、群青色のヒールを履いていた。

「これでバッチリ：！」

更衣室を出て、ヒカリは控え室に戻り、丁度モニターでは開会式のをやっていた。

『これよりポケモンコンテスト、クシャー大会を開催致します！優勝者の肩には、このクシャーリボンを献上されます』

司会者の女性がリボンを翳し、会場は盛り上がる。

『それでは第1審査、行ってみましょう！』

司会者の合図と共に幕が上がり、ハーリーが姿を現した。

「Come On! アリアドスちゃん!」

モンスターボールから装飾された紫色の花弁が舞い、

「糸を吐くから影分身!」

花弁が弾け、糸と共にイトマルの進化系・アリアドスが姿を見せる。アリアドスは4体の分身と動き回る。

「続いて恐い顔!」

本体を含んだアリアドス達は恐い顔を使用、会場の観客（サトシを除いて）は少し恐怖を覚えた。

「ヘドロ爆弾!」

5つのヘドロが空を舞うとアリアドスは影分身を解除、紫の両目が光を帯びる。ハリーは指をパチンと鳴らし、

「Finishよ! ソーラービーム!」

ソーラービームがヘドロをあつという間に消し去り、紫色の光がアリアドスの周囲を囲んだ。

「ハリーさんとアリアドスのコンビネーション、お見事でした」

「好きですねえ」

「とても綺麗でした」

コンテスト委員会会長のコンテスト、ポケモン大好きクラブ会長のスキゾー、そしてジョーイがそれぞれ感想を述べる。

「凄い！コンテストの事は前々から聞かされたけど…こんなに迫力があるなんて！」

「Unbelievable…！！とても美しいHarmonyが奏でているよ…」

コンテストを初めて見るアイリスとデントは直ぐに心に魅了され、感動を覚えた。

「そうでしょ？本当に美しいと言えるのは2次審査からかも」

ニッコリと笑い、バンダナの女性は会場を見つめる。

『最後のエントリーです、どうぞ！』

幕が開き、ヒカリが姿を見せる。

「行くのよマホース、Charm up！」

モンスターボールから装飾された炎が放出され、それと共にマホースが高く嘶いて姿を見せた。

炎は輪となり、マホースは走って潜った。4～5回潜り、ヒカリは次なる指示を出す。

「もう一度飛んで、神秘の守り！」

炎が消えると同時に、美しい煌めきがマホースを包み込む。それに観客達は魅了され、審査員達は感想を述べていった。

ヒカリの演技で1次審査は終了し、次は2次審査の組み合わせだ。

『ご来場の皆様、これより2次審査の組み合わせを発表します!』

メインディスプレイにトーナメントの組み合わせが発表される。

第1試合

ハーリーVS???

第2試合

?? VS ???

第3試合

?? VS ヒカリ

第4試合

?? VS ???

メインディスプレイを見通し、ハーリーは不適に微笑んだ。

「ヒカリちゃん、あんたを潰すのはもう少し先の様ね。もし恥ずか

しい真似を晒したら、許さないわよ!？」

緑色のオカマは彼女を指し、ヒカリも微笑んだ。

「ハーリーさんも負けないで下さいよ、私も負けませんから」

その言葉にキィィィィ!とハンカチを噛み、彼は控え室から出て行った。

ハーフタイムが終わり第1試合、ハーリーの試合が始まる。

「C a m e O n!ノクタスちゃん!」

「行け、ヨーテリー!」

ハーリーは相棒のノクタス、対戦相手の少年はヨーテリーを投入した。

エナジーボールからのミサイル針が美しく魅せ、結果ハーリーが2回戦へ進出した。

第3試合のヒカリの試合はミミロルがクロッチを下し、ヒカリが勝利。ミミロルは愛するピカチュウにアピールを終始送っていた。

二人は2回戦も突破し、決勝戦でぶつかる事になった。

『さあ、ポケモンコンテスト・クシャー大会決勝戦が始まります、この場で演じるのは：フタバタウンのヒカリさん、カイナシティのハーリーさん!』

二人は薄らと笑みを見せ、モンスターボールを取る。

『それでは、参ります!』

試合開始の合図が鳴り、決勝戦が始まった。

「ミミロル、Charm up!」

「Come On! ノクタスちゃん!」

ヒカリはミミロル、ハリーはノクタスを投入。先に仕掛けたのは、ノクタスだ。

「ノクタスちゃん、気合玉!」

ノクタスは気合玉を繰り出し、ミミロルはそれを華麗に躲す。

「ミミロル、跳び蹴り!」

ノクタスの頬にミミロルの蹴りが決まる、ノクタスは痛みを堪えてニードルアームでミミロルを吹っ飛ばす。

「負けないでノクタスちゃん、エナジーボールよ!」

追い打ちと言う形でエナジーボールが直撃、ミミロルは何とか着地する。

「次はミサイル針よ!」

「ミミロル、跳び跳ねるで躲して!」

ミミロルは大きく跳び、ミサイル針を避ける。そのまま蹴りを食らわせようとするも、ノクタスは華麗に躲した。

「ノクタス、ニードルアームで攻めなさい！」

「ミミロル、躲して！」

ニードルアームの嵐が迫るも、ミミロルは一生懸命に避けていく。右頬に掠めたがそれも気にせずミミロルは避け、ノクタスの頭上に飛び上がった。

「ノクタス、ニードルアーム！」

「躲すのよ！」

突き出された左手を躲し、ミミロルは華麗に着地する。

「行くわよミミロル、メロメロ！」

ミミロルがウインクするとノクタスの周囲にハートマークが飛び交い、ノクタスはそれに包まれてメロメロになった。

「な…何ですって!？」

ハーリーはそれに驚き、メロメロ状態のノクタスを見る。

「ヒカリのミミロル…メロメロを覚えたのか」

「ピカア」

サトシとピカチュウは一瞬呆気にとられ、直ぐに笑みを浮かべる。

「相手を欺く筈のハーリーさんを…ヒカリが欺いている」

強く成長したとハルカはヒカリを温かいで見つめ、ヒカリはミミロルに指示する。

「ミミロル、冷凍ビーム！」

凍り付けになったノクタスがキラキラと煌めき、ハーリーのポイントが削られる。

「う…嘘!？」

「止めの…跳び蹴り！」

「ミイミ…！」

結晶化したノクタスの身体が壁に激突、氷が砕け、ノクタスはうつ伏せに倒れ、戦闘不能になった。

『ノクタス、バトルオフ!よって、ポケモンコンテスト・クシャ―大会を制覇したのは…ヒカリさんです!』

メインディスプレイにWINNERの文字が表示され、歓声が響く。ヒカリとミミロルは抱き合い、クルクル回る。

「優勝おめでとう御座います、1個目ですね？」

「はい、ありがとうございます！御座います！」

コンテストリボンをコンテストから受け取り、ヒカりはリボンを天に翳す。

「クシャリーボンGETで、だいじょーぶ！」

「ミミィ！」

客席から拍手が送られ、ヒカりは微笑んだ。ハリーは清々しい笑みを浮かべ、その場を去っていった。

…クシャータウンのポケモンセンター。

『ヒカリ、見てたわよ？今日のコンテスト、とても良かったわ』

ヒカりはポケモンセンターのTV電話で母・アヤコと連絡を取る、ありがとうと言うと、アヤコは微笑む。

『そうだわ、せっかくだけど…ポケモンの卵育ててみない？』

今其方に送るわと言うと、転送システムから丸い物体が送られ、ヒカりはそれを手にする。

「確かに受け取ったわ、ママ。前々から卵を育ててみたかったの！」

『そうなの、卵と触れ合う事でポケモンの誕生を知る事になるわよ』

「うん！」

じゃあねと電話を切り、ヒカリは部屋へ戻った。部屋には寝間着姿のアイリスが座って待っていた。

「ママさん、元気だった？」

「ええ、後ポケモンの卵を受け取ったの」

「え！？見せて見せて！」

キヤツキヤツと騒ぐ声が隣から聞こえ、サトシとカスミはそれを黙って聞く。

「ポケモンの卵ねえ…色んな思い出があるよな」

ええ、と愛する彼の隣で呟く橙色の髪の彼女。

「ヒカリの次は俺だ。ギリアス地方のバッジ、必ずGETするぜ」

突き出した拳を天に翳し、ニヤリと笑うサトシ。この時、この町で混乱が起きようとは、彼も知らなかった。

7月26日 AM00…00

カチツと言う音が深夜のクシャータウンに響き、茶髪の女が持つポケギアには00…00と時間が表示されている。

『間もなく準備に取り掛かります』

通信機からの声に頷き、オニドリルの背中の上で女はニヤリと不気味に微笑んだ。

「見ていなよ、政府の人間達。私等の行いは、誰にも止められないのさ」

その呟きは闇に紛れて消えていき、満月は暗雲に包まれていった…。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

#14 クシャータウン襲撃！石を守れ！！

7月26日 AM10..12

ポケモンコンテストはヒカリの優勝で幕を閉じた。

後日母から届けられたポケモンの卵を手し、ヒカリはケースに入った卵を見つめていた。

「♪〜♪〜」

鼻歌を奏で、彼女はポケモンセンターのキッチン借りてポロック作りに専念している。卵はポッチャマ達に任せ、ポケモン達の為にポロックを作っている。

「あっヒカリ…って何してるの？」

アイリスがキッチンに顔を出し、彼女に何故ポロック作りしながら鼻歌を歌っているのかを訪ねた。

灼き上がったポフィンを人数分小皿に入れ、ヒカリはアイリスの方を振り向いた。

「あったり前じゃない！ポケモンの卵が手に入ったんだもの、卵をサトシと温めて…私とサトシの間に産まれたって事に」

「ストップ！話が飛びすぎ！！」

話を飛躍させているヒカリにツツコミを入れ、アイリスは顔を引き

釣らせた。

「全く子供ね！サトシと結婚もしてないのにどうしてそういう話になる訳！？それにサトシをGETするのは、この私よ！」

「はあ！？勝手に決めないでくれる！？」

陰悪ムードに入り火花をバチバチ散らす二人の少女、ポツチャマとミミロル、キバゴとマホースはそれに恐怖を覚えた。

因みに窓からタケシとハルカがそれを見ながら盗み聞きしていた、ハルカは喧嘩の内容に呆れ、タケシは滝の様な涙を流した。

「うう：何故サトシばかり：何故サトシだけがモテるんだあ：」

「やっぱり才能じゃない？」

苦笑いしてハルカが窓越しから恋する二人の少女を傍観する、その言葉が止めとなったのかタケシは更に落ち込んだ。

その頃、ポケモンセンターのバトルコートではサトシとデントが特訓を行っていた。サトシはピカチュウ、デントはヤナップで特訓している。そのベンチからカスミとゲンタ、網越しからパジエラとミヤギが傍観する形となっている。

「ヤナップ、タネマシンガン！」

「ピカチュウ、電光石火で躲せ！」

ピカチュウは電光石火でタネの嵐を躲し、アイアンテールをヤナップ

プにぶつける。ヤナップは転がりながら立ち、アクロバットを放つ。
ピカチュウは攻撃を受けつつ、10万ボルトでヤナップを攻撃して
エレキボールを撃つ。

「穴を掘る！」

ヤナップは穴を掘るで地面に潜っていき、エレキボールは後ろの地面にぶつかる。

「ピカチュウ、ジャンプして10万ボルト！」

「チュウウウウウウツ！」

10万ボルトが地面を引き裂き、その衝撃で出て来たヤナップが空を舞い、一回転して着地する。

「やるねサトシ！ 美しいFlavorが醸し出されているよ！」

「サンキュー、デントとヤナップも息が合っているぜ」

二人はフフツと笑顔を綻ばせる、デントはヤナップをモンスターボールに戻した。

「特訓に付き合ってくれてありがとうな」

ピカチュウを肩に乗せ、サトシは無邪気な笑みを見せる。ご指名ありがとう御座います、と胸に手を当てて一礼するデント。

「よし、次はリープンとクロッチだな」

「んじゃあ昼飯はどうする？」

悪戯っぽい笑みを浮かべ、サトシに向けてミヤギが聞いた。

「近くのレストランで予約を取つてくれ、俺は特訓がある程度付けたら行くよ」

「解ったわ。サトシ、無茶は止めなさいよ？」

おう！とガッツポーズを取り、サトシはモンスターボールからクロッチとリープンを出す。カスミ達をそれから背を向け、コートから去っていく。

「……フアア」

少々傷だらけの赤い物体が、それを見ているとも知らずに。

町の中央公園、ケンジはこの地で見られぬポケモンの生態系を知る為に野生のクロッチやフロンをスケッチしていた。

「あれ？ケンジさんですよね？」

デッサンしていると声を掛けられ、ケンジは振り向いた。其処にはリヴァタウンから旅立った少女がフロンを抱えて立っていた。

「リルちゃん…だっけ？久し振りだね！」

「はい！お久し振りです！」

リルと呼ばれた少女は笑顔を綻ばせ、フロンも笑顔を見せた。丁度良くタケシとハルカ、ヒカリとアイリスもやって来た。

「リルちゃんじゃないか！」

「うっわぁ！久し振りい！」

「皆さんも…ご無沙汰しております！」

リルは恩人達の再会に思わず声を上げ、一礼した。

「リープンの他にフロンもGETしたのか、リルちゃんに似合っているな」

「はい、別の町でコンテストに出場して、昨日リボン1個手に入れたんです！」

私もよ！と互いにリボンを見せ合うヒカリとリル。

「となると、ユウタ君はジム戦か」

「ファマーの他に何をGETしたのかしら？」

道中を歩き、近くのデパートに踏み入れようとした。

「ポケギアの時間は…もう正午だ、近くのコンビニで弁当を買って」
次の瞬間、8つのリングが飛んできて6人の身体を拘束した。ポツ
チャマとキバゴも同じだ。

「えっ!？」

「なっ何だこれは!？」

「何!？どうなってるの!？」

アイリスとタケシは驚き、リルは混乱していた。ハルカは周囲を見渡すとリングが町中に飛び交い、人々を拘束させている。

「私達だけじゃない:!!？」

「どういう事なんだ!？」

時間を少し遡り、此方はレストランに向かっているカスミ達。

レストラン“サザンドラ堂”に入り予約を取り、サトシ達を待とうと椅子に座ろうとした時だ。

「うわっ!」

「キャッ!」

店の従業員やお客の悲鳴が聞こえたと思うと、怪しげなリングが店内を飛び交い、従業員と客達を拘束していく。

リングが自分達に迫ろうとした時、ゲンタが掌から波導を放ち、リングを跡形もなく消し去った。

「ありがとう、ゲンタ!」

「…礼など要らん。それよりも」

「嗚呼、何かピンチな状況じゃね？」

ピンチに決まってるっつの、とパジエラが悪態を吐き、鞘に収めた刀を構える。

「ゲンタ、テメエは“雷帝”に、ソムリエ小僧は“妖精”共にこの事を報せろ！此処は俺らでやる…その間に消えろ！」

そう言って刀に触れてモンスターボールを出し、エアームドを出す。それに続いてカスミはギャラドス、ミヤギはオーダイルを出す。

その頃、サトシはまだ特訓を続けていた。クロッチとリープンは身体を左右に振り、サトシの下へ戻ってきた。

「うーん…まだまだ必要かあ、第一ジムリーダーもどのタイプのポケモンを出すのか解らねえしな」

と、其処に…。

「どうも もす です」

「うお!？」

突然の声に驚いて振り向くと、ニット帽を深く被った男が現れた。

「これはどうも失礼でした。この辺りにいるポケモンに気を付けましょう。どうも もす でした」

そう言って、男は去っていった。

「何だったんだ一体……つか、何かポケモンがいるのか？」

「フアア……」

声に反応し後ろを見ると、傷だらけのポケモンが宙を舞っていた。

「あれは……フアマー！？」

現れたポケモン——フアマーに驚き、サトシはポケモン図鑑を開いた。

《フアマー・火薬ポケモン。何時も自分の体温を温めているポケモン、寝ている時は冷たくなってしまいうらしい》

ポケモン図鑑を仕舞い、サトシは痛々しい姿のフアマーを見つめる。

「お前、トレーナーに捨てられたのか？」

怯えながらも小さく頷くフアマー、サトシは無言でフアマーに近付き、フアマーは身体を竦ませる。

「怖がらなくて良い、俺はお前に危害を加えない。捨てたりもしない、俺の炎ポケモンもお前みたいな体験をしているから」

儚く微笑んで小さな赤い身体を抱き締めるサトシ、この青年の温もりに触れ、フアマーは静かに涙を流した。

「ご苦労様だったね、“雷の雷帝”」

白い制服を纏う女が姿を現し、サトシを蹴り飛ばした。フアマーを庇った為、サトシは転がって倒れ込んだ。

「クッ…！」

「チッ…浅かったかい」

表情を歪ませ、女はフアマーを抱き込むサトシを睨み付けた。

「誰だか知らねえが…今の蹴り、人間とは思えねえ威力だったぜ」

サトシも眉を鋭く顰め、女を見る。

「当たり前だよ、アタシの名は“怪鳥”ルベルヴ。ジャツジメント鳥人部隊の隊長で、ポケヒューマンさ」

女——ルベルヴがそう名乗った瞬間、リングがサトシに迫る。

「邪魔だ」

右足で一瞬にしてリングを破碎し、欠片は粉々になって足下に落ちていく。ルベルヴはそれに目を見開き、汗を誑しながら笑みを見せる。

「ジャツジメントがこの町に何の用だ？用が無いのなら、其処を退いてくれ」

要望の内容に笑みを綻び、ルベルヴはキャハハハ！と笑い声を上げる。

「用はあるよ？この町の何処かにある、ある物質を回収するのさ」

「…………メテオナイトか！？」

ハッとしてサトシはルベルヴを威嚇する、彼女はモンスターボールを出す。

「因みにモンスターボールを除く電子機器機能を遮断させて貰ったよ、これであんたは仲間に連絡する事は出来なくなった」

一方、ポケギアでサトシに掛けようとしたゲンタ。ザーツと言う音が響き、クソツと愚痴を零して電源を切った。

「ゲンタ、駄目だ！通信が遮断されている！」

「此方もだ、自力で探すしか方法は見つからん」

ゲンタの答えにデントは頷き、二人は町に駆けだした。

「そうは行くか！」

「メテオナイトをお前達悪の手には、渡さん！」

白服の隊員二人が行く手を阻み、ドガースとコロモリを繰り出した。

「ヤナップ、ドガースに乱れ引っ掻き！」

「クチート、コロモリに雷の牙」

ヤナツプはドガースに乱れ引つ掻き、クチートはコロモリに雷の牙をそれぞれ攻撃した。それでも相手の2体は倒れず、立ち上がる。

「アイアンヘッド」

しかしそれも束の間、アイアンヘッドで吹っ飛ばされたドガースはコロモリを巻き込み戦闘不能になった。

「うぎよっ！」

「がふっ！」

一人は左の鉄拳で、二人目は踵落として沈めたゲンタ。一人目の襟を掴み、彼は問いただした。

「何が目的でこの様な真似をしている？メテオナイトか？」

やはりと思考を巡らせ、デントは顎に手を当てて思索した。ヤナツプも黙っている主人の顔を見つめた。

「そ…そうだ…！場所…この町のセントラルエリア…お前達の仲間も其処にいる…！」

それだけを聞きゲンタは手刀で隊員を気絶させる、彼はデントの方へ向き直る。

「“緑のソムリエ”」

「ひょっとして…僕だけ其処に向かえって言うんじゃないのかな？」

そうだ、と答えるゲンタ。

「お前はこういう頭脳に詳しい、中央公園から奴等を遠ざける為に俺は囷となり、人質達を解放する」

「……It's Rescued time! 任せてくれ、気を付けて」

「貴様もな」

二人は走り出し、セントラルエリアに向かっていった。

一方、ポケモンセンターの入口前。サトシとルベルヴのバトル：否、死闘が始まろうとしていた。近くの木の陰から、先程のファマーが覗き込んでいた。

「行くよ最強の“雷の雷帝”！羽撃け、ガルラーダ！！」

モンスターボールからガルダの様なポケモンが現れ、サトシはポケモン図鑑を向ける。

《ガルラーダ・ガルダポケモン。身体から熱を発しており、常に体温が高い。背中の殻が弱点だ》

「クロッチ、君に決めた！」

サトシもクロッチを繰り出し、二人の死闘が幕を開けた。

To
be
c
o
n
t
i
n
u
e
d

#15 ファーマー! 怒りの火の粉炸裂!! (前書き)

クシャータウン編はこの話で終了です、最後の方で新キャラが出ます。

#15 ファーマー！怒りの火の粉炸裂！！

ジャッジメント幹部アスリウスの一人、“怪鳥”ルベルヴ率いる鳥人部隊によって占領されたクシャータウン。

ルベルヴのポケモン・ガルラーダを相手に、サトシはクロッチで挑む。

同じ頃、クシャータウンのセントラルエリアの中央公園。タケシ、ケンジ、ハルカ、ヒカリ、アイリス、リルの6人を含めて何100人の人々がリングで拘束されている。

「離せ！リングを外せ！」

「私達をどうするつもりなの！」

町の人々が叫ぶが、白服の人物達はそれに応じず公園を彷徨く。

「貴方達、この町に何の目的で来たんですか！？」

ジョーイが勇気を振り絞って叫ぶ、その勇気にタケシは目をハートマークにしていたが、今は無視しておこう。

「誰が貴様達に教えるものか！」

「お前達には解らんさ！我々の目的など！」

隊員達が険しい顔つきで叫び、見張りのヘルガーやルクシオ達も警戒する。

噴水の前で5人の隊員がコンピューターでエネルギーを観測しており、萌葱色の髪の男が指示を出している。

「全員、なるべく急げよ？隊長が時間稼ぎをしている間、俺達はメテオナイトの回収の役割を与えられてるんだ、解ったか！」

『了解、グザイ副隊長！』

グザイと呼ばれた男の指示に隊員一同は頷き、グザイは額に巻いた鉢巻をキツく締める。

「回収するまで捕らえた人間は一人たりとも逃がすな、絶対に連れ戻せ！」

『はっ！』

グザイの指示に見張りの隊員は一斉に敬礼、人々から非難の声が上がった。

「そんな！返してよ！」

「返してよお！」

「…要求に吞めぬのなら、正義の下に貴様達を断罪する！」

怒気を含んだ声と鋭い藍色の瞳が捉えられ、子供達は泣きじゃくる。

「此処には幼い子供達もいるんですよ！？そんな事、酷すぎるわ！」

チャキツとジョーイに銃を向けるグザイ、その銃口に怯えずジョーイは唇を噛み締める。

「我々は正義の為に、ポケモンを救う為に戦っているのだ。関係ねえ者が口を挟む権利は無い」

「!止めろ!!」

タケシが叫ぶもそれは届かず、グザイは引き金を引こうとする。

「嫌アアアアアッ!」

リルは目を瞑り、泣きながら両耳を塞いだ。その時警報の音が響き、グザイはジョーイから離れ、銃から弾かれて噴水の中に落ちる。

「ジャツジメント、貴方達を逮捕します!」

オートバイからジュンサーが降り立ち、その後何人もの警官が続く。

「警察か……」

グザイは唇を噛み締め、隊員達に指示を出した。

「お前達は作業を続けろ!此処は俺だけで十分だ」

はっ!という声が響き、グザイはモンスターボールを出す。

「交われ、オオペラー」

モンスターボールからペラップを彷彿させる巨大なポケモンが現れる、ジュンサーはウインディを投入した。

「ウインディ、火炎放射！」

ジュンサーのウインディが火炎放射を放つ、しかしオオペラーは軽々と躲してウインディに接近する。

「オオペラー、悪の波導！」

ドス黒い衝撃波がウインディを吹き荒れ飛ばし、そのまま地面に叩き付けられる。ウインディは立ち上がり、オオペラーに向けて駆け出した。

「ハリケーン！」

竜巻を凌駕する突風が吹き荒れ、それに飲まれたウインディは叩き付けられ今度こそ戦闘不能になる。

「ウイン…！」

ウインディに駆け寄ろうとしたジュンサーだったが、それはグザイの右手で首を掴まれて出来なかった。

「ジュンサーさん！」

タケシの悲鳴が虚しく響く、グザイの銃口は彼女の額に突きつけられる。

「クロッチ！」

ガルラーダの猛烈な攻撃にクロッチは地面に墜落し、戦闘不能に陥った。

「しょうがないね：ガルラーダのダイヤブラストを喰らって、立ち上がったポケモンなんていないからね」

サトシを嘲笑うかの様に見下し、彼を指すルベルヴ。それに応じてガルラーダも嘶く。

「リープン、君に決めた！」

悔やんだサトシはクロッチを戻し、草タイプのリープンを投入した。リープンの登場にはあ？と莫迦にした様な表情になるルベルヴ。

「あんた莫迦でしょ？飛行タイプ相手に草タイプを出すなんて、とんだ無鉄砲野郎だね：ポケモンマスターってのは」

燕返し！と指示するとガルラーダは燕返しを放つ。

「躲せ！」

リープンは素速く回転して躲し、燕返しを避ける。

「葉っぱカッター！」

放たれた葉っぱがカッターで空へ高く飛ばされた、サトシは容赦なく指示を出す。

「リープン、ポイズンリーフだ！」

紫の木の葉の嵐がガルラーダを直撃、受けたにも関わらずガルラーダは平然としていた。

「甘いねえ、ガルラーダはあんたのポケモン達と鍛え方が違うんだよ」

高らかに笑ってサトシを見下すルベルヴ、彼女はガルラーダに命令を出した。

「ガルラーダ、ダイヤモンドだよ！」

ガルラーダの口からダイヤモンドのような結晶が飛び出した、一つだったそれは複数に分かれてリープンを容赦なく攻撃した。

「リープン！」

リープンは攻撃を受けて戦闘不能になり、モンスターボールに戻された。サトシは唇を噛み締め、ピカチュウを見る。

「頼むぞピカチュウ、10万ボルト！」

「デユウウウウウッ！」

突然の10万ボルトはガルラーダを包み込む、飛行タイプであるガルラーダは当然の如く怒りを暴露し、ブレイブバードで特攻した。

「本当に懲りないガキだね！そんなに死に急ぎたいのなら、此処で死にな！」

歪んだ笑みを浮かべた女はガルラーダに燕返しを指示した、速すぎる攻撃にピカチュウはポケモンセンターの外壁にぶつかる。

「ピカチュウ！」

「もう一度だよ！燕返し！」

次の瞬間ガルラーダの身体が炎に包まれた、ガルラーダは頭が着いていけず悲鳴を上げて暴れている。

「なっ…ガルラーダ！？！」

「…お前、何で！？」

その発信源は傷だらけのファマー、ファマーは悲しそうな表情で火の粉を放った。

「ガルアアアアアッ！？」

ガルラーダは火傷を負いながらのたうち回る、火の粉と思えない威力の炎にサトシとピカチュウ、ルベルヴは呆気にとられた。

「何なんだいこれは！？」

ガルラーダを戻し、新たにムクホークを繰り出すルベルヴ。彼女はじっとファマーを見てその潜在能力に狼狽する。

「フアマー、ありがとうな…俺の為に怒ってくれているんだろう？」
コクリと頷くフアマー、そんな一人と一匹の間に絆が芽生えようとしていた。

「ポケモンマスター、あんただけはぶちのめす！ムクホーク、ブレ」
「もうその辺りにしましょう、隊長」

巨大な輸送ヘリが空を舞って現れ、ドアからグザイが梯子を下ろして姿を見せる。

「グザイ！メテオナイトの方は？」

「回収完了です」

腫れ上がった頬を触りつつ、グザイが呆れながら答える。

「……チッ！」

ムクホークを戻し、ルベルヴは梯子を伝って席に座り込んだ。ヘリはそのまま飛び去って行き、サトシはそれを苦笑いを浮かべつつ目で見送った。

夕方、クシャータウンのセントラルエリアでサトシ達はジュンサーから感謝状を送られた。

「主犯には逃げられましたけど、逮捕の協力に感謝致します！」

「どうも」

サトシは感謝状を受け取り、ジョーイや町の人々は拍手を送る。公園には縄で縛られたジャッジメントの隊員達が気絶している。

「まさかメテオナイトが公園の水の中にあっただとはな」

タケシが顎に手を当てて言う、パジェラも嗚呼と軽く頷く。

「誤算だった、あの副隊長を噴水に殴り落とした先にあるとは思わなんだ」

「もう過ぎた事を引きずるの止めてよ」

ヒカリが眉を顰めるゲンタを宥め、次第に皆から笑いがこみ上げてきた。

「サトシ、これで心置きなくストンシティに行けるわね」

「嗚呼、ストンジムの挑戦が待ち遠しいぜ」

拳を握り、空を仰ぐサトシ。

「ストンジムに挑戦するのね、ジムリーダーのハタナさんは岩タイプ専門のトレーナー、一筋縄では行かないわよ？」

「はい！」

クシャータウンの事件を解決し、ジャッジメントの鳥人部隊を撃退したサトシ達。さあ、次はサトシが挑戦するストンジムのあるスト

ンシテイ。

其処ではどんなバトルが、どんなジムリーダーが待つのか？

ジャッジメントの本拠地、カオス・パレス。

「これで残るは121個、か」

「はい」

ルベルヴは自分の上司、カラドを見つめる。カラドは顎に手を当て、考える様な顔をする。

「次なるメテオナイトの回収はどうするか…」

「それなら、僕達の部隊が行きましようか？」

ルベルヴの後ろからあどけなさが残る青年が現れる、青年の身長は180cm程で紫色の髪をしていた。

「シータ：超能力部隊の副隊長の君がかい？」

「ええ。我々は未だ現在隊長は長期不在ですが、それなりの成果は成し遂げるつもりです！」

土下座をしてカラドに悲願するシータと言う青年、カラドはその様子を見て小さく笑んだ。

「許可しよう、君の補佐にはグザイが付けておこう」

「はっ…！」

シータは一礼し、暗闇に身を潜めて行った。

「良いのですか？あのチャランポラン、クレイの部下に任せても」

「構わないさ」

ルベルヴは表情を歪め、そのまま去っていった。

T o b e c o n t i n u e d

#16 ファマー、GETだぜ！（前書き）

更新しました！今回はお馴染みのあの3人組が登場します。

#16 ファマー、GETだぜ！

澄ました青空の下、2日前クシャータウンを発った一行はストンジムがあるストンシティに目指して歩き続けていた。

デパートやコンビニ、飲食店で必要な物を買い込み、荒野に踏み入れた。

そんな彼等——サトシ一行のいる場所から後方10km先にこの地方で見慣れぬポケモン——ニヤースの顔を模した気球が飛行していた。

「ねえ：何時までこんな事しなきゃ行けねえんだ？」

「もう疲れたニヤ：」

気球から双眼鏡で言葉を話すニヤースと薄い青髪の男が地面を眺める。そんな一人と一匹の会話に、表情を顰める赤いポニーテールの女が一人。

「仕方ないでしょ！？ジャリボーイを追っかける為について行っただと思ったら、爆発で此処まで飛ばされたんでしょうが！」

赤いポニーテールの女が怒鳴り散らし、男とニヤースは余りの恐怖にヒィ！と小さく悲鳴を上げて抱き合った。

「正義の味方なんて言う奴等は悪党を皆殺しにしているし、私達は私達でジャリンコのピカチュウをGETするわよ！？」

『おう!』

と言って炎を大きくする、しかし同時に突風が発生して気球が回転する。

『ギョエエエエエエツ!!』

その前方20m先、一つのヘリが飛行している。後部座席には超能力部隊副隊長のシータ、鳥人部隊副隊長のグザイが定席している。

「:おい、何で俺がお前と一緒にいなきゃならん」

一層無愛想な顔で眉を顰め、グザイがシータに訪ねる。

「仕方ないだろ、お前に僕の補佐をしてくれと司令から下された事なんだ」

フンッ!と素っ気なくシータから視線を逸らすグザイ、その様子にシータは溜め息を吐く。

「間もなくポイントDJ7388地点です、お二方準備して下さい」

「解った」

「了解……ん?」

グザイはチラッと窓を見てみた、クリーム色の何かが視界に入りポッポかと思っただが違う。

それは段々ハッキリと解り、グザイは青ざめた顔になった。

「おい！スピードアップだ！何かが突っ込んでくる！」

「え？」

「何かって何……！？」

シートも窓を見ると顔色を変え、ニャース型の気球が此方に接近してくるのが見えた。

『退いて……！！』

気球がへりに被さって激突し、回転しながら地上に落下していった。

「シート副隊長！コ、コントロールが利きません！」

「何イイイイイッ！？」

一方、サトシ達はランチタイムを取っていた。タケシ特性のカレーライスを口に入れ、ピカチュウ達もポケモンフーズを味わって食っている。

「このカレーライス、美味しいな」

「うーん、この仄かなFlavorがまた良いねえ。後から来る熱気もInspiration！」

ケンジとデントは微笑んでカレーを味わい、サトシ達も当然ながら

味わっている。

ガサガサ…と物音が響き、全員が草むらに視線を注視する。音が大きくなっていき、“それ”は姿を現した。

「フアア！」

「お前…この間のフアマーか!？」

そのポケモン——フアマーの登場に驚く一同、サトシは目を輝かせてフアマーを抱き込む。

「この前? 嗚呼、あのトレーナーに捨てられたって言う?」

ミヤギの問いに、サトシはそうだと受け答える。

「ひょっとして、クシャータウンから私達の後を追いかけて来たの?」

ハルカがそう推測していると、彼女の問いに答える様にフアマーがフア!と頷いた。

「フアマー、俺達と一緒に旅をしたいのか?」

今度は無言で頷くフアマー、サトシは微笑んでモンスターボールを出す。

「良し! 俺達と旅をしようぜ、フアマー!」

綺麗なフォームでモンスターボールを投げるサトシ、フアマーは嬉

しそうにボールの中へ入っていき、モンスターボールは点滅する……それは赤から白に変わり、サトシはボールを取る。

「フアマー、GETだぜ！」

「ピッピカ」

チュウと言葉を続けようとしたピカチュウ、ふと空を仰ぐとクリム色に包まれた何かがヘリと共に真上を通り過ぎ、半径13～5m先に墜落して白煙が上がった。

サトシ達はそれに呆気を取られ、落ちてきた気球とヘリを見つめる。

「あーもー！何でこうなるのよ!？」

「今日の気象情報に時折突風の恐れがあるってTVでやってた気がするよ……」

「こ……怖かったニャア」

気球の下から赤髪の女と青髪の優男、そして喋るニャースが這い上がって来た。その3人組にあつと一行は声を出した。

「ロケット団!？」

「何でギリ阿斯地方に!？」

その言葉に3人は耳を傾け、すっと立ち上がった。

「何でと聞かれたら」

「答えて上げよう、明日の為」

「おい、此奴等何なんだア？」

「俺が知るかよ」

ヒソヒソと小声で話し合うパジエラとミヤギ、それを気にせず3人組を前口上を続ける。

「Future、白い未来は悪の色」

「Universe、黒い光は正義の鉄槌」

「我等この地にその名を記す」

「長い」

「まあまあ、黙って聞きましょう」

眉に皺を寄せるゲンタ、そんな彼をカスミが宥める。

「情熱の破壊者、ムサシ！」

「暗黒の純情、コジロウ！」

「無限の知性、ニヤース！」

『さあ集え！ロケット団の名の下に！』

そんな3人組——ムサシ、コジロウ、ニヤースの元ロケット団の3人の前口上にサトシ達は白い目で拍手を送った。

「ちょっとオ！？半年振りに顔を出したと思ったら何よ、その蔑んだ目は！？」

ムサシはサトシ達が居たたまれぬ目線を送っている事に突っ込み、最初に切り出したのはアイリスだ。

「否だって…ねえ？」

「そうよねえ」

褐色の少女に話題を振られ、ヒカリも乾いた笑いを浮かべている。

「同じ事を何回も聞かされるとちょっと…飽きてくる」

「と言うかレパートリーが無くて、全く時めいて来ないよ」

ガーン！！と言う音と共に彼等は石が落ちる様な衝撃が走った。

「そして台詞が長くて眠くなる」

『喧しい！！』

ゲンタの発言にロケット団は一斉に突っ込みを入れる、するとボロボロになって倒れたヘリからグザイやシータ達が顔を出した。

「クソッ…！貴様等か、俺達のヘリを落とした輩はア！」

グザイは低い美声でそう怒鳴り、サトシ達とロケット団を見る。

「あの人はクシャータウンの時の!？」

「そうだわ! 確か名前は…クサイ!」

ヒカリの発言にブツ!とゲンタとクサイ以外は吹き出し、笑いを堪える。ゲンタは何がなんなのか解らず首を傾げているが…。

「クサイじゃねエ! グザイだ!! 俺達はメテオナイトが此処にあると嗅ぎ付け、わざわざ来たんだよ!」

指を指すグザイ、鬼の形相の彼を見てニャースがピカチュウに抱きついた。

「アニャ〜〜! 怖いのにアア!!」

ニャースが喋ってるのを見てグザイとシータ、隊員達は目を丸くした。

『ニャースが喋った!？』

一斉に目の前の光景に驚き、思わず後退った。

「あニャ? ニャーはとっても万能なミラクルポケモンなのニャ〜」

頬を赤くして自分を指すニャース、サトシは自分で言うなよと心の中で突っ込んだ。

「メテオナイトの位置は……この先の草原、グザイ達は先に行け!

僕は足止めをする」

リーダーから視線をグザイ達に向け、シータは指示を下す。了解と頷き、グザイ達は走っていった。

「ってちよっと待ちなさい！ココロモリ、エアスラッシュ！」

「デスマス、シャドーボール！」

我に返ったムサシはココロモリ、コジロウはデスマスをそれぞれ繰り出し、攻撃を放った。

しかしシータはそれを見逃さなかった。

「打ち祓え、ゴチルゼル」

シータはモンスターボールを華麗なフォームで投げ、天体ポケモン・ゴチルゼルが姿を現す。

「ゴチルゼル、チャージビーム！」

撃ち出されたチャージビームは地面に落ちて爆発を引き起こす、その爆風でココロモリとデスマスはロケット団を巻き込んで吹き飛ばされた。

『早くもやな感じ……！』

ソーナンス！と言う声と共に、彼は星となった。

「あっと言う間の登場だったな」

「嗚呼」

ゲンタとパジエラは彼が消えた空を眺め、シータに視線を戻す。

「僕の名はシータ：超能力部隊副隊長、“心導”のシータだ！」

「飛行石持ってんのか？」

「そうそう、この服の下に飛行石を……って何やらせてんだアアアッ！！（怒）其方のシータじゃないし！」

某ジ○リ作品のヒロインと同じ名前を持つ彼はミヤギのボケに突っ込む、青年はゴチルゼルに指示を出した。

「ゴチルゼル、シャドーボール！」

ゴチルゼルはシャドーボールを放つ、皆はそれを躲し、サトシはモンスターボールを手を持った。

「フアマー、君に決めた！」

「鎮まれ、オーダイル！」

サトシに続いてミヤギも投げる、ボールからフアマーとオーダイルが姿を現した。

「カバーは任せな！」

「嗚呼……！」

互いに顔を見合わせて頷き合い、二人はシータを見る。

「ふんっ！進化もしておらんポケモンを出すとは……ポケモンマスターも落ちぶれた物だな！」

鼻で二人を嘲笑うシータに対し、ミヤギは反感する。

「バツキャロウ！進化しなくても、ポケモンは強いんだぜ？」

「そうそう」

うんうんと頷くサトシにシータは癪に触り、サイコキネシスを命じた。

ファマーの盾となってオーダイルが受け、ファマーは隙を突いてゴチルゼルの背後に回り込む。

「ファマー、火の粉だ！」

「ファー！」

火の粉が命中しゴチルゼルは振り向くが、ファマーは周囲を回転して火の粉を放ちつつゴチルゼルを翻弄している。

「遊びやがって……！ゴチルゼル、チャージビームで落とせ！」

ゴチルゼルのチャージビームが放たれようとするが、オーダイルがハイドロポンプで妨害する。

「“水魔”貴様ア！」

「隙だらけだぜ、ハイドロカノン！」

究極の技・ハイドロカノンが発射される、しかし急にゴチルゼルの姿が消えた。

「影分身!？」

ゴチルゼルはファマーの真後ろに現れ、チャージビームを放つ。攻撃を受けたファマーは墜落する。

「ファ…ファマー！」

「しまった!？」

二人は驚き、ゲンタ以外の他の仲間も悔やんだ表情を見せる。

「ふっ！これが我々とポケモンの力、好き勝手に扱う貴様達と一緒にするなよ！」

シータが豪語するとファマーは立ち上がる、そんな彼にサトシは櫓を飛ばす。

「頑張れファマー、俺達と一緒にバトルをして、勝って笑い合って、強くなるんだ！」

「……ファア！」

青年の言葉に心に炎が宿り、ファマーは強く鳴いた。

「諦めの悪い連中だ。だが、もう遅い」

すると空から輸送ヘリとオオペラーが現れ、オオペラーの背にはグザイが跨っている。

「ファマー、お前の力を見せてやれ！火の粉だ！」

ファー！と鳴き、火の粉を放ったファマー。その威力は火の粉の域を越え、火炎放射と同等の威力となった。

「何!？」

その火炎放射擬きはゴチルゼルを飲み込み、シータを巻き添えにして空を舞った。

「うお!？く、来るな！」

その炎をオオペラーはギリギリで躲し、炎は青年とゴチルゼルを巻き込んで消えていった。

「やるな…油断出来ぬ奴等よ。メテオナイトは回収し、目的も果たした。シータを護送して撤退する」

ヘリはそのまま飛び去っていく、サトシ達はそれを見送る。

「逃げられちゃったわよ!どうするのよ!？」

「否、取り敢えず敵は追い払ったし、良しとする」

慌てるアイリスをゲンタが諭す、サトシはファマーを抱き込む。

「ファマー、一緒に強くなろうな？」

「ファアー！」

新しい仲間・ファマーをGETし、超能力部隊のシートを撃退したサトシ。メテオナイトを奪われるも、彼等は良き経験を得た。

ストンシティを目指すサトシ達の旅は、まだまだ続く。

T o b e c o n t i n u e d

#16 ファマー、GETだぜ！（後書き）

次回、あの元気な新人トレーナーが再登場します！

#17 すっごく強いテディ登場！

何処までも続く森の中を、小熊の様な体格のポケモンを蔦を伝って森中を駆け回っていく。

一匹のポケモン——ニドラン♂がそれを必死で追い、毒針を放つも小熊は華麗に蔦を渡って躲す。

「頑張れニドラン、毒針だ！」

ニドラン♂のトレーナーである少年は指示を出し、ニドラン♂は攻撃するも小熊は直ぐに蔦を渡って躲し、ニドラン♂目掛けて勢い飛び降り…。

「ウガアッ！」

「ニドッ!？」

鋭いチョップを繰り出すも、ニドラン♂はそれを避けた。興奮めしたのか、小熊はジャンプして蔦を渡り森の奥へと消えた。

「ちつくしょう！また逃げられた…」

少年は地団駄を踏み、小熊が消えた先を見つめた。

副隊長“心導”のシータ率いる超能力部隊を撃退しファマーをGETしたサトシ達、彼等は昼ご飯を食べ終えて出発の準備をしていた。クストの洞窟は通るには丸二日は掛かると言われている洞窟、凶暴

な野生ポケモンが生息している恐れがある為、嚴重に警戒を怠っては行けない。

「よし、皆準備は良いか？」

『ええ 嗚呼』

タケシの号令に皆頷き、ゲンタが先頭を切って歩き出す。

「此処から洞窟はまでは5日間は掛かる、彼処は別名“囁きの洞窟”と呼ばれているらしい」

「囁き？」

アイリスが訪ねると、ゲンタは振り返る。

「そうだな…例えば、死者の雄叫び」

『ギャアアアアアッ！！！！』

それを聞いてカスミ、ケンジ、ヒカリ、デントが甲高い悲鳴を上げた。

カスミはサトシ、ヒカリはハルカ、デントはタケシに抱きつき、ケンジは尻餅を付いた。

「冗談だ、単なる例えだ」

『例えが怖すぎる（わ） よお！！』

悲鳴を上げた4人がゲンタに突っ込みを入れる、抱きつかれた3人は溜め息を吐いた。

「やっぱりゴーストポケモンじゃねえ？」

茶化す様に爽やかに笑うミヤギ、少々不安になりながらも11人の若者は森を進む。

オニスズメやエアームドが喧しく鳴き、その一方で一人の少年が静かな森を爆走している。

「あああああ〜！あのテディ、何処だあ！！」

喚きながら少年はオニスズメの群れに追われる、しかし彼は眼中に無く走り続ける。そんな彼の足下に、ニドラン♂が必死に着いていく。

「ん？」

ゲンタは歩くのを止めて目の前の道を見る、異様に見る彼に他の10人も覗き込む。

「どうした？」

「…人の気配だ」

モンスターボールからクチートを出すゲンタ、無言で目の前を見つめていると一人の少年が全速力で走ってくる。

その少年は藍色の髪で目に赤い瞳を宿し、黄緑色の半袖を着ていた。

「ねえ…あれって」

「うん、ユウタ君…よね？どうしてオニスズメ達に追われてるのかしら？」

意外にも早く再会した新人トレーナーの元氣少年の登場に目を丸くし、ユウタもサトシ達の存在に気付き、歡喜の声を上げた。

「ああ！サトシさん達、久しぶり…」

「莫迦！今此方に来るな！」

「ええ！？何でえ！？」

憧れの存在にいきなり否定されて涙目になるユウタ、状況を整理すると…。

「あのガキ、気付いてねエのか！？」

「…クチート、破壊光線」

大きな口が開かれ、其処から閃光が発された。

「うわあ！」

ユウタは即座に身を伏せ、代わりにオニスズメの群れは空の彼方へと消えた。

「な…何するんだよ！？」

立ち上がっていきなりゲンタに突っかかるユウタ、彼を宥めようとニドラン♂がズボンの裾を引っ張る。

「まあまあ、落ち着いて。本当に子供ね」

「何ィ!？」

棘のある台詞に反応してアイリスに振り返ったユウタ、サトシはそんな光景に懐かしく思い、ユウタの頭に手を置いた。

「一々突っかかるなよ、そんな調子だとポケモン達も心配するぞ?」

「あ…ごめんなさい」

ニドラン♂の顔を見て、深く頭を下げるユウタ。そしてケンジが話題を変える。

「所でどうしてこの森に?」

「この森には矢鱈と強いテディってポケモンが生息してるんだよ」

『テディ?』

「うん、ノーマル・格闘タイプのポケモンだよ。知らない?」

ユウタの言葉にサトシはポケモン図鑑を取り出し、十字キーを操作する。

《テディ・小熊ポケモン。縫いぐるみの様な姿をしているが、破れ

たり傷んだりしない。近くの木で傷ついた爪を磨く習性を持つ」

ポケモン図鑑に映ったのは、縫いぐるみの様な外見を持つ緑色の小熊みたいな姿をしたポケモンだ。

「可愛い、縫いぐるみみたいだわ！」

「アイリスもそう思う？私も！」

気が合う恋する乙女の二人は頬を赤く染め、キャツキャツと語り合っている。相当デディが気に入った様だ。

「そのデディは何処にいるか、解るか？」

「全然、噂を聞いて昨日から追いかけてるけど、中々捕まらないんだ」

頭を掻いて答えるユウタ、サトシはチラッとタケシを見て瞬きした。タケシも彼の意図が解ったのか嗚呼、と小さく返事した。

「皆、デディは恐らく爪を磨く為に此処に来ると思う、更に彼はお腹を空かしている」

うんと頷くサトシを除く一同、其処でとタケシは一つの袋を出した。

「ポケモンフーズとこのお菓子を使う！」

「へ？」

とユウタは傾げながらタケシを見つめ、少し疑心を抱いた。

その後、サトシ達十ユウタは茂みに身を隠して一本の木を見つめる。
木の下には赤い粉が掛かったポケモンフーズが置いてあり、一同はそれを見つめる。

「こんな安い罠に引っかかるのかな？」

「まあ今はテディが来る事を信じよう」

「でもなあ、俺は男らしく堂々と待つ方が」

「ユウタ、大人しく身を隠す事も大事だよ」

デントに諭されユウタは躊躇したが、彼等を信じて待つ事にした。

木の蔭を使い、テディはその姿を現した。テディは木の中心で爪を研ぎ、綺麗に磨いていく。それを済ませて立ち去ろうとした。

「ガウ？」

近くの木の下にポケモンフーズが置いてあり、首を傾げるテディ。
周囲を見渡すも気配を感じない事が解って木の下に行き、ポケモンフーズを一つ口に入れた。

「！！」

和やかな味わいを舌から感じたテディは、ポケモンフーズを次々と口に入れていく。茂みからユウタはそれに驚き、開いた口が塞がらなかった。

「え!?! な、何で美味しそうに食べてんの?」

「ポケモンフーズにミキサーで混ぜたマトマの実とチョコを振りかけたんだ、甘い味わいがたっぷり匂うだろ?」

さあ行つて来るんだと催促され、ユウタは勇気を振り絞つてテディの前に出た。

「テディ、今日こそお前をGETしてやる! ニドラン行くぞ!」

ニド! と強く返事をし、ニドラン♂は突くを繰り出す。テディは突くを躲し、ニドラン♂に向けて空手チョップを放つ。

「ニドラン躲せ!」

ニドラン♂はバックステップで空手チョップを回避、次に二度蹴りを繰り出してテディは倒れ込んだ。

「ギャウ!」

立ち上がったテディは右腕を突き出しメガトンパンチを放った、ニドラン♂はそれを躲して距離を取る。

「ニドラン、気合溜めだ!」

ニドラン♂はビシッと姿勢を正し、気合を入れていく。

「ギャウ!」

テディはメガトンパンチを繰り出し、その拳はニドラン♂に迫る。

「躲せエ！そして角で突く攻撃だ！！」

「ニドオ！」

鋭く尖った角はドスッ！と腹部に突き刺さり…。

「ガッ！？」

身体に毒が回り、急所に入ったのかテディは仰向けに倒れた。

「よし、モンスターボール行けエ！！」

モンスターボールはコツンとテディを吸い込んでいく、一定時間微動し、キャプチャーマークが赤から白に変わる。

「やったア！テディをGETしたぞ！」

先程まで空だったモンスターボールを取り、はしゃぎまくるユウタ。ニドラン♂も嬉しそうだ。

「やったな、ユウタ」

「はい！」

サトシにお辞儀するユウタ、彼はニドラン♂をボールに戻して走り出す。

「皆、今日は本当にありがとう！これからストーンジムに挑戦します

！サトシさん、何時かバトルお願いします！」

「嗚呼、待っているぜ」

再びお辞儀し、ユウタは森の奥へと消えた。

「さて、俺達も出発するか」

『嗚呼^{ええ}』

ユウタのテディGETを手伝い、再出発したサトシ達。ストンシテ
イを目指す彼等の旅は、まだまだ続く。

ジャッジメントの居城、カオス・パレスの一室。

「良くやったね、クストの洞窟にメテオナイトの反応があったなん
て」

リクはモニターを覗き込んで副隊長である女性、“美狐”のイータ
に話しかける。

「はい、私は坊ちゃまの味方ですから」

そう微笑んで答える黒いロングヘアの女性——イータ。する
と画面が切り替わり、司令官のカラドが映り出した。

《リク、メテオナイトの場所が解った様だね。》

「うん！僕、行って良いかな？メテオナイトがどんな物か見てみたい！」

目を輝かせ、カラドを急かすリク。子供ね、とイータは優しく微笑んだ。

《すまないが、この件はレイラ率いる雷神部隊が請け負う事になった。君達獣人部隊は…そうだな、リーズシティのメテオナイトの回収を行い給え》

「はい」

素直な最年少の少年は明るく返事する、カラドはリクとの通信を遮断し、別の画面を映す。其処に映ったのはマスクで口元を覆った、赤いロングヘアーを持つ褐色肌の人物だ。

「QF8714地点のグラハーズ卿の屋敷にメテオナイト、その場所へ移動してくれ」

《はっ》

それだけ言葉を発し、深く頷く赤い髪。

「元世界最悪の犯罪者、豪炎部隊隊長・“炎槍”ザンクス。君の働きを祈るよ」

《有り難きお言葉…》

その言葉と共に画面が消える、カラドは怪しく唇の端を釣り上げた。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

#18 カスミとカワラベ（前書き）

更新しました♪

#18 カスミとカワラベ

ユウタのテディGETをサポートし、ストンシティに繋がるクストの洞窟を目指すサトシ達。

今彼等は小さな町に訪れ、ポケモンセンターを探していた。デントは電子機器のタウンマップを使い、ポケモンセンターの場所を特定しようとする。

「ポケモンセンター、中々見つからないね？」

「聞かないでくれ……」

「否、誰もダイダイ島の事を言っただけだよ」

タケシのポケにサトシが突っ込む、アイリスとキバゴもアスレチックを上って街並みを見つめているが、ポケモンセンターらしき建物が見つからず。

「肉眼で捉えるしかあるまい、止まる事を継続すると周囲からの苦情が広がる」

ゲンタの呟きにそうよね……とカスミが愚痴りながらそう答える、一同が噴水の所を通ると退いて……！と言う叫び声が後方から聞こえた。

「……はア、またか」

そう言って左手の人指し指を突き出すサトシ、暫くすると黄緑色のベレー帽を被った金髪の少女が慌てて走ってきた。

トン、と言う音がして少女の額に指が当たり、走るスピードも迅速に相殺された。

「退いて退いて……あれ？ぶつかってない？」

「何やっているんだ？ベル」

自らの頭に手を置き、サトシは少女————ベルの奇行に溜め息を吐いた。

「サトシ君！無事だったのね！？」

ベルも彼との再会に目を丸くし、頬を赤く染めた。カノコタウンの実家のTVでニュースを見た時心が裂けそうだったが、彼の顔を見て一安心した。

「どうしてギリアス地方に？」

「腕が鈍らねエ様に、ジムとリーグを制覇する為だ。そう言うベルも同じだろ？」

「ええ、ストンシティのストンジムに挑む為に修業しているの！これからポケモンセンターへ行くの！」

「ポケモンセンターへ？丁度良かった、俺達もポケモンセンターに向かう途中だったんだ」

迷っていたがとサトシは苦笑いと言う、対してベルは彼方よと指して歩き出す。サトシ達はそんな彼女の後に着いていき、ポケモン

センターが見えてきた。

しかし…。

「…あるのかな？こんな民家のポケモンセンターって」

この町のポケモンセンターは何も変わらぬ一軒家だった、アイリスはそれに目を丸くした。そんな彼女にヒカリが促した。

「大丈夫大丈夫、私も古い感じのポケモンセンターに泊まった事があるから心配要らないわ」

不安なんですけど…と突っ込むが、自分の体験談を語るヒカリには馬の耳に念仏だった。引き釣った笑みを見せ、最後尾でアイリスも中に入っていく。

中はそのまま一旦普通であり、カウンターにはジョーイとタブンネもいる。サトシ達とベルはポケモン達とモンスターボールを預け、部屋の鍵を受け取ろうとしたが…。

「自分はポケモンドクターのタケシと申します、貴女の麗しい手で自分の心の鍵が解かれそうです」

「はい？」

意味不明な発言を取るタケシにジョーイは困惑する、呆れるカスミは彼の耳を思いつ切り引っ張り、

「はいはい、お仕事の邪魔しない様にねー」

「イデデェ！これも久し振りだけど痛いから止めてェ！」

タケシを引っ張るカスミを先頭に、一同は苦笑いしながらもそれぞれの個室へ向かった。

「カワー…」

小さな河童の様なポケモンが外の窓からそれを覗き込み、サトシ達を横目で見送った。

「今日は此处で宿泊しよう、明日の朝に発ち、クストの洞窟へ向かう」

「そうだな」

209号室のサトシ・カスミ・タケシ・ヒカリの部屋ではタケシが計画を立てており、210号室はデント・アイリス・ハルカ・ケンジ、208号室では元ダーク団3人組が使っている。

ベルは別の部屋にいる為、隣合わせにいない。

「今から楽しみだなクストの洞窟、どんなポケモンがいるだろうな？」

ピカピカ！と促され、ピカチュウは微笑んだ。その笑顔にカスミは苦笑いし、ヒカリは顔を赤くした。

サトシ達はポケモンが入ったモンスターボールを受け取り、部屋に戻ろうとした。

「…いい加減、出て来たらどうだ？」

「え？」

ゲンタの呟きに首を傾げるベル、先程の河童の様なポケモンが窓に張り付いていた。

「キャー！可愛い！！」

ベルはそれを見て顔を赤らめ、ポケモン図鑑を向けた。

《カワラベ・河童ポケモン。水辺に浮かぶ白い玉は彼の頭、プカプカと水に浮かんでいる》

「どうしてカワラベが…？」

ヒカリが首を傾げていると、カワラベが此方をキラキラと輝いた目で見ている。その視線の先には…。

「え？」

カスミがいた、カスミは目をハートマークにしてカワラベに顔を近づけた。

「も、もしかして私と一緒に旅をしたいの！？」

顔を赤くしてコクリと頷くカワラベ、欲望丸出しだぞとサトシが突っ込むが彼女には聞こえてなかった。一度外に出て、カスミはモンスターボールを出した。

優しくコツンとモンスターボールに当て、キャプチャーマークが赤から白に変わる。

「カワラベ、GETだぜ☆」

可愛くウインクするカスミ、タケシはサトシに耳打ちしていた。

「羨ましいぞサトシ、あんなに可愛い彼女を持ったお前が」

「まあそりゃあそうだが、別に構わねえよ」

男泣きするタケシに揺さぶられ、サトシは引き釣った笑みを浮かべる。そんなタケシに、カスミ以外の全員が冷ややかな目線を送ったのは別の話。

翌日、ベルはポケモンセンターに残って修業する事にし、彼女と別れてサトシとカワラベをGETしたカスミを含めた一行はポケモンセンターを発った。ストンシティを目指して…。

此処はクストの洞窟：別名“囁きの洞窟”。ストンシティとクシャータウンの境目に位置する洞窟、その奥でサイの様な外見の二本足で彷徨くポケモンが多数いる。

「…隊長、本当に隕石は此処（クストの洞窟）にあるのか？」

オールバックの金髪の男は、自分の上司——レイラに訪ねる。

「確証は無いが、センサーに表示されている」

「よりによってライノスの巣にあるとはねエ：」

そのポケモン——ライノスの群れが作った穴蔵に多数の石があり、レイラは悲しみに満ちた表情になる。

「各自、ライノス達を捕らえろ」

『はっ』

彼の部下達は敬礼し、その場を離れた。金髪の男も後に続こうとしたが待て、と声を掛けられ、立ち止まった。

「ガンマ、お前は例の連中と遊んでやれ」

「解ってるよ」

金髪——ガンマは悪戯めいた笑みを見せて、そのまま去っていった。

T o b e c o n t i n u e d

#19 虹色の洞窟

ストンシティを目指し、旅を続けるサトシ一行。彼等は小さな坂道を上っている。

「クストの洞窟はもうすぐ其処だ、楽しみだなピカチュウ」

ピカ！と元気良く返事を返す黄色い相棒、サトシは釣られて微笑む。

「そういえばストンシティと言ったら、世界で一番珍しいと言われる“虹色祭”が開かれるわよね？」

「うんうん、それ知ってる！雑誌で見た事あるわ！」

ヒカリとハルカがキャッキャッと話しているとパジエラが尋ねる。

「嗚呼、確か1年に一度だけ行われる町の宝“レインボーストーン虹色宝石”を崇める…あれだろ？」

「ええ、“レインボーストーン虹色の宝石”は全部で七つ。“レッドストーン赤の宝石”、“ブルーストーン青の宝石”、“グリーンストーン緑の宝石”」

「“イエローストーン黄の宝石”、“オレンジストーン橙の宝石”、“パープルストーン紫の宝石”、“インディゴストーン藍の宝石”、それぞれがギリアスの夜空を照らす光だって言われてるの」

ヒカリとアイリス、省かれたハルカは溜め息を吐き、ゲンタ以外の仲間はへえと納得する。

「因みに虹色祭は3日間は続く、貴様のジム戦は祭の後で良いので

は無いか」

「そうだな、なら祭の後にストーンジムに挑戦するぜ」

ピカチュウも納得した様子でピカ!と鳴く、そして岩で隔たれた巨大な洞穴を発見する。穴の中から発される異様な気配に、一同は唾を飲む。

「此処が…クストの洞窟か？」

「間違いないよ、此処で合っている」

電子マップでデントも洞穴と交互に確認する、彼の額から汗が流れている。

「さてと、見当違いな方向音痴を当てにせずゆっくり進もう」

「そうね、ってコラァ!!今あんた私の事方向音痴って言ったでしよ!?!」

「は? 誰もお前とは言ってねェだろ?」

そんなやり取りをしつつ、空洞に入っていく。そんな彼等をカメラを背負ったエモンガが監視していた事を知らずに…。

怪しい笑みを浮かべたエモンガは枝から飛び立ち、監視用カメラを通して隊員の一人の持つパソコンにサトシ達の画像が送られた。

「隊長! 例の連中、この洞窟に来ております」

「幸いにも奴等はこの事に気付いてません」

ライノス達を閉じこめた檻の周りを歩き回り、レイラは戻ってきたエモンガをモンスターボールに戻す。

「ガンマ副隊長にもこの事を知らせますか？」

「何言ってるんだお前等！副隊長はとくに気付いている筈だ！報告する必要は無い！」

「否、ガンマにも報せろ」

『え？』

上司の問いに声を揃える隊員一同、翡翠色の瞳には強い炎が宿っている様に隊員達には見えた。

「彼奴はビリヤードゲームを仕掛けるだろうな」

息を吐き、右手の骨を鳴らすレイラは静かにそう語る。

一方、サトシ達はゴルバットの群れと対峙していた。

「ピイイイカチュウウウウツ！」

ピカチュウの10万ボルトが決まり、ゴルバット達は退散していく。

「良し…もうゴルバットはいないな」

タケシは首を左右に振って周囲を確認し、デントを先頭に歩き出す。

「あーもう！何でこの洞窟はゴルバットばかりなの！？」

さつきより前に、ずっとゴルバットの奇襲に遭っている様だ。その繰り返しにヒカリは苛々している。

「否、その辺にはイシツブテとかダンゴロとかいるけど」

「岩タイプばかりじゃん！」

銀髪の男のかますボケに鋭くツッコんだヒカリ。

女って面倒臭エ…と心中でぼやくミヤギに黙っとけと突っ込むパジエラ、其処にサトシは助け舟を出す。

「なら岩・地面ポケモン達にこれが必要不可欠だな」

と言って、形の良い二つの石を拾うタケシ。それにサトシ達は首を傾げた。

「嗚呼、そうか。ピンプクの時みたいに」

納得した様に手を軽く叩き、ヒカリはハッとする。

「形の良い石までに削り、彼等に餌を与える」

リュックから取り出した鑪を使って石を削り、イシツブテ達を引き付けるタケシ。

石をポイッと投げ、野生の岩ポケモン達はそれを目指して群がり、

散開する。

岩ポケモン達の包囲網を潜り抜け、一行は真っ直ぐ暗闇の中を進む。
カン、と言う擬音が洞窟内に木霊し、一同は足を止めた。

「…人がいる？」

「感じるわ。この先に悪意を持つ者がいる」

アイリスの言葉を念に入れ、一同は静かに暗闇を進み、大きな空間に出た。端には湖が見え、ネオラントやママンボウが飛び交う姿が見られる。

「綺麗ねエ、水ポケモン達があんなにいっぱい…！」

「そうだな。にしても…あれは何だ？」

サトシが指した先にはビリヤードのボード盤、金髪のオールバックの青年はキューでボード盤の白のボールを突き、ボールを打つ。

赤、ピンク、水色、黄色のボールが入り、青年はニヤリと笑みを見せて白のボールを手にする。

「良く来たな、可哀想なエネコちゃん達」

漆黒の瞳をサトシ達一行に向け、微風で黒いパーカーが靡く。

「ひょっとして彼は…“電光”のガンマか？」

「ヘエ：あんたみたいな兄ちゃんが、俺の事を知ってたとはな。ちよっと驚いたぜ」

タオルでキューを拭う金髪の男――ガンマは不適に笑う。少し怪訝な顔をしてデントが彼を凝視する。

「知っているのか？」

「イッシュ地方では名の知れたプロトレナーだよ、ビリヤードの腕前は超一流で右に出る者はいないと言われてるんだ」

デントは解りやすく説明を施し、ガンマはフンツと鼻で笑う。

「悪いけど、俺はプロトレナーなんて大層な人間じゃない。今の俺は：ジャッジメント雷神部隊副隊長、“電光”のガンマさ」

「貴方もジャッジメントに：！」

アイリスも彼の事を名前だけ知っているので、内心複雑な気持ちになった。

「この先に俺の上司：つまり雷神部隊の隊長が部下を引き連れ、宝石を探している」

『宝石を！？』

何故と思索する一同、その中でゲンタは気付いた。

「そうか：！虹色の宝石には、メテオナイトが含むと言うのか！」

「ご名答。しかし詳しい所、俺も知らねエ。行きたけりゃあ行けば良い、但し」

俺を倒せたらな…と、雷を纏うモンスターボールが宙に浮き上がり、ガンマはキューを構える。

「ラクライ、Shining Shot！」

モンスターボールが打ち出され、地面を跳ねるとボールが開口する。中からラクライが姿を見せる。

「此処は僕に任せて。My Vintage ヤナップ！」

モンスターボールから相棒のヤナップを繰り出すデント、同時に…。

「It's tasting time！」

指をパチンと鳴らし、テイステイングタイムを始めた。そんな彼を憐れむ様な目でサトシ達は黙り込む。

「tasting time? 何じゃそりゃあ？」

「ま、まあ見てみれば解るよ」

眉間を顰めるパジエラをタケシが諭し、一同は黙ってそれを見る。

「貴方のラクライは毛の艶も良く、蛋白質と筋肉の発達も良いですねエ？」

ジト目でガンマのラクライを見つめるデント、フツ…とガンマは笑

いながらタオルでキューの汚れを取っていく。

「ですが、最後に勝つのは僕とヤナップです！」

「ヤナップ！」

華麗にポーズを決めるデントとヤナップ、デントはヤナップに指示を出した。

「ヤナップ、タネマシンガン！」

「ラクライ、放電！」

ラクライの放電がタネマシンガンを相殺、するとデントが叫んだ。

「今だっ！サトシ！！」

コクリと頷くと、サトシは鉄格子で塞がれた穴に向かって走り、跳んで右足で蹴った。

「！？」

鉄格子は意図も簡単に碎け散り、サトシはその先へ進んでいった。ゲンタや他の仲間達もデントとガンマを残し、サトシに続いて穴の中へ消えていった…。

「成程、石やポケモン達を守る為にあんたは囧になったって事か」
こりゃ一本取られたぜ、と言いつつガンマは不適に笑んだ。

「隊長にどやされる前にケリを着けねエとな。ラクライ、火炎放射
！」

「ヤナップ、地面にタネマシングンをPresent♪」

ヤナップはタネマシングンで空を舞って火炎放射を避ける、ラクライに向けて四方八方にタネマシングンを放ちラクライを翻弄する。

「やるねエ、でも俺も負ける訳にいかないんでね」

「ふっ…！それは僕も同じですよ、ガンマさん」

洞窟の最深部、レイラは5人の隊員を率いて通路を歩いていた。

「隊長、光が見えます」

道の先に輝きが見える、レイラ達6人は其処に向かうと…彼等は絶景を目にした。

「これは…！！」

その空間は七色に包まれていた、宇宙の様に星々が光っている様に思えた。レイラは不適に笑い、部下達に指示を下した。

「直ちに発掘作業に取り掛かれ、例の連中が来る前に手に入れるぞ。メテオナイトを！！」

To be continued

#20 その男、雷を呼ぶ

数時間前、此処はストンシティ。

クストの洞窟を抜けて50m先にある石の町、ポケモンスクールや噴水の公園、ポケモンジムも備わっている。

そしてこのストンジム、そのジムリーダー・ハタナはポケモンスクールの教諭も請け負っている。

枇杷色の髪にスーツを着た18歳程の女性、そんな彼女の右肩にダンゴ虫の様なポケモンが乗っていた。

「ダンゴロウ、今日も子供達に指導しようね」

ダンゴロウと呼ばれたポケモンはキュウと鳴く、ハタナはその仕草に優しく微笑んだ。

「…あら？」

彼女はスウ…と瞼を静かに閉じた、その方向はクストの洞窟を示していた。

洞窟から多数の赤い波導、11個の青い波導が確認された。それ等の波導の確認を終え、ハタナは焦りを覚えた。

「大変…！このままじゃ中にいる人達が危険だわ」

ハタナは汗を流し職務放棄は出来ず、洞窟にいる人々の無事を唯祈

るしか無かった。

クストの洞窟、デントから後を任されたサトシ達10人は走っていく。

「敵の反応が近い、ペースを崩すな！」

「言われなくともそのつもりよ！」

アイリスはそう言って走るスペースを上げ、先頭になって穴を抜ける。彼女が最初に辿り着き、目撃した物は…。

「これは…!？」

ライノス達が縛られている姿だった、ライノス達は悲痛な叫びを上げて縄を解こうとするも、簡単に解けない。

「酷い…!」

何人かが残酷な光景に口を抑える中、サトシはポケモン図鑑を開いた。

《ライノス・大角ポケモン。爪の部分は自在に回転が出来、穴を掘る時は便利である。》

「そんなライノス達が…どうしてこんな状況に？」

「恐らく奴等がメテオナイトを手に入れるのに邪魔だったんだろうな」

悔やんだ表情のタケシがケンジの疑問に答える。

「虹色の宝石」レインボーストーンはとても貴重な鉱石、メテオナイトをそれから取り除き、自分達の手中に納めるのかも知れない」

タケシがそう頭で整理する、するとアイリスが駈けだした。

「アイリス？」

「皆！縄を解くわよ、このままにしてたらライノスが可哀想よ！」

アイリスからの懇願に皆は頷き、サトシは叫んだ。

「良し、縄を解くぞ！ライノス達に傷を付けない様丁寧にだ！」

『おう！』

「……」

ゲンタだけは無言で頷いたが、一行はライノス達の解放に取り掛かった。

そんな彼等の背後に緑の髪の男がいるのを知らずに…。

一方、此方はデントVSガンマ。

「ヤナップ、噛みつく攻撃！」

「ラクライ、此方も噛みつく攻撃だ！」

ヤナップとラクライは互いに噛みつき合った、苦痛に堪えている2匹。ラクライの身体に電気が走る。

「放電！」

「ヤナップ！」

放電を浴びて煤だらけになるヤナップ、煤を払って彼はタネマシガンガンをラクライに撃ち込んでいく。

「ラク…ラ」

今のが急所に入ったのか、ラクライが倒れる。ガンマはラクライを戻し、次のモンスターボールをキューで打ち飛ばした。

「ルクシオ、Shining Shot！」

次に現れたのはコリンクの進化系・ルクシオ。デントもお疲れ様、とヤナップを労いながら戻し、新たなモンスターボールを取る。

「これが僕の新しいFull Courseですガンマさん！My Vintage ニョロボン！！」

デントが繰り出したのはニョロゾの進化系・ニョロボン。水タイプは電気タイプには効果抜群の筈だが…。

「何を考えてんだ？わざわざ水タイプを出すとは、自ら死に行く様なもんだぜ？」

笑みが消え、険しい表情で指摘するガンマ。それに対し、デントは笑みを零す。

「まだ僕は勝負を諦めてません、Sクラスソムリエに敗北はなアアアアい!!」

戦意高揚するかの様に高らかに叫ぶデント、呆氣に取られたガンマだがその様子に笑みを浮かべる。

「ニョロボン、心の目から芳醇な雨乞い」

頭上が雨雲に覆われ雨が降り出す。ルクシオはニヤリと笑い、電気を身体に流す。

「ルクシオ、10万ボルト!」

「ニョロボン、守る!」

10万ボルトを守るで防御し、水タイプの大技が下された。

「最高のFinishです!ハイドロポンプ!!」

水流がルクシオを飲み込み、岩壁に激突。雨乞いは水タイプの技の威力を上げる効果もある、それを見過ごしていたガンマは己の実力を過信し、頭に入れてなかった。

若きポケモンソムリエにそれを教えられ、ガンマはフツ…と笑う。

「あの、良かったら使ってください」

手渡されたのは傷薬、一瞬思考が止まったがガンマは再度目の前の青年を見た。

「良いのか？俺とあんたは敵同士だぜ？」

「確かにそうです、でも僕には貴方が他の人達のように：正義に縛られてるだけの人には見えません。貴方のその目はとても優しい Marriage に包まれています」

ありがととお礼を述べ、ガンマは気絶したルクシオを抱き上げる。

「これからお仲間の所に行くんだろ？」

「え：はい」

次の瞬間、デントは不吉な予感を覚える事になる。

「俺達の隊長——レイラに会ったら、逃げた方が良いぜ？」

その頃、ライノスの巣では：。

白目を向いたオーダーイルは呆気なく煤塗れとなり、大の字で倒れる。ミヤギはその光景に嘔然とし、視線の先には——三叉の槍を所持するレイラがいた。

「こんな程度か、元ダーク団幹部の力は」

呆れた様に息を吐くレイラ、サトシ達も生身でオーダイルをねじ伏せたレイラに驚いていた。

「オ…オーダイル！」

顔色を青くし、銀髪は傷ついたパートナーに駆け寄る。心臓の部分に手を触れると、心音がドクンドクンと彼の耳に伝わってくる。

「すまない…戻ってくれ」

盾代わりとなった相棒を謝罪しながら戻し、緑髪の青年を見る。

「あの人…一体何したの？」

ヒカリは目の前の青年に啞然とし、ケンジは唾を飲み込む。

「解らんのか。俺の雷轟槍が“水魔”を攻撃しようとした、しかし彼を庇ったオーダイルがそれを阻み、攻撃を受けた」

哀れにな、と付け足す緑の髪の青年。彼はモンスターボールを取る。

「雷鳴の如く駆けろ、ライチュウ」

現れたのはピカチュウの進化系・ライチュウ。突然の登場にピカチュウは歯を噛み締めた。

「ビガア…！」

「落ち着け、熱くなれば奴等の思うツボだ」

主に諭され、ピカチュウは息を吸って呼吸を整える。

「さて、自己紹介がまだだったか。俺の名はレイラ、

雷神部隊隊長・“雷鳴”のレイラだ」

黒い表情を隠さず、冷徹な眼差しで語った。

T o b e c o n t i n u e d

#21 雷を呼ぶ男

8月4日 AM 15:09

「“雷鳴”：貴様、此处で何をしていた？」

疑わしそうな目でゲンタが語り、几帳面な一面を持つレイラは顔を顰めた。

「…上から目線からの態度は其処までにして貰おう、“殺鬼”ゲンタ」

冷たい顔で槍をゲンタに向けるレイラ、彼の部下達はモンスターボールからポケモンを出し、サトシ達を包囲した。

「…逃がさないって事ね？」

「簡単に逃げられると思うな危険因子共、正義の名の下に我々は貴様等を裁く」

槍の先端をゲンタからサトシに矛先を変え、レイラは口々と語っていく。

「メテオナイトもこの洞窟に最早存在せぬ、頭脳戦は我等の勝ちだ」

右手を天に掲げ、

「やれ」

振り下ろすと同時に300の軍勢が襲いかかった。彼等を始末せんと、瞳に殺気を籠められている。

「―――黙れ」

その一言と、唯ならぬ威圧が洞窟を支配し、300の内100人が突然泡を吹いて卒倒した。

「久し振りに見たな。貴様の波導の威嚇」

ゲンタが平然と語り、視線を瞳孔を鋭くなったサトシを見る。

「本当、全く相変わらずだな」

「威嚇しただけでも凄いわよ、何人か泡を吹いてるし」

ハルカが気を失った隊員の一人を指で突いた、反応するかを確認している様だ。

「こ、此奴…今何を!？」

「何人かが気を失ったぞ!」

波導による威嚇で気絶した仲間を起こそうとする隊員達、レイラは轟雷槍を握る手に力を入れ、

「:100人は俺の指揮下に入れ、25人は倒れた者の介護、残る25人はストンシティ側の出入り口を封鎖しろ」

『はっ!』

残った150人の部下は敬礼しそれぞれの役割に入る、レイラはライチュウの隣に立ってモンスターボールを取る。

「雷鳴の如く駈ける、パチリック」

現れたのは、パチリスと少し似た様なポケモンだった。サトシはそのポケモンに凶鑑を向ける。

《パチリック・電気栗鼠ポケモン。パチリスの進化系、電気が無くなったパチリスの頬と自分の頬をくっつけて、電気を分け与える》

「パチリスの進化系！？か、可愛い！！！！」

ヒカリは目を輝かせてパチリックをじっと見つめる、パチリスを持っているからか興味を抱いたらしい。

「あの…ヒカリ？今はそんな状況じゃないからね？」

カスミに諭され、ヒカリはハッと気付いた。レイラはライチュウとパチリックに指示を出した。

「ライチュウは雷、パチリックはギガスパーク」

ライチュウとパチリックはサトシ達に向けて、それぞれの攻撃を放った、否、放とうとした。

「ピカチュウ、電光石火だ！」

サトシのピカチュウがそれを阻むかの様に接近し、2体を一蹴する。

それぞれ壁に激突してめり込むも其処から抜け出し、レイラはほう
…と呟きを口に漏らす。

「流石は最強のポケモントレーナー“戦の雷帝”。それは名ばかり
ではないと言う事か」

「それはどうも…リープン、お前も行ってくれ！」

モンスターボールからリープンを出し、リープンも戦闘態勢に入っ
ている。

それに続くかの様にカスミはカワラベ、ケンジはストライク、ヒカ
リはミニロルを繰り出した。

タケシ、ハルカ、アイリスはライノス達の縄を解こうとする。それ
を隊員達は許さなかった。

「奴等、ライノスを…そうはさせん！」

隊員達とポケモン達がそうはさせまいと、タケシ達に迫る。

「グレッグル、毒針！」

「バシャーモ、炎の渦！」

「キバゴ、逆鱗！」

3人のそれぞれのパートナーが迎撃に向かい、ポケモン達を薙ぎ払
っていく。

「こ、此奴等全員波導を纏ってやがる！」

「此方も波導を使ってるのに…どうしてこうも差がある！？」

「兎に角奴等を止めろオ！」

一方、カスミ達もレイラの部下達を迎撃している。カワラベの水鉄砲、ストライクの居合い切り、ミミロルの冷凍ビームを駆使して相手のポケモン達を撃退していった。

「ライチュウ、アイアンテール。パチリック、雷パンチ」

「ピカチュウはアイアンテール、リープンは躲して燕返し！」

ピカチュウとライチュウはアイアンテール同士で相殺し、雷パンチを避けてリープンは燕返しでパチリックを吹っ飛ばす。

「お前達は何故悪を憎むんだ！？関係の無い人間まで巻き込み、メテオナイトを手に入れて何を企てている！」

「ふん、野暮な質問だな。此処でお前達は我々の目的を知って一体何が出来るんだ？」

言い返せない、此処で丸め込まれれば相手の思うツボだ。サトシは拳を天へと突き出し、

「お前達を止める」

「ほざくな…無垢な青年」

「俺は本気だ。ピカチュウ、ライチュウにエレキボール！」

「チュピー！」

パチリックがライチュウの前に出て守るでエレキボールを防ぐ、円形状の防壁は意図も簡単に崩れ、パチリックは直撃を受けて気絶する。

「リープン、葉っぱカッター！」

飛び散る葉っぱカッターを受けつつ前に進むライチュウ、そして…。

「アイアンテール！」

鉄の尾の一撃が入り、派手に吹っ飛んだライチュウはパチリックの隣へと倒れ込み気を失った。

「クッ…！」

戦闘不能になった2体を収納し、憎悪を込めた眼差しを向けるレイラ。サトシも真っ直ぐな表情を見せ、彼に向けて拳を突き出した。

「ふふっ…！」

レイラは無様に倒された自分の部下達を見渡し、自身の持つ雷轟槍を地面に突き刺す。

「此処まで我等を追い詰めたのはお前達が初見っと言った所か、本当に癪に触る連中だな」

「……」

「ジャッジメントを舐めるなよ、我々各部隊の隊長はポケヒューマン、人間よりも優れた存在」

雷轟槍を引き抜き、不適な笑みを零すレイラ。槍の先端には、雷が少しずつ集まっていく。

「下等な凡人が、我々に勝てると思うてか？甘く見るな、力の違いを解らせて」

突然レイラの左腕が何者かに掴まれた。振り向くと厳つい顔を持つ、スキンヘッドの巨漢の男がレイラを見下ろしていた。

『！！』

「……何を行うつもりだ、レイラ」

「ラストチア…さん」

巨漢の男——ラストチアは無慈悲な眼差しでレイラを見下ろし、彼は口を開いていく。

「主等の目的は隕石の回収、まだ浅はかな小童の為に“あれ”を使うまでもない」

「…解りました」

大男に諭され、レイラは連絡用のポケギアを出す。

「各班に通達。この洞窟の目的は果たした、最早長居する必要は無

くなった。残っている者は負傷者の手当てを行い次第、撤退する」

その数分後、レイラ達雷神部隊とラストチアは護送ヘリで飛び立ち、サトシ達はそれを見送った。

「サトシ！」

「デント」

緑髪のソムリエが此方に来るのを確認し、サトシは笑顔を綻ばせた。

「彼等はどうなったんだい？」

「もう行ったぜ。例のガンマさんって人とのバトルは終わったみたいだな」

「嗚呼、見応えのあるInspirationだったよ」

「うん、意味がさっぱり解らない」

デントの解答にツツコミを入れつつ、ライノス達のロープを解いたサトシ達。ライノス達は歓喜の雄叫びを上げ、サトシ達に向けて頭を下げている。

「良かったなライノス、これからも平和に暮らせよ」

頷いたライノスの群れのリーダー、そのライノスはそれを聞くだけで十分と言わんばかりに何度も頷いた。

「ライ……！」

群れの中の一体がデントに近付き、一礼をする。もういいと言うかのようにリーダーが彼を諭すが…。

「もし良ければ、僕と来るかい？力強いtasteならば大歓迎さ」
ライ！と力強く頷くライノス、デントは小さく微笑んだ。

「それじゃあ、一緒に行こう！」

モンスターボールはライノスを吸い込んでいき、カタカタと微動する。キャプチャマーカ―が白に代わり、デントはボールを掴む。

「ライノスGETでGood Taste！」

便乗する様にライノス達は吼え、サトシ達は彼等に別れを告げて洞窟を抜けた。

「見えた…！」

丘の上からその下に町が見えた、タケシはそれを見て眩きを漏らした。

「あれが…ストンシティ…！此处にギリアス地方最初のジムがあるのか…！」

拳を握り締め、青年は胸の内にある興奮を抑えている。カスミは彼を横目で見つめ、小さく笑った。

「さあ、ポケモンセンターに行こう。出合いが俺達を待っている！」

『ええ嗚呼』

レイラ率いる雷神部隊を退け、ライノスをGETしたデントとサトシ達。さあ、ストンシティにどんな出会いが、ポケモンが待っているのか!?

此方はジャッジメントの居城、カオス・パレス。

「何だと!? ストンシティの干渉は認められない!?!」

レイラはルベルヴから聞いた内容に驚き、ルベルヴは二の腕を組んでいる。

「これはカラド司令からの指示だよ、聞けないって訳じゃ無いだろうね?」

「解った…! だが次の目的地である、シュラの森には誰が行くのだ?」

恐る恐る尋ねるレイラ。その質問にフツとルベルヴは笑った。

「其方はオメガの奴がラセツからの指示で動くらしいよ」

「オメガか…」

彼等はまだ知らない、この城に少しずつ強大な“闇”が訪れる事を

To be continued

#21 雷を呼ぶ男（後書き）

次回はあるポケモンの大騒動がメインです、この第2部にあのバイク乗りも出て来ます。

#22 ウソギーの真実(前書き)

更新しました！

#22 ウソギーの真実

ようこそ虹色祭へ！と黒い極太の文字が付けられた七色のサークルを潜り、人々は出店を回っている。

此処はストンシティ、今日から四日間行われる虹色祭の初日、先日訪れたサトシ達一行もポケモンセンターを出て出店を見回っている。

「うわあゝ綿飴やコイキング掬い、オクタン焼きもあるわ」

「他の地方から取り寄せた物があるんだな、観察のやりがいがあるぞ！」

ヒカリとケンジが目をキラキラと輝かせる、特にケンジはスケッチブックを持ってキョロキョロと辺りを見回している。

「祭の間はジムは休業、出店を回るしか無さそうだぞ？」

ニヤリとサトシに微笑むタケシ。嗚呼、と彼は返事を愛想良く返す。

「祭が終わるまではエンジョイしつつ特訓だな。ピカチュウ、出店に行こうか」

「ピカチュウ！」

黄色い相棒は可愛らしく返事を返し、青年と共に地を蹴って走る。彼の様子にアイリスは子供ねエと小馬鹿する様に溜め息を吐いた。

「―――退け退け退けエ！！！」

慌ただしい声が聞こえて一同が前方を見ると一台のバイクが車体を上向きに走り、凄いスピードで此方に向かって来ている。

祭の客は勿論、サトシ達もそれを避けてバイクはドガア!という音を立てて横向きに倒れ込む。

「ツ痛……!」

バイクを操縦していたライダーはヘルメットを外し、額を押さえる。バイクとそれを操るライダーは一気に客人達の注目の的になった。

「タツキ!？」

ライダーと言うのは、サトシの幼馴染の一人で活発な若人・タツキだった。あ?と不機嫌な表情のタツキは声に反応すると、振り向いた先にポケモンマスターを勝ち取った幼馴染の姿を確認した。

「ようサトシ! お久だな」

「嗚呼、お前も此方に来ていたのか? 元気だったか」

「おう! 元気…どころじゃねエよポケエ!!」

ツツコミと言わんばかりの蹴りが繰り出されるも、サトシは身を縮めて躲す。避けられたタツキはチツと軽く舌を打った。

「いきなり何なんだよ」

「そりゃ此方の台詞だ! TVしっかり見たからな! ? マジで心配し

「たんだぞ!？」

慌ただしい口調で怒鳴るタツキ、このやり取りも久しぶりだなア…とカスミ達は思った。

「誰だ」

と言ってタツキを指すゲンタ。タケシはあっと声を漏らす。

「そう言えばゲンタだけ知らないんだったな？あの娘はタツキ、サトシの幼馴染の一人でライバルさ」

「因みにタツキさんは女性よ」

アイリスから間違えない様にと指摘され、そうかと黒髪の青年は呟く。その一方でサトシはまだタツキから説教を受けてた。

「まったく！てめェは何時も無茶ばっかしやがって！！冷や冷やさせるなよ」

「すまんすまん。でもタツキも少し口の聞き方に気を付けた方が」

「お前は俺をおちよくってんの？」

青筋をピクピクと浮かばせるネイビーブルーの少女、このままでは話が進まないとサトシは思い、話題を変えた。

「所で此処へ何しに来たんだ？」

「おオ？すっかり忘れていたぜ、この町にスタジアムがあるだろう

？其処で明日、俺達“ライボルトスパークス”と“デーモンワルビ
ルズ”のレースが行われるのさ」

「レースって……ロードバイクのだよな？」

思い出して答えるサトシ、タツキはおうよ！と頷く。

「此処のバッジ、ストーンジムのコスモバッジを手に入れ、後はレー
スに向けて町の外れの荒野で練習してたら……」

「誤って此処に激突した……そう言う事か」

「嗚呼そうだよ！認めたくねェけどな！？ハッキリと言いやがって
！（怒）」

サトシに言われたのが気に食わないのか慷慨を立てるタツキ、其処
でサトシはある疑問を彼女に問う。

「ポケモンの仕業だったりしないよな？自慢じゃないが俺は仲間と
共に何度もポケモンに襲われたり驚かされたりしたから、まさか……
と思って」

「お前……良く生きてたよな」

親友の体験談に少し引いたネイビーブルーの少女、男と間違う程の
声質も若干震えている。

「そりゃあ恐らくウソギーの仕業だよ」

近くを歩いていた青年がそう呟き、全員の視線が彼に向けられる。

「この先に巨大な木があるだろ？ 其処にウソギーが一ヶ月前から住処を作って、町から宝石を盗んでいくのさ」

「例えばどんな物ですか？」

ケンジが問うと青年がポツポツと喋り出す。

「ネックレスや指輪、宝石。高価な代物ばかりだよ……もしかしたら次は」

其処まで行くと一同はハツとした。

「おい……まさか“虹色の宝石”まで盗む訳じゃねエだろうな……？」

引き釣った笑みを見せたパジェラの言葉にピンと来た、すぐさまタツキがバイクに跨って走り出した。

「やらせねエぞコンチクショー！！絶対捕まえてやらアアアアア
ツ！！！」

「おい！タツキ！」

サトシが叫ぶも既に遅く、彼女の姿は次第に見えなくなつた。

「……此処から先にある公園に近づく波導を感知出来た…この近くだ」

「そうか……皆、追うぞ！」

『おう（ええ）！』

サトシに続いて一同は走り去っていく、青年は姿が見えなくなった彼等を見送った。

「何だったんだ……？ まあ良いか、俺には関係ない事だし」

そう言って長い髪を紐で束ねた黒髪の青少年はリュックを背負って歩き去る、青少年は真っ直ぐ……ストーンジムに戻っていった。

ストーンシティの公園、其処の滑り台の梯子を上る一体のポケモンがいた。背中に風呂敷を背負い、如何にも悪そうな顔立ちの兎の様なポケモンは静かに上っていく。

「あら？」

通りかかった赤いポニーテールの女……ムサシがそのポケモンの存在に気付いた、ムサシはニヤリと不適な笑みを零してポケットからトランシーバーを取り出す。

「ニヤース、珍しいポケモンを見つけたわよ」

《ニヤニヤッ！？ 本当かニヤ？》

《何処にいるんだ？》

ニヤースの他にコジロウの声も聞こえる、ムサシはチラリとネットワークを天に掲げたポケモン……ウソギーを見る。

ウソギーは滑り台を降り、そのままピョンピョン跳ねながら公園か

ら出て行った。それを確認したムサシは端末型のモニターでストンシティのマップを映し出し、ウソギーとマップを交互に見る。

「大樹の方角よ、あんた達は先に待ち伏せしといて」

《おう（ニヤ）！》

端末とトランシーバーを仕舞い込み、彼女は駆け足でウソギーを追いかけて始めた。

一方此方は大樹。此処にはデント・ヒカリ・アイリスが来ていた。

「見えた……！ 此処に町から盗んだ宝石があるのね」

「うん、そうみたいだね」

ヒカリとデントが頷き、アイリスが木に向かって走り出した。

「木登りなら任せて！ キバゴ、行くわよ！」

「キバ！」

キバゴはしっかり主人に掴まり、アイリスは薦を伝って木を登っていく。段々登っていく内に人が入れそうな穴が見えた。

「……？」

違和感を感じたアイリスは其処まで着いて潜り込む、四つん這いになって進んでいく。

「!？」

其処には驚きの光景があった。

此方はストンシティの交番、カスミ・ハルカ・ケンジ・ミヤギの4人はジュンサーはウソギーについて相談をしている。

話によるとウソギーは普段は隠れ里を作り、群で行動しているポケモン。そんなウソギーが町に住み着くと言う異例の事態は見た事がない様だ。

ジュンサーに一礼し交番を後にする4人、其処へパジェラが合流した。彼の方も収穫は無かったそうだった。

「警察は頼りにならなさそうだな。俺達の手でやるしかねえぜ？」

「それしか無いかも」

カスミとケンジがモンスターボールを取りポケモンを出そうとした、丁度彼等6m先に3人の子供達が居り紺色の髪少年が慌てた様で叫んだ。

「本当か？ どうせ嘘だろ」

「本当だよ！俺聞いたんだ、あのウソギー以外の声を！」

「まーた始まったよ。シンタのホラ話だ」

「ホラじゃない！木を登っていたら聞こえたんだ、別のウソギーの
声」

「どうせそれもホラなんだろう！？大人も当てにされてねエのに。ア
ッハハハハ！」

虐めっ子二人の指摘に少年——シンタの目は涙ぐむ、すると二
人の虐めっ子は急に青ざめる。何事かとシンタが振り返ると……ス
カイブルーの髪の子——パジェラが腕を組んで無表情で此方を
見ていた。

『う……うわアアアアアアアッ！！』

虐めっ子二人は男の威圧に恐怖に怯え、一目散に逃げていった。

「あ…」

ありがとう、そう言いたいのだが悪人面のパジェラが怖いので身体
が小刻みに震え、中々言えない。

「ガキ、今の話…詳しく聞かせてくれねエか？」

一方ストーンシティの中央公園、ゲンタは町の宝とも言える“虹色の
レインボーストーン
宝石”を見つめていた。

「……」

美しい輝きを見せる七つの石を一通りに見渡し、ゲンタはその内の
インディゴストーン
一つ——“藍色の宝石”に手を触れる。

——この地の夜空を照らす光……か。

——穢れる事の無かったお前が、何故彼方側に身を置いた？

青年の脳裏に浮かぶのは、紅色の瞳を秘めた金髪の女性。スクール時代から様々な基礎・勉強を学び、彼女は自分の敵として立ちはだかった。

——何故、お前はそうなってしまった？

そう思索し、公園を離れる。するとウソギーと赤いポニーテールをした見覚えのある女が追いかけてっこしているのを見た。

「…あの女は確かロケット団」

面倒事を起こしおってと呆れつつ、青年は走り出した。

鍛え抜かれたその足はスムーズに走り、あっという間にムサシの真後ろに着いた。

「ゲッ!？」

「俺が簡単に見逃すと思ったか」

鋭く冷たい眼孔がムサシを捉える、意地汚い彼女はモンスターボールからハブネークを出す。

「ハブネーク、黒い」

「疎い。奏でろ、ハッサム」

バレットパンチ、と振り下ろされた腕は拳と化し、ハブネックはあつさりと気を失う。

「さて…どうする？」

「まだまだよ！ココロモリ、エアスラッシュュ！！」

エアスラッシュュは青年の足場を狙い、砂煙が舞う。煙が晴れた頃には既にムサシはいなかった。

「フン…」

軽く舌打ちし、青年は駆け足で町中を走る。

そしてサトシ・タツキ・タケシの3人は…。

「タツキ止まれエ！」

「うっせエ！練習の邪魔されたんだ！これが許せるかよ！？」

趣旨が変わっている…とサトシとタケシは呆れ、彼女を追いつつ木を指指していく。

「遅いなア…ムサシ」

「つまらないのニャ…」

退屈そうに公園の入り口で立ち往生するコジロウとニャース、サングラスを掛け全身黒いコート姿は変質者以外の何者でもない。

「————オオオオオオッ！」

『ゲッ!?!』

そんな一人と一匹の目に飛び込んで来たのは女性を乗せたロードバイク、その後ろにそれを追いかけるサトシとタケシの姿も…。

青ざめた一人と一匹は逃げようとするも既に遅く、バイクに弾かれて地面に埋まった。

タツキはバイクから降り立ち、公園を見渡す。

「此処で間違い無いのか？」

公園の各所を見渡し、気高き女は糸目の青年に聞く。

「嗚呼、あの木に間違いなさそうだ」

タケシとタツキが話し合っているとやな感じー！と言う声が聞こえた。空からムサシが飛んできて、コジロウ達と同様下半身を残して地面に埋まった。

「何しているんだ、此奴等」

「下らん愚行だ」

ゲンタがウソギーを抱えてやってくる、ウソギーに至っては不機嫌な表情をしている。

《ウソギー・闇兎ポケモン・何かを喜んでいる顔をしていれば、それは嫌がっている合図だ。》

ウソギーのデータを図鑑で調べサトシ達3人はゲンタの腕に抱えられたウソギーを見つめる。

「さて、町の人達から盗んだ宝石は何処だ？」

「白状しろ！」

ゲンタとタツキは答えを追求する様にウソギーを責める、二人の鋭い眼光にウソギーは泣きそうな表情になる。

「二人共待つんだ！」

「そうだが、責め立てても答えは出ないだろ」

サトシとタケシは二人を宥めようと諭すが、二人は警戒を解かない。

『宝石！？』

何時の間にか抜け出したロケット団が食いつく、面倒臭そうにチツとサトシが舌打ちした。

「お宝あるんなら、ウソギーちゃんを寄越しなさい！」

「お宝とウソギーは我々ロケット団が頂くぜ！」

「金銀財宝宝石、大儲けなのニャ！」

欲を暴露する3人に4人は呆れかえる、其処に…。

「お宝なんて無いわよ！」

え？と声を漏らした7人が振り返ると、黒髪の女性がダンゴロウを肩に乗せて現れた。

「ハタナさん！」

『え！？』

「…この女が此処のジムリーダーか」

タツキが女性——ハタナの名を呼び、ゲンタが薄く微笑む。サトシ達はその名を聞いて呆氣に取られた。

「その人の言う通りよサトシ！」

「お前等…」

ハタナの後ろから他の仲間も現れ、サトシはジッとハタナの顔を見つめる。

「この木にはお宝はありません、ウソギーが身体の弱ったポケモン達を匿っているの」

そう言ってカスミ達はポケモン達を見せる。クルミル、クロツチ、ヨーテリーと言った小さなポケモン達が咳き込んでいた。

「…全員捨てポケモンか…！？」

「はい。ウソギーはポケモン達の為に、そして仲間の為に盗みを働いていたそうです。雨の日も、嵐の日もずっと」

アイリスが抱えている弱ったウソギーを見、泥棒ウソギーを見るサトシ。

「これも身勝手な人間の所為…」

「ふざけた真似をしやがって…!」

タケシは嘆き、タツキは空を仰ぎながら怒りに震えてた。

「此奴等をポケモンセンターへ連れて行こう。ウソギー、確かに人間は残酷な種族だ…だが、全ての人間がそうじゃない。」

俺達を信じてくれ、その言葉に涙が溢れ出し、ウソギーは深々と頷き続けた。

「ねエ…私達忘れられてない?」

「うん…」

「存在されてなくて…」

『やな感じ…』

忘却に追いやられたロケット団の呟きは、茜色の空に消えた。

ポケモンセンター。手術の結果は病弱だったポケモン達は皆助かり、

明後日頃には回復する…とジョーイから知らされた。

「いやゝさっきのジョーイさんは怖かったかも」

「そうね。まるでリングマかつンベアーだったもの」

鬼の様な形相だった白衣の天使に小さな恐怖を覚え、カスミとハルカは苦笑いした。

「良かったなウソギー」

「仲間と潜り抜けた体験、それは君の身にも染めたと思うよ」

ケンジとデントの言葉にウソギーも涙を溜めて頷き、周りから笑いがこみ上げてきた。

「改めまして私はハタナ、ポケモンスクールの教諭ながらジムリーダーを請け負っています」

「サトシです、タツキと同じマサラタウンから来ました」

お互い自己紹介し、ピカチュウはチャアと可愛らしく鳴いた。

「まさかポケモンマスターご本人が直々にこの町に来て下さると思いませんでした」

可愛らしく微笑むハタナ、サトシの背後でタケシが目をハートにしてテンションを上げている。

「祭の後、宜しければストーンジムに挑戦して頂けると宜しいのです

けど…」

「時間は空いてます。俺は貴女に勝ち、ジムバッジをGETしてみせます」

決意の籠もった言葉に彼女は小さく笑い、失礼しますと礼を言って去っていった。

「ハタナさんか……今から楽しみだな」

物静かなジムリーダーに闘志を燃やし、サトシは拳を握る。

「さてと…俺は明日からレース。先に寝る」

解いたバンダナをジャージのポケットに入れ、彼女は部屋へ戻ろうとした。

「タツキ」

うん？と立ち止まり、サトシはソファから立ち上がった。

「チャンピオンシップの時、全く出来なかったろ？レースが終わった後…つまり明後日の午後…この町のバトルクラブでやろうぜ」

1年前に誓いを立てた約束、この機会を逃せば再会するまでは無い。

「構わねエ…やってやろうじゃねエか」

不適に微笑み、彼女は階段を上っていった。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

#23 Title of “King”;

8月6日 PM 09..23

ストンシティのサーキットスタジアム、大勢の観客で詰められチケットが完売になる程の観客が揃っている。

“ライボルトスパークス”のベンチ、タツキを始めとする10人のライダーがマシンを最終調整を行っていた。

「ヘイタ、其方はどうだ」

「OKだよ、何とか出来そうキョウスケ？」

「まあな」

ヘイタと呼ばれたのは茶髪の青年。年は17歳。キョウスケは緑の髪の少年。年は15歳。

「姐さん、其方はどうっすか」
あね

「此方のグループも問題ない」

シンクを架けてバイクのタイヤの部分に火を炙るタツキ。スタッフの少年は凄い集中力だ…と感心していた。

「よォ不良少女。折角の宝を壊すなよ」

帽子を被った白髪の男が歩いてきた、その手には酒を手にし、その

酒を飲んでいく。

「ザンキのおっちゃん、また酒飲んでんのか」

「ゲヘヘ、俺アまだまだ死なねェよ」

ゲヘヘと豪快に笑う男——ザンキ。タツキは彼を見て呆れかえってた。

「そーいやアオメエ、この町にダチが来てるつつってたなア……ベンチに來させて良かったのか？」

「嗚呼、俺の今を見て欲しいのさ。一番のダチにな」

ニヤリと満面の笑顔を咲かせる少女、その笑顔にライダー達やスタッフは顔を赤らめ、ザンキはそうか…と呟く。

それと同じタイミングで…。

「よっ」

彼女と同期である元氣が取り柄の青年——サトシが現れた。

肩の上にはピカチュウ、後ろには仲間達を率いている。

「もう来たのかよ？行動が早エよなお前って」

「そうかな？」

他愛のない会話をする二人を余所に、ゲンタ以外の仲間は“ライボ

ルトスパークス”のハンガーを見渡している。

「凄いなァ…お姉様は何時もこんな場所でマシンの整備をしてるのね」

ヒカリが目を輝かせてハンガーに置いてある、ロードバイクに目を奪われている。

「俺はこのチームの監督をしてるザンキって者だ。大したもんはねエが、見てってくれ」

「サトシです。タツキがお世話になっている様で…友人としてお礼を述べます！」

笑顔のサトシが頭を下げ、ザンキはフンツと笑った。その名を聞き、デントが食いついた。

「ザンキ…もしかして、“サンダーボルトロス”のリーダー・“稲妻のボルテッカー”と呼ばれたザンキさんですか!？」

「昔の話だ、もう現役じゃねェよ」

デントの言葉を否定するかの様に言うザンキ、彼はゲヘへと豪快に笑う。

「“稲妻のボルテッカー”？」

「知らないの? その通り名はレース界でも有名よ」

サトシの質問に答えながらも呆れるアイリス。

今から60年も昔の話、ボルテッカーの如く稲妻を迸りながら疾るレーサーがいた。

レーサーの疾った後には稲妻が残されており、全国のレーサーを激震させた。

「そのレーサーが…この老いぼれだと言うのか…？」

「嗚呼。話でしか知らねエが、オヤジは伝説のレーサーとして皆認めているのさ」

目を輝かせ、横目でザンキを見つめるタツキ。

「タツキにも懂れている人がいるんだな…」

ふと、サトシは今でも懂れている先代ポケモンマスター…未だに行方不明のあの男を思い出す。

ガシャン！という音が後ろから聞こえた。振り向けば如何にもガラの悪そうな男達上がり込み、その中心に高級な紺色のスーツを身に纏った男がいた。

「ヒェッヘッヘッヘ。『ライボルトスパークス』の諸君、調子はどうだア？」

口に咥えた葉巻を取り、茶髪の男は天に向けて煙を吐き嫌味ったらしく言い放つ。

「どうも、カオン伯爵。本日は快晴で良い天気日ですよな」

丁寧な口調で茶髪の男――カオンに頭を下げるザンキ。カオンはへへへと笑いつつ、タツキを見る。

「疾走の王」^{スピードキング}、俺のモノになる決心は着いたか？」

「お生憎様、俺は貴方みたいな人間のモノになる気はねえんで…」

「まだ俺と“デーモンワルビルズ”に楯突こうってのかア。好い加減諦めちまえよ」

下品に笑うカオンはタツキの身体を厭らしい目線で捉え、そのまま数人の男達を引き連れて去ろうとする。

「カオンさん、貴方が何度俺を口説こうとも、俺はレーサーを辞める気はねえ」

「へへへ…レーサーは勝つ事が全てなんだよ」

そう言い残し、カオン達は去っていった。

「……ザンキさん、あの男は何者なんですか？」

カオンから視線を移し、サトシはザンキに質問する。

「奴はカオン。エディンタウンの大富豪の息子で、“デーモンワルビルズ”のスポンサーさ」

その名を聞き、タツキを除くレーサー達が憤慨を起こしだした。

「チキショウ！あの坊ちゃんめ、何時見ても腹立つ！」

「俺らの姐さんを卑しい目で見やがって」

「一回殴りてエ位だ！」

レーサー達の怒り様に唾然とする一行、サトシはタツキを見る。

「…あんなのがストーカーか……大変だな」

「おい。笑い事じゃねエぞ」

サトシの哀れむ目線に気付き、彼女は漉かさずツツコミを入れた。

「そんなにあの人が嫌いなのかい？」

「否あの坊ちゃんは父親の偉大さを利用して天狗になってるから良い……問題は、“デーモンワルビルズ”の方さ」

ザンキを含め“ライボルトスパークス”全員の表情が曇りだし、拳を小さく震わせる。

「奴等は相手チームを潰す為なら何だってやるのさ。マシンの破損、マシン同士の衝突に見せかけた選手の負傷、レースは連中の遊び場に過ぎない……レースを真剣にやる気なんて無い」

暴走族も同然さ、キョウスケから告げられた言葉を聞き皆の脳内に“卑怯者”と言う言葉が浮かび上がった。

「タツキ……絶対に勝ってくれ」

「当たり前だろ？俺を誰だと思ってやがる」

マサラのじゃじゃ馬娘、と告げられると彼女は笑いチャックを上
上げ、ヘルメットを着ける。

「……行くぞ」

『オオッ!!』

全員の意志を見届け、ザンキはフツと笑った。

P M 10:00

レース場には10台のバイクが揃っていた、両チームからそれぞれ
5人の選手がスタメンとして出揃っている。マサラタウンからタツ
キの両親のコウジとヨシエ、姉のヒナコが心配そうな顔で中継を見
ていた。

「あなた…タツちゃんが」

「大丈夫だ、僕達があの子を信じないでどうする」

拳を握り締め、コウジの口から出た言葉がそれだった。娘の、妹の
無事を信じて。

「お姉様、頑張ってエ！」

『姐さん、負けるなア!』

ヒカリが…待機のレーサー達が叫び、ザンキも渋い顔つきで見つめる。

《さあ、いよいよレース開始となります！》

ピッ

ピッ

ピーッ！

電子音と共に10台のロードバイクが走り出し、平を乗り越えてく。

「行けエお姉様ア！そんな卑怯者達に負けるなアッ！」

「あのな…他の選手も応援しろよ」

冷や汗欠きながらパジェラが突っ込むも、彼女の耳には入ってない。

「キョウスケさんにヘイタさん、フウマさんもクドウさんも頑張れ
エエエエエエ！！」

スタッフの少年も叫び、何時の間にかサトシ達も応援のエールを送ってた。

「————食らいなッ！！」

ワルビルズ側のライダーが一人、身体を浮かせてタツキを蹴ろうとする。

だが、彼女は華麗なテクニクで躲し、そのライダーは軽く舌打ちした。

後方のライダーが鉄パイプを持ち、振ろうとする。

狙われている事に察知したキョウスケは大きく大ジャンプ、目を見開いてそれに気を取られ…。

「うわアッ!?!」

マシンから投げ出され、転落。マシンも壁に激突した。

『チッ!』

ワルビルズ側のライダー4人が一斉に舌打ちし、サトシ達は安堵の表情を浮かべる。

ワルビルズ側の4人は不正行為を働くも、5人はそれを軽く躲していき、7 LAP…最終LAPに近付きつつあった。

「後3 LAP…もうすぐだ」

すると、何かがフウマと呼ばれた青年のバイクの前タイヤに刺さった。

「なっ!?!く、釘!?!」

狼狽えるフウマのマシンがバランスを崩し始め、タツキ達4人もそれに気付いた。

「貰ったアッ!!」

ワルビルズのライダーが接近し、フウマにエルボーを仕掛けた。フウマは気付くも時は既に遅し、目を瞑る。

その瞬間だった、タツキがフウマをマシン事足で蹴飛ばし、

「!?!」

エルボーで吹き飛ばされ、空を舞ったのをヘイタは信じられなかった。

『姐さんッ!!!!』

ベンチ前でうつ伏せに倒れたタツキのバイザーは右側が割れ、右目から血が流れている。

「タツキッ!!」

幼馴染の惨い結果にサトシは顔を荒げ、ザンキやフウマ、そしてヒカリと救護班共々駆け寄った。

「…まさか」

パジエラはワルビルズ側のベンチを見た、其処にはペンチや釘を持ったカオンの姿が見受けられた。

「あんの野郎…!!」

怒りが剥き出しになり、鞘から刀を出そうとするパジエラ。

「止めろ！」

彼の腕を掴み、タケシが制止した。

「タツキの…レーザー達の夢を…潰すつもりか!？」

「……ッ！」

細目の男に聡き言葉に齒を噛み締め、彼は刃を鞘に納めた。

「……ハア…ハアッ……！」

息を切らし、身体を起こすタツキ。

「駄目です!まだ動いては…！」

「……すみません、姐さん」

「フウマ…」

ヘルメットを外した黄色の髪の子は大粒の涙を流し、頂垂れる。

「俺が…俺が…俺が油断した所為で…スパークスに…姐さんの顔に泥を…!!」

目の前の少年は嗚咽を上げて謝罪する、先程の自分の行為を思い出し…嗚呼、と納得した様な声を上げた。

「……気にするな、あれは俺が勝手にやった事だ」

誰の所為でもない。タツキはフウマを諭すが、フウマは更に涙を流した。

彼女の脳裏に蘇ってくるのは8年前——自分が“ライボルトスパークス”に入った当時だった。

クチバシテイの“ライボルトスパークス”の練習場、当時10歳だったタツキはリュックを背負い、練習を見ていた。

「わぁ…」

聞こえてくるのは聞き覚えのある走行音、少女はその音を聞いてうっとりした表情を咲かせた。

「おい嬢ちゃん、此処はオメエの来る所じゃねエ」

帰りな、とまだ髪が黒かったザンキが一蹴する。少女は帰らず勇気を振り絞り、ザンキを見た。

「俺、マサラタウンから来たタツキって言うんだ。おっちゃん、俺にバイクを教えて！」

その一言から始まったロードバイク生活。タツキはそれを回想し、フツ…と小さく笑った。

「サトシ…お前の波導は確か、人を治癒する事が出来るか」

告げられた言葉にサトシは呆氣に取られるも小さく頷き、

「タツキ…」

「お前の力が…必要だ」

そう聞くなり、サトシは彼女の腹部に片手を翳した——。

タツキが抜けてからスパークスの3人のライダーは悪戦苦闘を繰り返していった。

鉄パイプやメリケンサック、ペンチや足蹴りが行われるも、3人は苦しくも躲し続けた。

『ぐあっ!』

体力も限界に近付きつつあり、攻撃を受ける一方である。観客からワルビルズへの野次が飛び交い、解説も余りの惨さに言葉を失っていた。

ギョーン!という音が7人の耳に入った、彼等は後方へ振り返ると…。

「なっ…スピードキング疾走の王”!?”」

先程自分達が怪我を負わせたタツキが後ろにおり、ワルビルズのライダーは復活の速さに驚いていた。

そして…。

「ハブオツ!?!」

そのライダーは吹き飛ばされ、マシン諸共壁に激突した。

『…ス…“疾走の王”が…復活したアアアアアッ!!』
スピードキング

アナウンスの声と共に歓声上がり、彼女のファンクラブの男女も感動していた。

「気を抜くなよお前等! まだレースは続いてんだ!」

『はい!』

その号令が火種となり、不正行為を躲しつつ、最終LAPに突入した。

そして…。

結果、“ライボルトスパークス”の勝利が決まった。

泣く者もいれば笑う者もいる、感動に浸かっている“ライボルトスパークス”の姿に観客は温かい拍手を送った。

「————ふざけるなチクショウ!」

『!?!』

“デーモンワルビルズ”の監督が我慢の限界を越え、怒鳴り声を上げた。一同は怒鳴り声に反応して監督の方へ振り向いた。

「こんな事があってたまるか！特に“疾走の王”^{スピードキング}のあのスピードは何なんだ！？明らかに500kは出ていただろ！？」

「…」

自分の走りをケチられ、タツキは若干表情を顰めた。

「あんなイカサマ、俺達は認めねエぞ！」

「その通りだ！元々金で雇われたが、もううんざりだ！」

「此処からは、俺達の好き放題でやらせて貰うぜ！」

そう言う“デーモンワルビルズ”は監督を含めてポケモンを繰り出す。ダーテングやマグカルゴ等のポケモンを前にして、サトシは表情を歪める。

「お、お前等何してんだ！俺の命令を聞けよ！」

「うるせエ！もうてめエのお守りはうんざりだって言っただろ！」

カオンは怒号に身体を竦ませ、顔面蒼白にさせた。

「もう救い様が無いな」

「そう思うか？哀れと思うよな？」

その内の一人がニヤニヤと笑いながら言うが…。

「何を言ってるんだ？ ゲンタが指しているのは、何方もだぜ？」

『あアッ！？』

一気に怒りを剥き出しにし、彼等はサトシとゲンタを睨んだ。

「ふざけやがって！ バンギラス、ドラゴンクロー！ あの小僧を殺せ！」

監督の指示にバンギラスはドラゴンクローを放つ。

ズバツと言う音と共にサトシの帽子が吹き飛び、彼の右眉から血が流れる。

「小僧！！」

ザンキは叫び、観客は悲鳴を上げた。

「何…！？」

監督は驚いた、死ぬと思われた目の前の青年は血を流しながら立っていた。青年は表情を崩さず、不適な笑みを零していた。

「なっ！？ このガキ、生きてやがる！」

「そんな！？ どうなってんだ！」

他のメンバーもその光景に驚愕と狼狽の表情を見せ、そんな中でサ

トシは帽子を拾う。

切り傷はみるみる塞がっていき、溢れた血も何も無かった様に消えていく…。

『!?!』

ザンキやカオン、他の面々が不思議な現象を目にする、何人かが理解に苦しむ一方だ。

「自己再生能力…やっぱり何回見慣れてても冷や冷やするよ」

デントが胸を撫で下ろし、全くだと仲間達は深い溜め息を漏らす。

「ピカチュウ、10万ボルト」

「デユウウウウウツ!!」

強烈な稲妻がバンギラスと地面タイプ以外のポケモン達を襲い、彼等は悲鳴を上げる事無く卒倒した。

「嘘…!?!」

一撃…!?!と誰もが愕然の表情を見せ、

「アイアンテール」

「ピツカァ!」

鉄の尾がバンギラスや地面タイプのポケモンを一掃、皆驚きの余り

開いた口が塞がらなかった。

「ヒィ！？く、来るなァッ！」

「ば、化け物…！」

監督とカオン、多くの面々がサトシの放つ威圧に戦き、尻餅を付いた。サトシにそれ程の恐怖を抱いているのだ。

「あんなの…イカサマでも何でもねエ…思いが込められた奇跡だ」

「ア…アアアアア…！！！」

カオンは涙と鼻水を出しながら、サトシを見上げた。彼の身体は炎に包まれ、赤い模様が浮かび上がってくる。

「タツキの…“ライボルトスパークス”の悪口は言わせねエ…！！ポケモンの事も勝負の意味も知らねェ奴が…二度とそれを言うな…！！」

『ギ……ギャアアアアアアアアアッ！！！！』

その姿は正しく鬼…否、悪魔に近かった。彼の恐ろしさに耐えきれず、カオンと“デーモンワルビルズ”は逃げ出していった。

ストーンシティのポケモンセンター、タケシがタツキの右目に貼られた絆創膏を剥がす。

右目はしっかりと開くが、その右斜めには小さな切り傷が出来ていた。

「悪いな…結局お前に迷惑を架けちゃった…傷は残して良かったのか？」

嗚呼、と返事を返すネイビーブルー。

「明日には消しておけば良い。俺を応援してくれる人達に世話されたら困るし」

ニコリと笑い、女性はバンダナをキツく締める。

「んじゃあ明日の昼の14時、バトルクラブでな」

「嗚呼」

そう言い残し、タツキは部屋に向かおうとする。壁に寄り添ったザンキに気付き…。

「無茶すんなよ」

「引退したジジイに言われたくねェよ」

皮肉を飛び交い、祭の二日目が終了する。

T o b e c o n t i n u e d

#24 Knight of Rainbow (前書き)

人気投票、ありがとうございます！

詳しくは後日にて。

#24 Knight of Rainbow

虹色祭も今日が最終日、ウソギーの泥棒騒動や“ライボルトスパークス”と“デーモンワルビルズ”の試合を経験し、ストンシティで過ごす日も残り僅かとなった。

8月6日 PM 8..17

ストンシティのポケモンセンターで朝食を済ませ、サトシ一行は思い出として出店を回っていた。

因みにゲンタは、

「群れるのは好かん」

と言い、パジエラと共に修行に向かったらしい。

「全くゲンタは勿体ないねエ…」

「だな。まだ若いのに祭を楽しまなければ…もっと騒ぐ事を……！ウヒョーッ！綺麗なお姉さん……！」

「タケシは騒ぎ過ぎ」

花魁の和服を着る女性を見て走っていくタケシにぼそつと呟くハルカ。

「二人も若い事を忘れずに…It's Festival time！」

叫びながら輪っかを投げるデント、一方サトシはヒカリとアイリスに挟まれていた。

「おーい…何時まで続けるつもりだよ。その水ポケモン掬い」

『イヤ！絶対賞品を手にするの！』

ハモって怒鳴る紺色と紫色、二人の少女の迫力に彼は表情を引き釣らせた。二人の脳内は勿論、サトシとのデートである。

「…余り物の私達は何か食べよっか」

「そうだな…」

落ち込むミヤギを慰めながら引き連れ、カスミはモンメンの綿飴を食べる事にした。

「俺も何かやろうっと」

歩き出そうとするサトシ、彼のパーカーの裾をヒカリとアイリスが掴んだ。

「何処へ行く気？」

「あ…否、何か買おうかなって思ってた…」

「逃がさないわよ」

ハア…と溜め息を吐き捨て、彼は折れた。

一方、ストンシティを見下ろせる程の崖、その奥の森の中でゲンタとパジエラが向かい合っていた。

「斬れ、ボスゴドラ」

碧眼の獣と、

「奏でろ、ハッサム」

真紅の鋏が向かい合った。

「ハッサム！」

「ゴオオッ！」

鋼の爪———メタルクロー。

同じ技が相殺し、火花が散る。青と黄金が見つめ合い：接戦を繰り広げる。

「あの女は何者だ？」

水色の髪から告げられた言葉、僅かに眉を顰めて頭に過ぎるのは———金髪の女。

8年で変わってしまった友、彼女の身に何が遭ったのかも、自分を恨む理由も解らない。

「呆けても無駄だぜ。あの嬢ちゃんの様子は———どう見てもテ

メエへの敵意だった」

「……」

8年前の出来事、スクールを去る間際、彼女の言葉が今でも脳内にちらつく。

——私…私、貴方の事が…。

あの涙で語った声は今も忘れられない、否、忘れる事が出来なかった。

「真空波」

「ラスターカノン」

銀色の閃光と空色の斬撃がぶつかり合い、相殺される。パジエラは静かにサンキューと、労いつつボールに戻る。

「戻れ」

それだけ言ってハッサムを戻すゲンタ。

「俺らは待つぜ。テメエが本当の事を話すまで…」

必ずな。

と言って黒髪の肩を抱く水色の髪、二人はそのままストンシティへ戻っていく。

此方はストンシティの出店を回っているサトシ達、彼等はお好み焼きを美味しく食べている。

そのお好み焼きを焼いているのは事もあるうにもロケット団だった、サトシは既に気付いているが敢えて気付かない振りをしている。

「昼飯にお好み焼きなんて…私達、ついているかも！」

「うん！凄く美味しい！」

味わって食べているケンジとハルカ、引き釣った笑みでムサシ達3人組は苦笑いする。

———味わったんなら、早く行けよ！

そう突っ込みたかったが突っ込めない、この甘い空気の中、中々言う勇氣は二人と一匹には無い。

その発信源は……サトシの左右を挟んでいる、ヒカリとアイリスにあった。

『サトシとの時間を邪魔すんなやゴルア』

と言った風なオーラが出されており、ムサシ達は恐怖を肌で感じ取っていた。

「美味しいな、今度家でも作ってみるかな」

笑いながら脳内のメニューに入れ込む青年。その時だった…。

「―――!」

ズクリと背中から何かを感じ取り、割り箸と小皿を落としてしまう。

「コラァ! あんた、何しているのよ!」

「あ……悪い」

潔く頭を下げ、サトシは怒鳴るカスミに謝罪する。

―――今のは何だ?

恐怖とは懸け離れた“何か”を察知し、彼は青空を仰いだ。それでもその正体は解らなかった。

P i P i …

P i P i …

突然ポケットから何かが鳴り、サトシはポケギアの通話ボタンを押す。

『よっ』

「タツキ、何か用か」

画面越しの幼馴染がニヤリと笑い、自身に向かって質問してきた。

『言い忘れていたがお前、今何匹?』

「は？ピカチュウを含めて4匹だが…」

『おい…もしかして…ピカチュウ以外、全部置いてきたのか？』

「…当たり前」

『うおい！…まあいい、俺も相棒以外を置いてきているからな。それなりの4匹を揃えてっから…覚悟しておけよ』

そう言い残し、ポケギアの通話を切った。

そして14時、サトシはバトルクラブへ訪れた。彼を出迎えてくれたのはタツキ、そしてバトルクラブのオーナー・ドンジョージだ。

「バトルクラブへようこそ！」

「今日は、ジョージさん」

「ほほう、私を知っていると言う事は…君はイッシュ地方のドンジョージ達と面識があるのかね？」

「はい」

緑のシャツを身に纏ったドンジョージの質問に答えると、ドンジョージはハハハ！と笑った。

「用件は聞いているぞ！此処にいるタツキ君とのバトルの審判、引き受けようではないか」

「ありがとうございます！」

ドンジョージに案内され、二人はバトルフィールドで向かい合う。

客席には仲間達の他に新米トレーナーであろう少年少女達、更にチャンピオンシップで見かけたタツキのファンクラブの女の子達もいた。

「凄い集まりだね…」

ケンジは観客の多さに驚く。

「当然だろう。トレーナー達の憧れであるポケモンマスター、そしてチャンピオンシップベスト16の実力者が競うのだ」

表情を変えず、ゲンタが正論を述べる。

「タケシ、タツキさんとバトルした時の話…教えてくれる？」

ハルカの懇願にタケシは嗚呼、と答えた。

「俺と戦った時彼女はリザードでイシツブテ、スピアーでイワークを倒した…その時は相性をひっくり返されるとは思わなかったさ」

アハハと清々しい表情で笑うタケシ、彼の視線はバトルフィールド場の二人にあった。

「これよりマサラタウンのサトシと、同じくマサラタウンのタツキのポケモンバトルを始める！使用ポケモンは4体、何方かのポケモンが全て戦闘不能となった時点でバトル終了となります！」

二人は不適に笑い、モンスターボールを取る。

「それでは、バトル開始！」

ドンヨージが合図を出し、二人のバトルが始まった。

「クロッチ、君に決めた！」

サトシは飛行タイプのクロッチ、

「疾風^{はし}れ……クラウン！」

タツキが繰り出したのは雲の様な形をした、ファンシーなポケモン。

『クラウン・雲ポケモン。雲を自由自在に操り、天気を安定させる事が出来る。機嫌が宜しくない時は嵐を起こす事がある』

「クロッチ、念力だ！」

「チュン！」

クロッチは両目を青く光らせ、クラウンを吹き飛ばす。しかしクラウンは難無く体制を立て直し、

「クラウン、ピッカリ玉だ！」

クラウンは小さな雷雲を放つ、クロッチはそれを食らい、効果抜群のダメージを食らう。

「クロッチ！」

「続けて行くぜ！風起こし！」

先程とは逆に、今度はクロッチが風に飛ばされる。

「クロッチ！その風を利用しろ、燕返しだ！」

クロッチは風を上乘せして上昇、風を味方にして…。

「チヨオオオオオオンッ！！」

強烈な燕返しを決める。

「チッ…！鎌鼬！」

「念力だ！」

鎌鼬を躲し、念力を放つクロッチ。直撃を受けてクラウンは戦闘不能になった。

「クラウン戦闘不能！クロッチの勝ち！」

ドンジョージが判定し、歓声が沸き上がる。

「やったな、クロッチ！」

「チュン！」

サトシからの誉め言葉に小さく微笑み、クロッチは返事した。

「良くやったクラウン、ゆっくり休め」

タツキは労いつつクラウンをモンスターボールに戻す、彼女は新たなボールを出す。

「バトルはまだまだだ、浮かれんなよ。疾風^{はし}れ、バジルス！」

タツキが次に繰り出したのは、まるで翼龍の体型をしたポケモンだ。

『バシルス・葉草ポケモン。オゾンを発生させ、周りの空気を綺麗にする。バジルスの側では病気になるにくい』

「草タイプか？何かドラゴンタイプにしか見えねエが…？」

そう思い、サトシはバジルスを凝視した。

「外見で判断するなって言う基本だ。バジルス、切り裂く攻撃！」

「クロッチ、躲して燕返し！」

クロッチは切り裂くを躲し、バジルスに燕返しを決める。

「良し！」

「安心するのはまだ早エぜ。チャージビーム！」

バジルスの口から黄色い閃光が放たれクロッチは電撃を浴びる。

「クロッチ！」

「な、何で草タイプが電気技を出せるんだ!？」

思い掛けない光景にミヤギは驚き、タケシが解説する、が…。

「バジルスは進化すると草タイプの他に電気タイプが加わる。美しいポケモンが美しい程、強くなるのさ」

黒髪の青少年が解説し、その説明に一同は目を見開いた。

「テメエはこの間の…!」

「あ、この前は名乗らなくてごめん。僕はイシヤ、ストーンジムの審判を勤めてるんだ」

青少年——イシヤは軽く謝罪し、バトルフィールドを見る。

「止めだ。切り裂く!」

バジルスの容赦ない一撃が決まり、クロッチは墜落して戦闘不能になる。

「クロッチ戦闘不能!バジルスの勝ち!」

ドンジョージが判定を下し、これでお互いのポケモンは3体になった。

「戻れ、クロッチ」

「バジルス、一回戻っている」

お互いポケモンをモンスターボールを戻し、新たなモンスターボールを取る。

「次はお前だ！疾風^{はし}れ、ココロン！」

「なら俺はフアマー、君に決めた！」

サトシはフアマー、タツキは卵の様なポケモンをフィールドに投入する。

『ココロン・卵ポケモン。身体が弱いので殻で身を包んでいる、転がりながら移動する事が出来る』

ヒカリがポケモン図鑑を仕舞い、イシヤが説明する。

「ココロンは進化の石で特定の姿に進化するんだ。水の石でカモドツク、月の石でハサガ、リーフの石でトノツパー、太陽の石でガルーダへそれぞれに進化する事が出来る」

ヒカリとアイリスはヘェ…と納得し、唾を飲む。

「フアマー、火の粉だ！」

先制攻撃に出たのはフアマー、放たれた火の粉はココロンに命中する。

「何…？」

しかしココロンには余り効いていない。タツキはフツと笑った。

「ココロンの殻は炎も堪えられる程に固いぜ？そんな攻撃では傷一つ付けられねエ！」

「なら…体当たり！」

「此方も体当たりだ！」

ファマーとココロンが激突し、火花を散らしている。

「火の粉！」

「躲して転がる攻撃！」

転がり出したココロンは火の粉を次々と躲し、ファマーに迫っていく。

「ファー！」

ココロンのスピードが速い為、ファマーは攻撃を受けてしまう。

「ファマー！大丈夫か！？」

ファー！威勢良く鳴くファマー、サトシは顎を触りながらココロンを見る。

「ココロン、卵爆弾！」

「ファマー、辺り一帯に火の粉を放て！」

「何！？」

言われるがままに火の粉を放ち続けるフアマー、煙でフアマーの姿が見えなくなり、タツキとココロンは周囲を見渡す。

「噂のフィールド制圧か…！ココロン、気を引き締めろよ？」

コクリと小さく頷くココロン、煙の中に影が見えたのを彼女達は見逃さなかった。

「卵爆弾！」

「ココローン！」

ココロンは爆弾を放つも、不発だった。

「目眩まし！？」

「フアマー、火の粉だ！」

煙から火の粉が放たれ、ココロンに直撃する。

「チッ…！ふざけた手をオオ…！」

血管を浮かばせ、男装女は青年を威嚇する。

「フアマー！体当たりだ…！」

「一気に決めるぞココロン！此方も体当たりだ！」

2体の体当たりが激突する、彼等はニヤリと笑った後、そのまま崩

れ落ちる。

「フアマー・ココロン共に戦闘不能！」

「ああゝゝ、惜しい！」

ヒカリが悔しそうに呟き、

「良いバトルだったよ。フアマーもココロンも」

タケシが2体の奮闘を述べ、微笑む。これで二人のポケモンはお互い2体…。

「次はお前だ。リープン、君に決めた！」

「疾風^{はし}れ、バジルス！」

お互い草ポケモン、バジルスの威嚇にリープンはギョツとするが表情を元に戻した。

「おいおい、これだと弱い者虐めになっちまうぞ。つつつてもしょうがねエよな……！切り裂く攻撃！」

黒い笑みを見せ、バジルスに切り裂くを命じるタツキ。

「ポイズンリーフだ！」

そうはさせまいとサトシがリープンに指示を出す、紫色の葉と鋭い鍵爪がぶつかるも…。

「バイイイイ！」

「リップウウウウツ！！？」

力で押し返され、リープンは壁に叩きつけられる。

「駄目だ！パワーが違いすぎる！」

「マジカルリーフ！」

「リープン、葉っぱカッターで防御だ！」

双方の葉が相殺して行くも、マジカルリーフがリープンに襲いかかった。

リープンの身体が切り傷だらけになり、気を失った。

「リープン戦闘不能、バジルスの勝ち！」

ドンジョージが判定し、サトシはリープンをボールに戻しつつ労った。

「おいおい嘘だろ…？攻撃の隙も与えねエって事かよ」

早すぎるリープンの戦闘不能にパジエラが吃驚する。

「ピカチュウ、頼むぜ」

「ピッカ！」

主人に促され、黄色い鼠——ピカチュウは肩から降りて戦場に立つ。

「ピカチュウか……！　そういやすっかり忘れてたぜ、最強の二文字が相応しいピカチュウをな」

汗をツーツと流し、男装女は不適に笑う。

「バジルス、マジカルリーフ！」

マジカルリーフが一直線にピカチュウへと向かうが……。

「10万ボルト！」

「ヂュウウウウウツ……！」

ドガアァン！！　という爆音を立て、葉っぱは意図も簡単に炭と化して消えた。

「切り……」

「アイアンテール！」

バジルスよりも素速く攻撃し、鉄の尾が鳩尾に入る。静寂な空気がその場を支配し、糸が切れた様にバジルスが倒れた。

「バジルス戦闘不能、ピカチュウの勝ち！」

ドンジョージが判定し、これで向かい合う二人の手持ちは一体ずつになった。

「凄いや…！流石ポケモンマスター！」

「格好いい！」

「あんなに強いポケモンを一撃でやつつけちゃうなんて！」

期待溢れた新人トレーナー達が歓喜の声を上げて興奮する中、タツキは静かにバジルスを戻した。

「本気で驚かせるよな、お前は」

「褒めても何も出ねエよ」

不適な笑みを零す彼女を警戒し、サトシも微笑む。

「あの4番目のお前が今では世界最強のトレーナー…博士、ジンさん、トウマ…そしてシゲル。あの4人が認めてこの俺がお前を認めないでどうする」

最後のモンスターボールを持ち、サトシに向けて突き出した。

「覚悟して来やがれポケモンマスター！疾風^{はし}れ、相棒！」

空を仰いで投げ、光と共に翼を持つポケモン……リザードンが姿を見せた。

「行くぞ相棒！先ずは剣の舞！」

リザードンは神秘的な踊りを披露する、その舞に観客は魅了される。

「ドラゴンクロー！」

「アイアンテールで迎え撃て！」

ドラゴンクローとアイアンテールが激突し、火花が散る。

サトシとタツキ、二人のパートナーも不適な笑みを零し、電撃と炎がぶつかり合っていく。

「相棒、ファイアスファイアだ！」

「ピカチュウ、エレキボール！」

再び爆音が響き、客席から歓声が聞こえてくる。そう、まるで公式リーグで戦っているかの様に…。

「タツキ、腕を上げたな！てっきりレーザーサー業にしか手が回らないと思ったぜ！？」

「そう言うお前こそ鈍ってねえだろうな！？後ろががら空きだぜ！」

そう言っている内にリザードンはピカチュウの背後に回り込む、火炎放射が襲いかかるが電光石火で免れるピカチュウ。

「10万ボルト！」

「ヂュウウウウウウツ！！！」

迸る電撃がリザードンを襲う、リザードンは負けじと火炎放射を放

つ。ピカチュウは二の腕をクロスさせて防御する、彼はボロボロで
ありながらも笑みを零す。

「ボルテッカー！」

「決めろ！フレアドライブ！」

二つの大技が激突し、電撃が炎を押して行っている。

「ピッカー！」

電気を纏った尾が頬に叩き込まれ、翼龍は地面に墜落した。

土煙が止み、其処にはクレーターが出来上がり、その中心でリザードンが横たわってる。

「リザードン戦闘不能、ピカチュウの勝ち！よって勝者、マサラタウンのサトシ！」

「…やったぜピカチュウ！」

シロガネ大会でシゲル、チャンピオンシップでトウマ、そして今…
タツキにも勝利し、彼等は自らのパートナーと共に笑い合った。

「……ふう」

リザードンをモンスターボールに戻し、ボールをホルダーに付ける。

彼女は薄らと微笑み、サトシに近付き手を差し伸べた。

「清々しい程に負けたぜ、お前にはよオ」

「へへ…」

握手を交わして微笑む二人の若人、仲間達を含めた多くの観客は二人に拍手を送った。

夜、屋台でモンメンの綿飴やオクタン焼き等の名物を食べつつ、射的や輪投げ、コイキング救いと言ったものを楽しんでいく一行。

タツキも彼等と共に混ざって騒ぎ、最終日を楽しんでいった。

「皆、見てみるよ」

タケシの言葉に空を見上げてみると、夜空はとても美しい虹に包まれていた。

「knight of Rainbow…ナイト・オブ・レインボー年に一度、ギリアスの空は虹に包まれると言う言い伝えは、本当だったのね…！」

カスミが夜空を見上げて呟いた、彼等はその夜虹を見取れていたのだった。

翌日の朝…タツキは先に旅立ち、サトシ達はストーンジムに繋がる道を歩いていた。

「サトシ、本当にタツキさんの見送りに行かなくて良かったのかい？」

デントがその疑問について訪ね、良いさとサトシは答えた。

「彼奴は何時も一人で勝手に旅立っていくんだ。俺達に知らせもせずに、トウマやシゲルも同じ事を思っている筈さ」

「あアそうかい…」

このサトシと言う人間を改めて理解し、パジエラは呆れかえる。

「いよいよだな…!」

コクリと頷くピカチュウ、サトシは道の先にある銀色のシンボルマークが付けられたライムグリーンの建物が見、仲間達と共に扉の前に近付く。

「頼もう!」

高らかに叫び、扉を潜った。その先には土色のバトルフィールド、その中心にジムトレーナーのツチャ、そして。

「お待ちしていました、サトシさん」

ダンゴロウを肩に乗せた女性、ジムリーダー・ハタナの姿が其処にあった。

「ええ! ギリアス地方最初のジム戦、挑戦に参りました」

いよいよ、サトシのギリアス地方、最初のジム戦が始まる!

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

#25 ストンジム！VSジムリーダー教師・ハタナ（前書き）

更新しました。最後の方に新キャラが登場します。

#25 ストンジム！VSジムリーダー教師・ハタナ

タツキとの再会を経て、遂にストンジムに挑戦する事となったサトシ。

ストンジムのジムリーダーにしてポケモンスクールの教師を請け負うハタナ、二人のバトルが始まろうとしていた。

「これよりストンジムジムリーダー・ハタナと、チャレンジャー挑戦者サトシによるジム戦を行います」

軽く咳払いし、説明するストンジムのトレーナー・ツチャ。

「使用ポケモンは3体、何方かのポケモンが全て戦闘不能になった時点でバトル終了となります。尚ポケモンの交代は挑戦者のみ認められます」

お互いモンスターボールを取り、不適に微笑んだ。

「それでは、バトル開始！」

ツチャは両腕を振り下ろし、ストンジムのジム戦が始まった。

「さあ行ってください、イシツブテ！」

「ラッシャイ！」

ハタナの最初のポケモンはイシツブテ、

「ピカチュウ、先鋒は勤められるか？」

「ピカッ」

「良し、頼むぜ」

ピカッと小さく頷いて、ピカチュウはイシツブテと向かい合う。

「おいおい、イシツブテにピカチュウをぶつけるか普通？」

「どう考えても不利じゃねエか？」

ミヤギは目を大きく開き、パジエラは溜め息を吐きながらピカチュウを見下ろす。

「そっか。ゲンタ達3人は知らないわよね」

「エボリューション・ポケモンって知ってる？」

『はアッ!!?』

「…それは確か、生死に関われば急激に覚醒する革新したポケモンの事では…まさか」

その単語は3人も耳にした事があり、それを察してピカチュウを見る。

「イシツブテ、丸くなるです！」

二の腕をクロスし、丸くなるで防御力を上げる。

「転がる攻撃！」

隔たれた岩石のフィールドを転がり始め、ピカチュウに迫る。

「躲せ！」

ピカッ！と頷き、ジャンプして左に躲した。

「方向転換して下さい！」

タイヤの様に方向転換させ、再びピカチュウに向かっていく。

「電光石火で弾き飛ばせ！」

「ピカァ！」

電光石火と転がるがぶつかり合って押し合うも、電光石火がイシツブテの身体を宙に舞い上がらせる。

「何…！？」

「マ、マジか…！？」

「有り得ん…！」

「こんな事が…」

パジエラ、ミヤギ、ゲンタ、ツチヤがそれぞれコメントを漏らす。
呆氣に取られたハタナはハッと我に返り、

「イシツブテ、体制を立て直して下さい！ジャイロボールです！」

イシツブテは右から高速回転を始め、落下スピードを殺して着地に成功する。

「此処からは私が反撃をさせていただきます。イシツブテ、捨て身タツクル！」

イシツブテは文字通りの捨て身タツクルを繰り出す。それに対してピカチュウは笑みを零した。

「ピカチュウ、その場で回転しながらアイアンテール！」

鉄の尾ごと身体を回転させ、そのスピードは段々早くなっていく。

「イシイ！？」

驚いてイシツブテは狼狽え、そのスピードを捉えきれずアイアンテールが脳天に直撃する。

「イシ……！」

激痛に悶え苦しみ、うつ伏せに倒れた。

「イシツブテ戦闘不能！ピカチュウの勝ち！」

ツチヤが旗を上げ、ピカチュウの勝利を宣言した。

「い…1分も経ってねえぞ？」

「あのガキ：相変わらずとんでもねェ野郎だな」

ミヤギは顎の骨が外れる位に口を開けて愕然、それに対してパジェラは汗を掻きながら笑みを見せる。

「エボリユーション・ポケモン：唯の伝説と思っていたが…！」

迷信では無いと確信を抱き、ゲンタの瞳が僅かに揺れる。

「3年振りのジム戦：少し緊張するぜ」

腕を左右に伸ばし、サトシはピカチュウと視線を合わせながら語る。

「イシツブテ、良く頑張りましたね。ゆっくり休んで下さい」

労ったイシツブテをモンスターボールに戻すハタナ、彼女はサトシに視線を向けた。

「流石サトシさんです、私の先発であるイシツブテをこうも簡単に退けるなんて…」

別に簡単ではありませんとサトシは苦笑いして否定する。いいえ、とハタナは首を左右に振る。

「申し分無いお力です。私も全力で貴方をお相手しなければなりません」

ダンゴロウ、行くのよ。と声を掛けるとダンゴロウはハタナの肩を降り、フィールドに立った。

「驚きましたよ。てっきりダンゴロウは切り札かと…！」

不適に微笑む、彼が下した判断は…。

「ピカチュウ、一回戻れ！」

ピカ！と頷いてトレーナーサークルに戻るピカチュウ。サトシはモンスターボールを取り空に突き出す。

「ファマー、君に決めた！」

そう言って繰り出されたのはファマー。え？とハタナとツチャは言葉を失った、しかしハタナは直ぐに我に返った。

「良くお気付きになりましたね。ダンゴロウが岩タイプの他に虫タイプを持ってる事に」

「長年の勘ですよ。ファマー、体当たり！」

「此方も体当たりよ、ダンゴロウ！」

体当たり同士がぶつかり合い、ファマーがダンゴロウを吹き飛ばす。

「ダンゴロウ、岩落とし！」

「躲して火の粉！」

岩を避けられ、火の粉を食らうダンゴロウ。身体を起こして砂を纏い始める。

「ダンゴロウ、砂嵐！」

ダンゴロウから放たれた砂塵の風はファマーを吹き飛ばす。

「あれは…砂嵐!？」

「でも砂嵐とは少し違う気がするよ?」

カスミとケンジは驚き、砂を纏うダンゴロウを見る。

「続いてサンドソニック！」

砂で造られた斬撃が飛び交い、ファマーに少しずつ命中していく。

「ファマー！」

サトシの声が静かに響く、彼の脳裏にクシャータウンでの出会いと共闘が遮っていく。

自分は一人じゃない。仲間が…サトシがいてくれる！

それを胸の中に焼き付け、ファマーの身体から膨大な電気が発射された。

「あれは…放電!？」

アイリスが目で追うと、放電はダンゴロウに命中。その一撃でダンゴロウは麻痺状態になった。

「フアマーお前、新しい技を覚えたのか…?」

コクリと頷かれると、彼は優しく微笑んだ。

「行くぞフアマー! 最大火力の火の粉だ!」

火の粉攻撃が連続で放たれた。その集中放火を受け、ダンゴロウは戦闘不能になった。

「ダンゴロウ戦闘不能、フアマーの勝ち!」

「…ダンゴロウ、少しお休みになって下さい」

モンスターボールにダンゴロウを戻したハタナ、遂に最後のポケモンが入ったモンスターボールを取る。

「あんなタイミングで放電を閃くとは、貴方は噂以上のお力をお持ちですね」

「ありがとうございます」

薄らと微笑むハタナはモンスターボールを空へ突き出す。

「出よ! ストンジムのまもりがみ護神・スミロドン!」

投げられたモンスターボールが開口され、現れたのは青白い毛並みを持つ獣型のポケモン。

「グアアウツ!」

《スミロドン・サーベルポケモン。古来より復活したポケモン。鋭い二本の牙は折れる事は無い》

精悍な牙はキラリと光り、スミロドンは不適に笑みを零す。

「このスミロドンは牙の化石より蘇ったポケモン、私のもう一人のパートナーとも呼びます。サトシさん、貴方にこの子に勝てますか？」

笑みを零してサトシを挑発しようとするハタナ、対してサトシは息を飲む。

「行くぞファマー、火の粉だ！」

「させません。スミロドン、吼える！」

「グオオオツ！！」

けたたましい叫びが館内に木霊する、ファマーは耐えきれず強制的にモンスターボールに戻され――――

「リプ！？」

変わりにリープンが強制送還された。

「チツ…厄介な技を！リープン、いきなりですまない。ポイズンリーフ！」

軽くリープンに謝罪し、ポイズンリーフを指示するサトシ。リープンは言われるがままに従い、ポイズンリーフを繰り返す。

「スミロドン、切り裂く攻撃！」

右前足の爪を立て、ポイズンリーフを防御するスミロドン。

リープンは驚き、スミロドンに力負けしてしまう。

「強い！」

「パワーだけじゃない、スピードやテクニックもダンゴロウより速いかも！」

ハルカの言う通り、スミロドンの能力は全てダンゴロウを上回っている。

「スミロドン、原始の息吹！」

青白い炎が吐かれ、攻撃を受けたリープンは煤塗れで倒れた。

「リップウ……」

最後に途切れ途切れで鳴き、気を失った。

「リープン戦闘不能、スミロドンの勝ち！」

ツチャが判定を下し、サトシはリープンを戻し――――

「フアマー、もう一度頼むぞ！」

フアマーが戦場に立つ、先のダンゴロウ戦のダメージもあり、少し

不安も残っている。

「ファマー、放電だ！」

「スミロドン、躲して！」

ジャンプして放電を躲すスミロドン、その青い身体は電撃に包まれる。

「スミロドン、ワイルドボルト！」

「真っ向勝負なら受けて立つ！ファマー、火の粉！」

サトシの叫びも虚しく火の粉は弾かれ、電光石火の如く突撃したスミロドンの攻撃が決まり、ファマーは呆気なく戦闘不能になった。

「ファマー戦闘不能、スミロドンの勝ち！」

ワイルドボルトは攻撃が決まった際、自身へのダメージのリスクを伴う。

汗を流しながら吼えるスミロドンを見て、サトシはファマーを戻した。

「ありがとうファマー、お前の努力は無駄にしない」

と労い、モンスターボールをホルダーに付ける。

「岩タイプだけじゃなく…電気タイプも持ってるの！？」

ワイルドボルトを目の当たりにし、ヒカリは驚きの声を上げる。

「これは苦しい勝負になるね…」

デントが小さく呟き、タケシも相槌を打つ様に無言で頷く。

「ピカチュウ、頼むぞ」

「ピカ！」

サトシの言葉に促され、ピカチュウはスミロドンの前に立つ。

「良く戦いましたね、ですがピカチュウでスミロドンの精悍なる牙と瞬発力に太刀打ち出来ますか？」

ニヤリと笑い、ハタナはサトシを挑発する。

「太刀打ち出来る？それは違います、目の前の相手と全力で勝負を
楽しむだけです」

拳を天に突き出し、青年の口の端が釣り上がった。

「俺は戦い続ける、例え壁が立ち塞がろうと俺はそれを壊す！」

誰もがその宣言に目を見開き、あのゲンタまでも口をポカンと開いている。

「ピカチュウ、電光石火！」

「！スミロドン、ワイルドボルト！」

電光石火に対し、ワイルドボルトで攻めるスミロドン。ピカチュウはその特攻を避け、アイアンテールで軌道を反らした。

「グアウッ!?」

「ピカア!!」

後ろから電光石火を決められ、スミロドンは横たわる。

「スミロドン、立って! 立つのよ!!」

敬愛する主人の激励に応えるかの様に吼え、立ち上がったスミロドンはピカチュウを威嚇する。

「あのスミロドンとハタナさん、そしてピカチュウとサトシ。何方も似ているな」

「ええ、同じポケモンとトレーナーとして繋がりが合っている」

カスミとケンジが微笑み、攻防戦は続いてく。

「アイアンテール!」

「切り裂く攻撃!」

火花が散り、2匹は一定の距離を取る。

「次で最後です! スミロドン、マッハボルト!」

バリバリッ！とより一層に激しい雷を纏い、スミロドンは突撃する。

「ピカチュウ、ボルテッカー！」

ピカチュウは激しい稲妻——ボルテッカーを纏う。二つの雷が激突し、バトルフィールドは閃光に包まれる。

一方此方はロケット団、彼等3人組はサトシとハタナのジム戦が行われている間、ポケモンを頂こうとしていた。

「何だか久し振りに悪い事が出来るって、良い気分だニャ！」

「おう、まさかのジャリボーイもジム戦の真っ最中……」

「さあばやばやしないで、今の内に……！」

すると強い振動が館内に響き渡った、ピカチュウとスミロドンの激突と言う事を知らず、ロケット団は慌てる。

「ゴロ？」

『へ！？』

岩で出来た保管庫の壁、彼等の真後ろから声が聞こえた。振り返るとゴローニヤがいた、見張りと思われるゴローニヤは助走を付け……

「ゴロオオオッ……！」

加速を掛けた捨て身タックルで Rocket 団を吹っ飛ばす。

「ちよつとオ！ 私達の出番、今回これで終わり！？」

「あんまりだアッ！！」

『やな感じ～～～～！！』

そんなジム戦の裏側で小さな活躍があつた事を知らず、バトルフィールド。

煙が晴れていき、埃塗れのピカチュウと満身創痍のスマイロドンが立っている。

「グ……ア……」

虚ろに開いた精悍な目は静かに閉ざされ、スマイロドンは横たわつた。

「スマイロドン戦闘不能、ピカチュウの勝ち！ よって勝者、チャレンジャー・サトシ！」

ツチャがサトシの勝利を宣言、それを聞いた本人は良し！と拳を天に翳した。

「やったぜピカチュウ、俺達の勝利だ！」

二つの手がコツンとぶつかり、最強のコンビは微笑む。

「スマイロドン、お疲れ様」

ハタナは抱えていたスミロドンを戻し、優しく労った。

その間、ストーンジムは歓喜に包まれた。夕方、ストーンジムの入り口にて。

「サトシさん、今日は貴方の様な素敵なトレーナーに出会い、最高の経験をしました。」

ありがとうございますとお礼を言われ、

「そんな事はありません。俺は唯一人のトレーナーとして、熱いバトルを出来ただけです」

今日のバトルは忘れませんと告げられ、ハタナは小さく笑う。

「さあ、受け取って下さい。ストーンジムを勝利した証、コスモバツジです」

以前タツキが見せてくれた宝石を象ったバツジ、それを受け取り天に翳す。

「コスモバツジ、GETだぜ！」

「ピッピカチュウ！」

3年振りのジム戦、衰えたにも関わらずそれは未だ健在している。

「所で皆さんはこれから何処に向かわれるのですか？」

ハタナの問いにうっと言葉を詰まらせる一行。

「やべエ…考えて無かったぜ」

「此処に来るまで大変だったからな」

パジエラの言葉にタケシも同意する、皆苦笑いを漏らす。

「サトシさん、2個目のバッジを目指すのなら…ブリスシティは如何でしょうか？」

「あ、其処は確か…」

「嗚呼、荒くれ者達が牛耳るウエスタンタウンだよな…途中には格闘・虫ポケモンが住まうシユラの森があるよな…？」

ツチヤの言葉にミヤギがそう言った。それと、とハタナはヒカリを見る。

「ヒカリさんはポケモンコーディネーターですよ？でしたら、シユラの森の手前にあるバーミントウンでポケモンコンテストがありますけど…」

「バーミントウンか…！」

ヒカリは胸に期待を膨らませ、サトシは微笑む。

「さあ、次の目的地も決まった事だし、今日は寝るぞ！」

『おう！』

「了解…」

1個目のバッジ、コスモバッジを手に入れたサトシ。

次なる目的地はヒカリのポケモンコンテストがある、バーミントウ。ヒカリは二つ目のリボンを手に入れる事が出来るのか？

ジャッジメントの居城・カオスパレスの大広間、此処にはカラドや各部隊の隊長も揃っている。

「カラド様、クレイは相変わらずだけど…良いのかい？」

「構わない、彼には私が連絡するよ」

ルベルヴの問いに怪しく微笑むカラド。彼は仮題を語り出す。

「各隊長に知らせる、本日より我等に新たな同士が加わる」

その知らせにリク、レイラ、ルベルヴ、ラセツ、マンダは驚き、

アスラウド、ライト、不気味な白肌の魔法使いの様なローブの男は不適に笑み、

ラストチア、ザンクス、ライザは眉を顰めた。

「新たな同士かア…楽しみだねエ…ククク」

「そうだクラウザー、その者には君達と“アスリウス”の一人に就

任させる」

男——クラウザーは不気味に笑いつつ、カラドの話を聞く。

入れ、と言うと背後の巨大な扉が開いた。

扉の奥から沼気のような黒い霧が出て来た、何人かがそれにゾクッと異様な殺気を感じ、足音を聞く。

暗闇から“それ”は躊躇い無く姿を見せた。

強靱な鎧、

兜、

ブーツ、

肩、

マント。

その者に身に着けられた物は、何から何まで“黒”だった。

腰には剣を携え、両腕は包帯で巻かれている。目の幕も黒く、瞳は血の様に赤くとても不気味だった。そして顔も包帯で隠され、謎に包まれている。

「…紹介しよう、本日付けで入隊、そして“アスリウス”の13人目の幹部。通称」

「……“黒刀”闇の騎士」

名乗ったその男は、とても冷たかった。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

#25 ストンジム！VSジムリーダー教師・ハタナ（後書き）

次回は赤目のオニゴーリの話です。

#26 Making a face (the first part)

8月7日 PM 10..53

ジャッジメントの居城、カオス・パレス

カラドの私室―――司令室では、カラドがガラス越しの霧で隠れた空を見ている。

「失礼しますよォ」

聞き慣れた声に入れと呟くカラド、扉が開くとクラウドが入ってきてベンチに座り込む。

「次のブリスシティのメテオナイト、俺が率いる霊王部隊が指揮を執りますけど、宜しいですかァ？」

ケラケラと笑うクラウド、所でと言葉を区切り。

「一昨日入ったあの新人、闇の騎士は自由に行動させて良いんですかァ？」

「何が言いたい」

キヒヒと笑い、視線をカラドから反らすクラウド。

「部隊を持たさず、敵を容赦なく殺す、不審な行動もある。怪しさ満載の男を入れて大丈夫でしょうねェ」

「それなりのリスクは伴っている」

カラドから背け、不気味に笑うクラウドは部屋を退室。

すると再び部屋の扉が開いた、クラウドザーと思ったが違った。

「何か用かな？ラセツ」

格闘部隊隊長“覇王”ラセツだ。

「オス！盗み聞きして申し訳ない、次の任務：クラウドザーの下に我々格闘部隊を置いてくれませぬか！？」

土下座して申し出るラセツ、待っていたと言わんばかりにカラドは言った。

「許可しよう」

それを聞き、ラセツが号泣し、カラドは笑みを引き釣らせたのは言うまでも無い。

8月8日 AM 13..42

コスモバッジをGETし、ストンシティを旅立ったサトシ達一行は、ポケモンコンテストが開催される町：バーミントウンを目指していた。

今彼等はストンシティの出口とも呼べる山道を下っている。

「チ…ハア…ハア…ヂグジョー！山道がこんな…ハア…ハア…過酷

だなんて……聞いてねエぞオ!!」

「全くだよ……! ゼエ……ゼエ……!!」

最後尾でフラフラ歩くケンジとミヤギ、暑さに慣れていないのか息を激しく切らしている。

「二人共、もう少し先に山小屋が見えるからそれまで頑張って!」

「ちったアやる気を持てよ、男が弱音を吐くんじゃねエよ」

「毎朝鍛えまくつとる筋肉コンビの片割れに言われたくねエやい!」

逆ギレしたミヤギがパジェラに突っ込む、それを気にせずサトシはジッとガイドブックを呼んでいる。

「ブリスジムのジムリーダーは悪タイプの使い手……今まで会ったジムリーダーに、悪タイプのジムリーダーはいなかったなア」

今まで出会ったカントーイッシュ地方のジムリーダーの顔を思い浮かべた、ガイドブックを閉じてボソツと呟いたサトシ。

「確かにいなかったな。サトシ、今度のジムリーダーは強敵だぞ?」

「嗚呼、任せろ」

拳を握り締め、自分に言い聞かせる様に答える。その笑顔にヒカリとアイリスは顔を赤く染め、ある事を企てた。

『ねエサトシ、私と手を繋いで……!?!』

出て来た言葉が同時にハモリ、二人の少女が睨み合う。

「ヒカリ、子供の癖に真似しないでよ。サトシと手を繋ぐのは私なの」

「ち・が・い・ま・す・〜！サトシは私と手を繋ぐの！」

火花を散らし睨み合う二人の乙女、するとゴーリ！！という鳴き声が聞こえてきた。

「ん？」

「何…今の？」

カスミとハルカが耳を澄ませると、何かの鳴き声は段々近付いてくる。

ゴロゴロと岩と共に落ちてきて、現れたそれは…。

『ギアアアアアアアッ！！！！』

毎度お馴染みのロケット団、

「ゴオオオリッ！！」

そして彼等を後ろから追いかける、野生のオニゴーリだ。

「ロケット団！！？」

「それにあれは…オニゴリー！」

目の前に現れた彼等はその存在に驚くが、聞こえてないのかロケツト団はオニゴリーから必死に逃げている。

「ねエサトシ！何か此方に向かって来てない！！？」

「何かも何も確実に来ているだろ！しかもあのオニゴリーの目、少し変じゃねエか？」

確かに言われて見ればオニゴリーの目は本来海のように透き通った群青色だが、目の前にいるオニゴリーは赤い目を宿していた。

「異能体…か！？」

「解らん、だが静止させるのが最適だ」

ポツリと呟いて地を蹴るゲンタ、あつと言う間に空を飛んでオニゴリーに踵落としを決めた。

「ゴォ！！？」

脳天に激痛が走り、オニゴリーはうつ伏せに倒れた。

「ひィィ…！！た、助かったァ」

「し、死ぬかと思ったわ」

「つ、疲れた…」

3人がそれぞれ安堵の声を漏らし、サトシが彼等に近付く。

「よっ何でオニゴーリに追われていたんだ？」

『うげっ！ジャリボーイ！！』

サトシの存在に目が飛び出る程に驚き、ロケット団は後退った。

「知らないわよ、あのオニゴーリをGETしようとしただけよ！」

「そうそう。ちゃんと作戦を立てて行動しようとしたらあのオニゴーリ、急に攻撃して来たんだよ」

ムサシとコジロウからの説明に頷き、ヘエ…と彼は声を零した。

「赤い目のオニゴーリ、本当に怖かったのニャ！」

「解った解った……それにしても、オニゴーリの目は普通赤じゃねエよな…？」

ええ、とカスミが返事を返す。

するとオニゴーリの身体が動き出し、雄叫びを上げて立ち上がった。

「目を覚ましたぞ！」

タケシがそう言ってモンスターボールを投げ、ウソツキーを召還した。

「ゴオオリッ！」

「ウソツキー、捨て身タツクルだ！」

オニゴーリの頭突きに対し、ウソツキーはタケシの指示で捨て身タツクルで相殺する。

「ゴオオッ!!」

だがオニゴーリの目が赤く輝き、物凄い勢いの頭突きでウソツキーが吹っ飛ぶ。

「ウソツキー!!」

「おいおい待て待て…あのオニゴーリ、相性も関係なしに強いのか？」

容赦ないオニゴーリの猛追に冷や汗を肌で感じ、ミヤギはボールを取る。

オニゴーリの口に冷氣が集まり、冷凍ビームを放とうとする。

「テツケン! マッハパンチだ！」

突然崖から背中に拳を携えたポケモンが現れた。

「テツケッ！」

テツケンと呼ばれたそのポケモンは勢い良く地を蹴り、

「ゴオッ!？」

オニゴーリを殴り飛ばした、オニゴーリは岩に激突して気絶した。

「あれは？」

サトシは突然登場したテツケンに吃驚し、ポケモン図鑑を向けた。

《テツケン・拳ポケモン。拳で頭を掴み、投げ飛ばす事が出来る。
空高くジャンプする事が可能だ》

「おい！此方だ！！」

後方を振り向くと黄緑色のショートヘアの少年が現れ、此方に向けて手招きしている。自分達を誘導するつमりの様だ。

「ついて行こう」

サトシは言われるがままに少年の方へ走り出す、仲間達も彼を追っていき、ロケット団もそれについて行った。

「ありがとう、助かったよ」

「どうって事ねェさ。困ってる人を放って無いし」

少年とテツケンを先頭にサトシ達は坂道を上る、ロケット団もまだついて行っている。

「俺はテツペイ、山から見える小さな村に住んでる。隣にいるテツケンは相棒だ」

テツケ！とテツケンが拳を突き出し、テツペイと呼ばれた少年は小さく笑う。

「俺はアツシュ、此方にいるのは仲間のカスミ、タケシ、ハルカ、ケンジ、ヒカリ、アイリス、デント、ミヤギ、パジエラ、そしてゲンタだ」

『宜しく』

「嗚呼！宜しくな！」

タケシ達は一礼するとテツペイも一礼する、ゲンタはふんつと鼻息を立ててサトシ達から距離を取る。

「？何なんだ、彼奴」

「嗚呼大丈夫さ、彼奴は少し人見知りだから気にしないでくれ」

ゲンタの事を誤魔化して説明するサトシ、その様子を本人は眉を顰めて眺めた。

「そう言えばテツペイ、どうして貴方は村の人なのにこんな山の中に？」

ヒカリが首を傾げながらテツペイに聞いた。彼はパチン！と指を鳴らしてヒカリを指す。

「勿論あのオニゴリーをGETする為さ」

『オニゴリーを？』

彼等の驚きの声を聞くと、テッペイは嗚呼と言って頷く。

「あのオニゴーリは気性が荒くてね、この辺のポケモン達は彼奴に見つからない様に隠れ家を作ってんのさ」

「見つかると…どうなるんだ？」

タケシが傾げると、テッペイは空を仰いだ。

「そりゃあ彼奴はこの山全体を自分のテリトリーにしているからな、隠れ家を壊していくよ。でもな、彼奴にも良心もある」

「嗚呼…独りぼっちだから寂しいのか、オニゴーリは」

タケシの言葉に笑みを零す一同、ゲンタも釣られてフツと笑う。

「そうさ、それまでは良かったんだ——一ヶ月前まではな」

「一ヶ月前まで…？」

テッペイの表情が曇りだし、不審に思いながらも山小屋の中に入り、焚きに火を付ける。

「一ヶ月前…オニゴーリの様子が急に変わったんだ」

「…あの赤い目になった事と何か関係があるのか」

嗚呼、と頷くテッペイ。

「あの赤い目が変わった途端、オニゴーリはまるで人が変わった様だった。隠れ家は壊すのは勿論、ポケモンや人間を襲い、村にも被害を出したんだよ」

「何だって!？」

ケンジは驚きの声を上げ、テッペイは俯いた。

「村長はそれにキレてオニゴーリを山から追い出そうと村の若者達を束ねたが…オニゴーリには歯が立たない」

俺は何か裏があると思い、オニゴーリをGETしようと山籠もりを始めた。

「村長達の反対を押し切って、もう一週間になる」

ヘエ…とサトシは声を漏らし、テッペイを凝視する。

「やっぱり赤い目って言う点が怪しいわよね…」

「本来オニゴーリは人間を襲わない筈、其処が気になる」

「テッペイ君、もし良かったら俺達に協力させてくれるかい？」

「手伝うって、本気か!？」

コクリと頷く一同にテッペイは呆氣に取られ、テッケンも同じ表情をしている。

「勿論だ、俺達はこのいう事に首を突っ込むのが好きなんだ。言え

た事じゃ無いがな」

乾いた笑みを見せるサトシを見れば、他の10人も同じ表情をしている。

「…ありがとう、恩に切る」

テッペイとテツケンが潔く頭を下げる、丁度その時サトシが立ち上がった。

「どうしたの？」

「オニゴリーの波導が動いた…!! その先には村があるぞ！」

「…!! 何だと!？」

血相を変えたテッペイとテツケンは戸を乱暴に開け、そのまま走っていった。

「テッペイ君！」

タケシが彼の名を呼ぶが、その姿は次第に見えなくなった。

「おい、このままだと村の分からず屋共がオニゴリーを殺しかねんぞ」

「解っているさ! 皆、急いで村に行くぞ！」

『おう（ええ）!』

サトシ達もその後を追いかけて、山を下山していった。話を聞いていたロケット団も、仕方なくついて行く。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

#27 Making a face (the final part)

バーミントウンを目指す途中、ロケット団と共に赤い目のオニゴリーの襲撃を受けたサトシ達。

暴走するオニゴリをGETしようとする少年、テッペイと相棒のテッケンに助けられ、事の経緯を聞かされる。

オニゴリの次の狙いは村だと確信し、サトシ達とテッペイを村を目指す。

一方、山の下のある村。オニゴリは牙で藁を噛みつき、食物を凍らせていく。

「村荒らしを捕まえろオ！」

その言葉と共にポケモンに攻撃の指示を出す村の若者達、若者達も武器を取ってオニゴリに襲いかかる。

だがガキン！という音と共に、スコップの先端が折れる。

「ゴオリ！」

オニゴリは全身を回転————ジャイロボールを繰り出し、村人とポケモン達を吹き飛ばす。

『うわアアアアアアッ！』

吹き飛ばされた村人達は倒れ、痛みに悶える。

「何という事じゃ…！折角皆で耕した作物が…おのれオニゴリめ！」

村長は怒りに震え、スコップを握る手を強くする。

「早く終わらせて下さいよ、私は貴方方の事を信頼して言っているのですよ」

「解っております役人殿」

役人と呼ばれた男は黒髪で伊達眼鏡を掛け、黒いスーツを着ている。男は微笑み、村長に言う。

「若者達よ、イング王国の為に…そして村の未来の為に奴を捕らえようぞ！」

『オオooooooooo!』

村長の号令で拳を突き出して叫ぶ男達、その傍らでスーツの男は怪しく微笑む。

「儼は村や孫を傷つけたオニゴリを許さん！絶対にな！」

と言って村長はモンスターボールからブーバーを召還する、ブーバーは天に向けて火を吹き、オニゴリを睨んだ。

「ブーバー！炎のパンチじゃ！」

村長の指示で炎を纏った拳をオニゴリの額に当てるブーバー。

しかしオニゴーリは熱で痛がる様子を見せず、その名の通り鬼の形相で猛スピードで突き進んでいく。

「ゴオリッ！」

「ブバァッ！！？」

ブーバーを冷凍ビームで氷付けにさせ、オニゴーリは村人達を睨む。

「クソッ！いい加減にしろよ！？さもねェと…！」

若者の一人が銃を取り出し、銃口をオニゴーリに向けた。

「止めろ！」

山の坂を降り、オニゴーリを庇うかの様にサトシが村人達の前に立った。続いて仲間達やテッペイも姿を見せる。

「村長！皆！落ち着いてくれ！」

「テッペイ！今更何しに来たのじゃ！退くのだ！」

テッペイの意見を村長は否定し、他の若者もそうだ！と触発する。

「其奴の所為で他の村人が何人も怪我してんだぞ！？そんなの許せるか！」

「余所者を連れて帰って来やがって！其奴等の肩を持つってのか！？」

「王国からの役人も来てんだ！テッペイ、オニゴリーを説得するなんて真似は止めとけ！」

村人からの批判の声にテッペイは齒を食いしぼり、拳を震わせる。

「ねエ…何かやばくない？」

「オニゴリーGETしようとしたのに、そう言う雰囲気じゃないよな」

「怖いニャ〜〜…」

ロケット団はしっかり空気を読み、崖から村の様子を見る事にした。

「イング王国の役人が…？」

デントはチラッと役人を視界に捉える、それを気にせず役人は村人達を言う。

「皆さん。あの様な余所者は放って置いて下さい、今はオニゴリーです」

それと、と視線をサトシ達に向ける黒スーツの男。

「貴方達もオニゴリーの暴走を鎮圧するなら、手を貸して頂けたら助かりますよ。まあ無理な話ですがね」

「デメエ！」

笑う男に対して血管を浮かばせ、テッペイは獣の如く吼える。

「止めるのなら協力しますよ」

「はア!？」

サトシの予想し難い返答にテッペイは驚く、男は彼に対してフンツと鼻で笑う。

「但し、俺一人でやらせて貰います」

「何!？」

男も予想出来なかったのか焦り出す、その様子にゲンタは眉を顰めた。

「あんた一人で!？無理だ!あのオニゴーリに勝てる訳が無い!」

「おい!あんた達も何か言ってくれよ!!仲間なんだろう!!?」

テッペイ達は口出ししないカスミ達に言うが、彼等は首を左右に振った。

「大丈夫だ。彼奴なら一人で出来るよ」

「ええ、あの男なら止められるわよ」

「信じてみな、テメエが信頼する男をな」

タケシ、カスミ、パジエラの言葉にテッペイや村人達は啞然とする。

サトシは村人達に背を向け、オニゴーリと向かい合う。

「ピカチュウ、電光石火で翻弄しろ」

ピカチュウは彼の肩から降り、地を蹴って超スピードでオニゴーリの周りを走る。

「ゴォー!!」

それに驚いてオニゴーリは周囲に冷凍ビームを放つが、中々当たらず。

「オニゴ！」

全体を回転させ、オニゴーリはジャイロボールを繰り出してピカチュウに接近する。

更に噛みつく攻撃が繰り出されるがピカチュウは簡単に避ける、その姿にテッペイ達は目を見開いた。

「凄ェ！オニゴーリと互角に戦ってる！」

「否違う！ありゃあそれ以上だ！」

若い男達が騒ぎ出す、その証拠にピカチュウはオニゴーリの攻撃を次々と躲していつてる。

「ピカチュウ…凄いニャ」

「チャンピオンシップの時より更にパワーアップしてるぜ」

「どんだけ強くなる気よ、ピカチュウもジャリボーイも」

ロケット団もピカチュウのスピードに驚く、黒スーツの男は齒をギリッと食いしばった。

「ピカチュウ、オニゴーリを俺の方へ引き付けてくれ」

誘導される様にオニゴーリはピカチュウを追う、サトシは右手の指を骨を鳴らしグローブの引っ張る。

「ゴオリ!!」

『危ない!』

村の子供達や女達が叫ぶ、サトシはオニゴーリの頭に手を差し伸べた。オニゴーリはサトシから通り過ぎた後、動作を止めた。

「…ゴ？」

目が群青色へと変わり、オニゴーリは何が起こったのか解らず辺りを見回す。

「何だ…？」

「オニゴーリの様子が可笑しいぞ」

村人達が驚く中、サトシが村長に近付く。

「可笑しいんじゃない、元に戻ったんです」

「どういふ…！」

村長は彼の手に持つチップを見た、村長はまさか…とオニゴーリを見た。

「あのオニゴーリは操られておったのか？」

「ええ、コントロール式のチップを付けられてね。」

「チップウ…！？」

『ええええええッ！？』

皆予想外の出来事に驚愕し、サトシはチップを握り潰した。

「恐らくオニゴーリが寝ていた時に取り付け、洗脳させたんでしょ。何者かがポケモン達を犯人に仕立て上げる為に」

「しかし誰がこんな事を」

「操られたオニゴーリは莫迦だが、操った本人も相当の莫迦だ」

「！？」

ゲンタが放った左拳が役人の男の右頬に食い込む、吹っ飛ばされた男はそのまま横たわる。

「や…役人殿」

「クッ：暴力は行けませんね。無実の私にこのような事を」

男は不適に笑いゲンタを見る。

「では無実の貴様が何故時計を二つも持つ」

「！！！！」

ギクツと男は身体を真っ直ぐにさせる、村人達は疑いの目を男に向ける。

「もう解っただろう。此奴はこの村を村人ごと滅ぼすつもりだったのだ」

『え！？』

これにはサトシ以外の仲間も驚き、全員の目が男に合わさった。

「もう貴様は言い逃れは出来ないぞ、イング王国の腐れ役人が」

否、とゲンタは呟く。

「それとも：こう言った方が正しいか——ジャッジメントの副隊長の一角、“嘲り”のミュー」

その瞬間、男の顔が真っ青になった。テッペイは驚いて男を見る。

「ジャッジメントって：あのジャッジメントか！？」

村人はどよめき、男を見つめる。フッフ：と、男は不気味に笑う。

「そうだ……その通りだよ、**“殺鬼”**の言う通り俺は王国の使者でも何でもねエ！」

男の口調が変わった途端、衣服を全て脱ぎ捨てた。その下には白顔で赤と青のメイク、ピエロの衣装を着こなした姿の男。

「俺様の名は“嘲り”のミュール、ライト隊長の指揮する白刃部隊の副隊長さア！」

ポケットからモンスターボールを三つ投げ、中から3体のヒトモシが現れる。

「俺達白刃部隊が使うポケモンはタイプごとに扱う事、オニゴリーをチップで洗脳しこの弱い村を吹き飛ばしたかったが……よりにもよって小賢しい悪意を持つ人間の味方をするとはな、ポケモンマスター！」

コントロール式の時計を踏み潰し、ギロツとサトシを睨むミュー。

「ポケモンマスター……え！？アツシュってそんなに凄エ奴だったのか！」

「そうよ。因みにアッシュは偽名、本名はサトシって言うの！」

「おいヒカリ……自分で名乗らせてくれよ」

ポリポリと頭を掻き、サトシは困った様な顔をし、息を吐く。

「こんな若い男が…ポケモンマスター!?」

「そう言えば聞いた事がある、各地方で暗躍していた多くの秘密結社が壊滅した事件に：一人の少年が関わっている事を」

「その少年が：このポケモンマスターなのか？」

村人達は疑わしい目線でサトシを見つめる、痺れを切らしたミューはヒトモシ達に指示を下した。

「ヒトモシ共！シャドーボールを浴びせろ！」

3体のヒトモシはシャドーボールをサトシに向けて放った、しかしそれは彼に届く事は無かった。

「グエツグ」

青紫色をしたポケモン――グレッグルが拳で全て叩き落とし、タケシと共にミューと向かい合った。

「何だテメエ？雑魚が威勢良く俺の前に出て来たな」

「雑魚かどうかは自分で確かめた方が良いぞ？」

平然と答えるタケシに眉を顰め、ミューはヒトモシ達に攻撃の指示を与えた。

「ヒトモシ、煉獄で払い退けろ！」

「グレッグル、躲せ！」

合わさった攻撃を難無く躲し、グレッグルは両手を天に突き出す。

「岩雪崩！」

空から多数の岩が出現、ヒトモシ達はそれを喰らってダメージを受ける。

「グレッグル、岩雪崩を覚えたのね！」

グレッグルは何気なくガッツポーズをアピールし、左手が紫色に変わった。

「半月以上このドクターの仕事だけをしてた訳じゃない！毒突きだ！」

グレッグルの紫苑色の拳が決まり、ヒトモシ達はぐったりして倒れた。

チツと舌打ちしてヒトモシ達を戻し、新たなモンスターボールを取ったミュー。

「何処まで俺等の邪魔をすれば気が済むんだ！^{おど}躍れ、ケンタロス！」

投げられたボールからケンタロスが姿を見せ、鼻息を立てて地を蹴っている。

不適な笑みを零すミュー、そんな彼に余り動じないサトシ一行。彼等を見比べ、テッペイは動いた。

「なア：此処は俺に任せてくれないか」

は？とサトシは驚き、顎に手を当てて暫く考え込んだ。そして…。

「良いぜ。テッペイ、無理だったら交代するぞ」

と彼とタケシの掌をタッチし、テッペイとテツケンは無ミューとケンタロスの前に立ちはだかる。

「おい偽役人、これ以上村で暴れんな！お前を一撃で倒してやる！」

勇ましい発言にミューは眉を顰め、鋭い目つきでテッペイを睨む。

「はア？倒すウ？ガキが頭に乗るんじゃないぞ。例えお前が戦っても、ケンタロスに勝てると」

「勝てるさ」

「!!？」

迷い無き言葉、テッペイの宣言にテッペイは驚くもやってみな！と高らかに叫んだ。

「ケンタロス、突進！」

「テツケン、見切れ！」

テツケンはジャンプして躲し、ケンタロスの後ろに回り込む。

「ビルドアップ！」

テツケンの発達した筋肉が更に発達し、力瘤を見せつける。

「舐めたガキだ！ケンタロス、ギガインパクトで決めてやれ！」

薄紫の渦が螺旋状にケンタロスを纏い、突撃。テツケンの右拳は赤く染まり、

「テツケン、マグナムパンチだ！」

気合パンチやマッハパンチよりも優しく、鋭いパンチが額にぶつかり……ケンタロスをミュー諸共空へ吹き飛ばした。

「俺が…このミュー様が負けるだとオオオオオオッ！！？」

男の悲痛な言葉は彼等に届かず、空の彼方へと消えていった…。

「凄エ…！」

見えなくなったミューの姿を確認し、テツケンに視線を移す一同。其処へ村長がサトシに近付いた。

「ありがとうございます、もう少してジャッジメントに騙されオニゴリを殺してしまう所でした」

申し分無く頭を下げる村長。それ程罪悪感があつたのだろう。

「そんな事はありません。俺達はテツペイのサポートをしただけ、それに」

オニゴーリも許してくれる筈です。

そう言って村の子供達とじゃれ合うオニゴーリを見るサトシ、それを見て仲間達やテツペイ…村長を含めた村人も安堵の表情を零した。

“ 嘲り ” のミューを退け、赤い目のオニゴーリの事件を解決したサトシ一行。テツペイ達村人とオニゴーリも絆を深め、バーミンタウンを目指すサトシ達の旅はまだまだ続く

T o b e c o n t i n u e d

#27 Making a face (the final part)

次回は無印から、懐かしのあのキャラが登場します。

ヒントはアニメ初期第8話です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1581w/>

世界革命戦記

2011年12月5日20時52分発行